

## (4) 金属製品

銭 (第130図, 1~17, 図版80)

1は開元通寶である。「通」字の下に星文を有する。開元通寶は唐銭で初鑄は621年(武徳4)であるが、1350年頃には本邦でも模鋳される。2は乾元重寶当十銭である。唐銭で、初鑄は758年(乾元元)であるが、本邦でも中世に模鋳される。3は至道元寶である。北宋銭で、初鑄は995年(至道元)であるが、本邦でも中世に模鋳される。字体は真書体である。4は咸平元寶である。北宋銭で初鑄は998年であり、本邦でも中世に模鋳されている。5は天禧通寶である。北宋銭で、1017年(天禧元)に鑄られたものである。6は天聖元寶である。7・8は皇宋通寶である。北宋銭で初鑄は1038年(寶元元)であり、本邦でも1340年頃に模鋳される。7・8とも篆書体であるが、字形は異なる。9は熙寧元寶である。北宋銭で、初鑄は1068(熙寧元)である。字体は篆書体である。10~12は元祐通寶である。北宋銭で、初鑄は1086年(元祐元)であるが、本邦でも中世に模鋳される。字体は10~12は篆書体である。12は鑄不足による円形の欠けが2箇所みられ、模鋳銭と考えられる。13は聖宋元寶である。北宋銭で、初鑄は1101年(建中靖國元)であり、本邦でも中世に模鋳される。13は鑄不足による孔が多くみられ、模鋳銭と考えられる。字体は篆書体である。14は大觀通寶である。北宋銭で、初鑄は1107年(大觀元)であり、本邦でも中世に模鋳される。15は政和通寶である。北宋銭で、初鑄は1111年(政和元)であり、本邦でも中世に模鋳される。15は鑄不足による孔があり、模鋳銭と考えられる。字体は楷書体である。16は大定通寶である。金銭で、初鑄は1178年(大定元)である。17は寛永通寶である。

遺構の併存資料として複数枚出土した銭貨は、以下のとおりである。SD301からは咸平元寶(4)、皇宋通寶(7)、この他に図示していないが開元通寶2枚、皇宋通寶1枚、元豐通寶(北宋銭、初鑄1078年)2枚の計7枚。SK1371からは開元通寶(1)、乾元重寶(2)、至道元寶(3)、皇宋通寶(8)、熙寧元寶(9)、元祐通寶(10・11)、大觀通寶(14)、政和通寶(15)、錢文不明の図示していない1点の計10枚。SK1208からは、天禧通寶(5)の他に、図示していないが皇宋通寶1枚の計2枚が出土している。

刀子 (第131図, 18~20, 図版79)

18はSE1108、19・20はSE508から出土した。鉄製の本体のみの出土で柄は無い。20は関部から切先まで遺存しており残存長は14.5cmである。両側作りとなっている。

雁股鎌 (第131図, 21, 図版79)

21はSE1001から出土した。刃部と茎部の先端を欠損し、残存長は5.7cmである。刃部は薄く扁平で、関部と茎部は断面楕円形を呈する。関部は台形状に広がっている。

握り鍔 (第131図, 22, 図版80)

22はSK1278から出土した。片側半分と刃部を欠損する。

釣針状製品 (第131図, 23, 図版79)

23はSE508から出土した。長さは2.9cmで、断面は直径0.3cmの円形を呈する。輪状の湾曲部に至る前に一旦屈折させる。先端は尖り、逆刺は無い。

釘 (第131図, 24~29, 図版80)

24は包含層、25はSE1229、26はSK743、27はSE1299、28はSK1296から出土した。24は頭部が細く、26・27は両端を欠損しているため確定ではないが釘と考える鉄製品である。断面は25・26・29が正方形、24・27・28は長方形である。28・29は頭部を折り曲げ扁平につぶしている。29は完形で、

全長8.1cm、断面は一辺0.7cmの大型の釘である。

引き手金具（第131図、30）

30はS D401から出土した。環状部の断面は直径4mmの円形を呈し、打ち込み部は重ねて扁平に延ばす。

煙管（第131図、31・32、図版79）

31は雁首で、銀製か。火皿は小型で、油返しの湾曲がほとんどなく首部が火皿に直接取り付く。首部は舟形を呈し、上面は浅く窪む。

32は銅製である。羅字は首部と吸口より太く、段ができるところがあるが、雁首から吸口までが一体となつた延煙管である。油返しの湾曲は羅字部を曲げることにより作り出している。火皿は欠損しているが、残存部の内面に塗金がみられる。

用途不明品（第131図、33）

33はS E693から出土した。厚さ0.8cmの板状で先端は斜めに切って尖らせる。

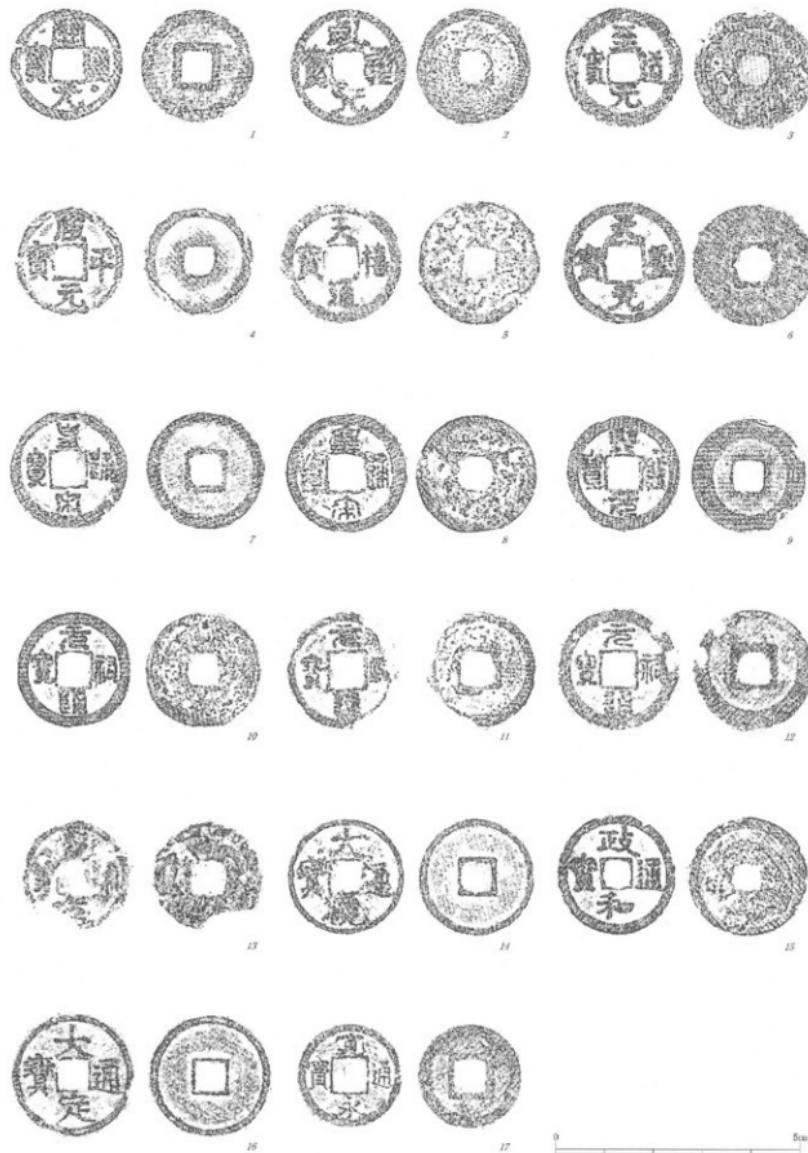
輪羽口（第131図、34～39）

35・38はSK404、36はSD301、37・39はSE850から出土した。34は先端部が残存しない破片でガラス化した気泡の多い溶解物が付着する。一方は使用過程における二次的被熱のため黒変し、もう一方は素焼き本来の橙色を呈する。35・36・38・39は炉側の先端部で、先端部を中心にガラス化した溶解物が付着し、35・38・39の溶解物には鉄も含まれる。先端部から外面にかけては二次的被熱のため黒変する。37は付着物がなく被熱による変色も少ないため送風口側の破片とみられるが先端部・基部は欠損する。径は6～7cmに復原され、小振りのものである。外面は不定方向にナデて仕上げる。37・39は胎土に骨針を多く含む。

鉄滓（第132図、40～61、図版81～83）

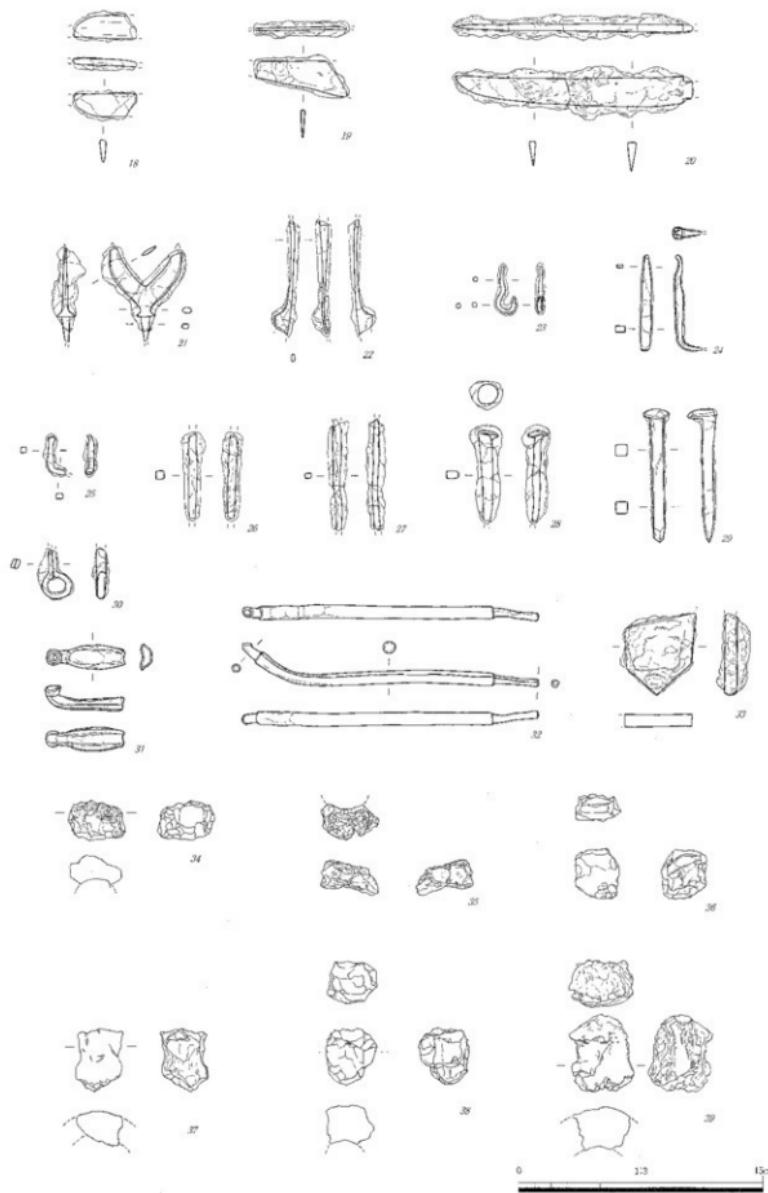
40～61は鉄滓で、径は1.9～9.0cm、重量は6.2～153.8gである。40はSB18を構成するSP676、41はSE503、42・59はSE508、43～45・48はSD401、46・51・54・61はSK404、47はSE1204、49はSK527、50はSE451、56・57はSD453、58はSD1485、60はSE504から出土した。すべてに、磁石に対しての微弱な反応が見られる。小振りのものが多く、形状は51～55・57～61等橢形を呈するものがある。40・49・51・52・61は木炭痕が残る。規格や形状等から、ほとんどが鍛冶滓と考えられる。

（越前慎子）



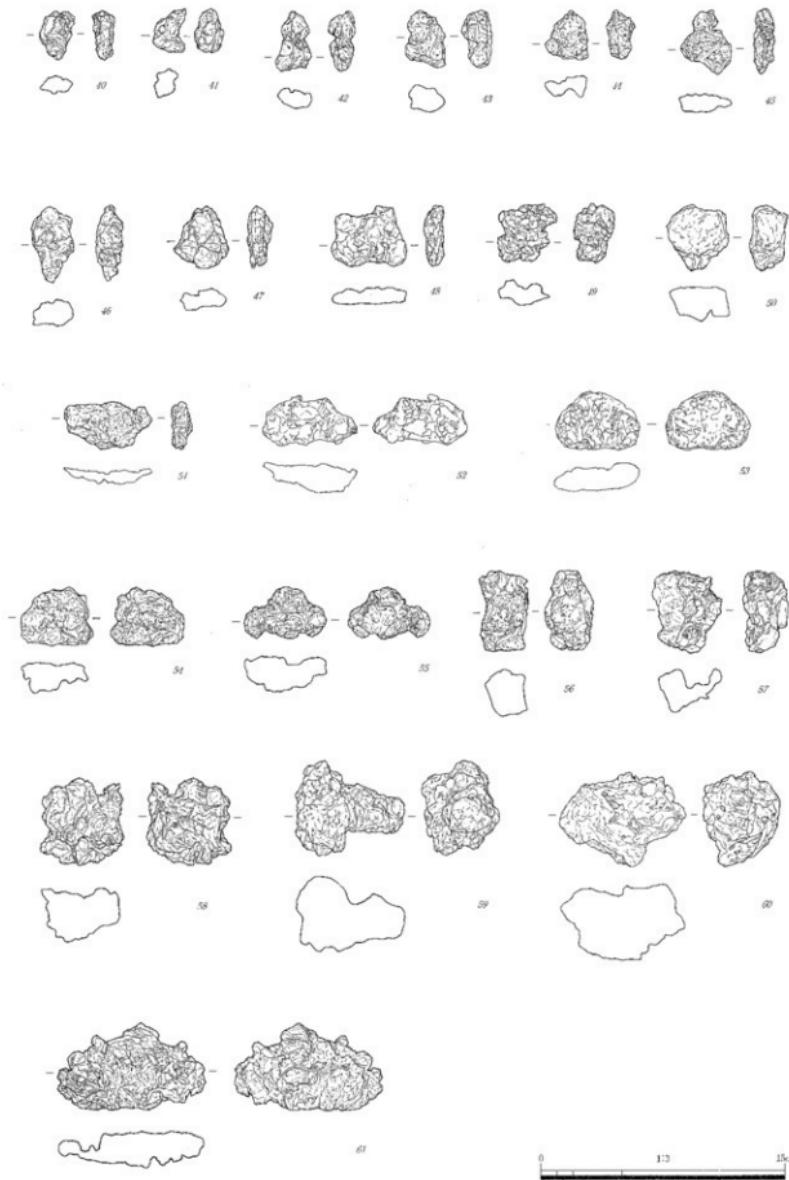
第130図 岩坪岡田島遺跡 遺物実測図 金属製品

SD301 (4・7) SK1208 (5) SK1371 (1~3・8~11・14・15) 包含層 (6・12・13・16・17)



第131図 岩坪岡田島遺跡 遺物実測図 金属製品 (1/3)

SD301 (36)	SD401 (30)	SE508 (19・20・23)	SE693 (33)	SE850 (37・39)
SE1001 (21)	SE1229 (25)	SE1229 (27)	SK404 (35・38)	SK743 (26)
SK1278 (22)	SK1296 (28)	包含層 (24・29・31・32・34)		SK1108 (18)



第132図 岩坪岡田島遺跡 遺物実測図 金属製品 (1/3)

SB18 SP676 (40) SD401 (43~45・48) SD453 (56・57) SD1485 (58) SE451 (50)  
 SF503 (41) SE504 (60) SE508 (42・59) SE850 (52・53) SR1204 (47)  
 SK404 (46・51・54・61) SK527 (49) 包含層 (55)

第17表 岩坪岡田鳥遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(1)

第17表 岩坪岡田鳥遺跡 土器・陶製品一覧(2)

件名	分類	文號	遺物	出土地點	種類	器形	上口	口径	腹径	下口	底径	身長	身幅	底面	底邊	備考
56	55	SK 847	石斧	南壁	石器	石刀	22.6	4.3	45.5	27.8	36.6	4.5	灰色	斜切		
57	37	SK 1297	上口	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
58	40	SK 1298	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
59	67	SK 1298	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
60	35	SK 1378	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
61	35	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
62	67	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
63	64	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
64	65	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
65	35	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
66	67	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
67	36	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
68	39	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
69	39	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
70	39	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
71	70	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
72	70	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
73	71	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
74	71	SK 1402	石刀	X.237.1.35	石器	石刀	22.8	—	47.0	29.7	36.0	4.5	灰色	斜切		
75	49	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
76	40	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
77	77	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
78	78	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
79	79	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
80	80	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
81	81	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
82	82	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
83	41	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
84	41	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
85	46	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
86	46	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
87	47	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
88	48	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
89	49	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
90	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
91	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
92	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
93	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
94	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
95	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
96	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
97	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
98	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
99	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
100	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
101	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
102	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
103	50	SP 149	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
104	42	SD 11	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
105	42	SD 11	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
106	42	SD 11	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
107	42	SD 11	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
108	42	SD 11	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		
109	54	SD 11	黑燒土器	X.232.1.34	土器	罐	12.0	—	14.1	7.8	7.2	—	黑色	斜切		

内面

外面

裏面

外面

内面

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

内

外

117表 岩坪岡田島遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(3)

第17表 岩坪岡田島遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(4)

117表 岩坪岡田島遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽(5)

第17表 岩坪岡田鳥遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(6)

617表 岩坪岡田鳥遺跡・土器・陶磁器・土製品一覽(7)

第17表 岩坪岡田鳥遺跡・土器・陶磁器・土製品一覧(8)

第17表 岩坪岡田島遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(9)

件番	遺物	名前	出土地点	形状	表面	底面	1周( cm )	底径( cm )	内径( cm )	内孔深	内面	側面
411	65	SS. 627		中腹・側面 直腹	直腹	直腹	8.9	8.4	4.4	—	—	—
412	58	SS. 727	X.07Y1.19	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	11.5	—	—	—	—	—
413	58	SS. 743	X.06Y1.20	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	4.9	4.7	—	—	—	—
414	58	SS. 743	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	10.3	—	—	—	—	—
415	58	SS. 845	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	4.74	—	—	—	—	—
416	58	SS. 891	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	3.95	—	—	—	—	—
417	58	SS. 896	X.11Y1.16.1	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	9.8	—	—	—	—	—
418	37	SS. 903	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	7.06	—	—	—	—	—
419	49	SS. 1296	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	8.8	5.2	—	—	—	—
420	427	SS. 1003	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	7.3	3.4	—	—	—	—
421	—	SS. 1241	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	10.8	—	—	—	—	—
422	—	SS. 1290	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	12.4	—	—	—	—	—
423	—	SS. 1290	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
424	—	SS. 1290	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
425	—	SS. 1290	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
426	—	SS. 1290	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
427	—	SS. 1290	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
428	—	SS. 1290	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
429	—	SS. 1402	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	12.9	—	—	—	—	—
430	—	SS. 1417	—	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
431	—	SS. 1422	X.04Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
432	—	SS. 1410	X.04Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
433	—	SS. 1424	X.13Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
434	—	SS. 1427	X.13Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
435	—	SS. 1427	X.13Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
436	—	SS. 1427	X.13Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
437	—	SS. 1427	X.13Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
438	—	SS. 1427	X.14Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
439	—	SS. 1427	X.14Y1.27	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
440	—	X.07Y1.28	X.07Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
441	38	X.08Y1.28	X.08Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
442	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
443	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
444	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
445	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
446	38	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
447	38	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
448	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
449	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
450	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
451	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
452	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
453	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
454	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
455	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
456	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
457	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
458	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
459	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
460	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—
461	—	X.09Y1.28	X.09Y1.28	中腹・側面 直腹	直腹	直腹	—	—	—	—	—	—

第17表 岩坪岡田島遺跡・土器・陶磁器・土製品一覧(10)

第17表 岩坪岡田島遺跡・土器・陶磁器・土製品一覧(11)

第17表 岩坪岡田島遺跡・土器・陶磁器・土製品一覽(12)

第17表 岩坪岡田島遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(13)

第17表 岩坪岡田島遺跡・土器・陶磁器・土製品一覽(14)

第17表 岩坪岡田鳥遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧 (15)

第18表 岩坪岡田島遺跡 木製品一覧(1)

拂回	遺物 写真面	遺傳	出土地点	種類	法量(cm)			材質	備考	
					長さ	幅	厚さ			
117	1	60	SE 1291	箆頭	39	3.7	0.7	イヌノキ		
	2	60	X58Y87 II層	下臓	20.0	5.4	2.3	スギ		
	3	60	X139Y146 I層	下臓	(11.3)	6.7	3.7	一葉松類(アカマツ、クロマツ等)		
	4	60	SD 361	X105Y136 ④(B①)層	下臓	13.8	8.3	1.1	スギ	
	5	60	SD 4	X66Y87 I層	柄?	22.6	3.5	1.5	スギ	先端焼けている
	6	61	SD 361	X94Y125 ④(B①)層	筋鉤頭?	5.9	1.4	1.8	ケヤキ?	
	7	61	SE 1009	下臓	23.9	9.4	0.3	ヒノキ		
	8	61		X105Y130 III層直上	円形板	29.7	7.4	0.6	スギ	
	9	61	SE 1001		曲物底板	19.9	6.6	1.0	スギ	放射性炭素年代 No18
	10	61	X58Y114 II層	円形板	7.35	2.6	0.7	スギ		
	11	62	SK 1302	鍵盤拘			8.1	ケヤキ	内汚染色-漆器分析 No11	
	12	62	SD 11	③層	鍵盤拘	(16.2)	(4.5)	9.8	ケヤキ	内汚染色-漆器分析 No12
	13	62	SE 1001	鍵盤拘			(8.6)	ケヤキ	内汚染色-漆器分析 No13	
	14	63	SD 11	X58Y84 I層	鍵盤拘		(5.2)	5.7	ブナ	内汚染色-漆器分析 No14
	15	63	SD 4	X51Y49 下層	木底盤	10.4	1.9	6.8	ケヤキ	
	16	63	SE 1001	漆器直上	漆芯豆	10.1	1.5	8.2	ケヤキ	内汚染色-漆器分析 No15
118	17	65	SE 1001	舟戸舟(西面上段横板)	76.4	7.2	1.6	スギ		
	18	64	SE 1001	舟戸舟(東面下段横板)	82.4	10.4	2.1	スギ		
	19	64	SE 1001	舟戸舟(西面下段横板)	82.4	14.8	2.0	スギ		
	20	65	SE 1001	舟戸舟(北面下段横板)	78.0	8.4	2.0	スギ		
	21	64	SE 1001	舟戸舟(南面下段横板)	81.4	15.2	2.6	スギ		
	22	64	SE 1001	舟戸舟(北面下段横板)	84.8	15.2	2.6	スギ		
119	23	65	SR 1001	舟戸舟(南面支柱)	40.6	4.3	4.3	クリ		
	24	65	SR 1001	舟戸舟(北面支柱)	50.4	4.6	4.0	スギ		
	25	65	SR 1001	舟戸舟(南面支柱)	49.4	6.0	3.4	スギ		
	26	65	SE 1001	舟戸舟(北面支柱)	49.8	5.2	4.1	スギ		
	27	66	SE 1001	舟戸舟(東面南側板)	79.1	38.4	2.4	スギ	年輪年代 No1	
	28	66	SE 1001	舟戸舟(東面中央板)	(75.2)	15.8	2.2	スギ		
120	29	66	SE 1001	舟戸舟(東面北側板)	82.6	35.2	2.4	スギ		
	30	67	SE 1001	舟戸舟(西南面板)	91.4	37.2	3.0	スギ		
	31	68	SE 1001	舟戸舟(西面南側板)	72.0	10.7	2.4	スギ		
	32	68	SE 1001	舟戸舟(内面中央板)	73.6	30.6	1.4	ヒノキ		
121	33	68	SR 1001	舟戸舟(西面北隣板)	47.2	13.8	1.5			
	34	67	SE 1001	舟戸舟(西面北隣板)	77.2	37.2	2.4	スギ	年輪年代 No5	
	35	69	SE 1001	舟戸舟(南面煮沸板)	54.4	12.6	2.0			
	36	69	SE 1001	舟戸舟(南面中央活版)	64.2	14.4	1.5	ヒノキ		
	37	69	SE 1001	舟戸舟(西面西隣板)	91.2	34.8	3.0	ヒノキ		
122	38	72	SE 1001	舟戸舟(南面南側板)	81.4	36.4	2.6			
	39	70	SE 1001	舟戸舟(北面板)	72.1	16.2	2.2			
	40	70	SE 1001	舟戸舟(北面南側板)	64.6	17.8	2.4	スギ		
	41	70	SE 1001	舟戸舟(北面板)	53.2	12.8	1.2	ヒノキ		
	42	70	SE 1001	舟戸舟(北面板)	58.3	13.0	1.4			
	43	70	SE 1001	舟戸舟(南面縫合板)	53.0	13.2	1.3	ヒノキ		
123	44	71	SE 1001	舟戸舟(北面縫合板)	66.3	13.9	1.5	スギ		
	45	71	SE 1001	舟戸舟(北面縫合板)	67.0	13.9	2.2			
	46	71	SE 1001	舟戸舟(北面縫合板)	70.6	14.2	2.0			
	47	71	SE 1001	舟戸舟(北面縫合板)	54.8	14.4	1.2			
	48	71	SE 1001	舟戸舟(北面活版)	65.0	11.7	1.6			
	49	71	SE 1001	舟戸舟(北面活版)	47.2	12.4	1.0			
	50	72	SR 1291	加工板	82.8	7.6	0.8	スギ	放射性炭素年代 No20	
	51	72	SE 1291	加工板	46.4	7.4	0.8	スギ	放射性炭素年代 No19	
	52	73	SE 1291	加工板	(20.8)	1.7	0.4	セチノキ(セチノキ、イヌツゲ、クライヨウ等)		
124	53	73	SP 1510 (SB8)	柱	15.0	8.0	8.2	スギ		

第18表 岩坪岡田島遺跡 木製品一覧(2)

件名	遺物	有数	出土地点	種類	法量(cm)			材質	備考	
					長さ	幅	厚さ			
54	73	SP 254(SB3)		柱	54.5	10.2	7.9	クリ		
55	73	SD 301	X101Y133 ④(B①)番 背部	加工板	34.2	2.5	2.3	スギ		
56	73	SD 11	X58Y79 上層	加工板	7.7	1.2	0.4	ヒノキ	先端焼けている	
57	73	SD 301	X103Y138 ④(B①)番	加工板	(11.0)	1.5	1.1	スギ		
58	73		X28Y36 I 層	加工板	9.4	3.1	1.3	スギ板		
59	74	SD 11	X71Y68 上層	加工板	78.0	4.1	1.8	スギ		
60		SD 4	X66Y58 上層	加工板	(14.1)	2.1	0.7	スギ		
61	74	SE 1001		加工板	(78.8)	13.0	0.4	スギ		
62	74	SE 1001		加工板	28.7	8.6	0.9	スギ		
63	74	SX 12	X37Y58	木材	23.0	5.7	4.6	ヒノキ材		
125	64	74	SE 508	加工板	(20.7)	6.2	0.7	スギ		
	65		SD 11	X47Y73 腹部	加工板	16.7	2.5	0.9	スギ	放射性炭素年代 N=23
	66	74	SE 508	加工板	(17.0)	5.7	0.5	スギ		
	67		SD 4	X66Y59 上層	加工板	(15.8)	2.9	2.0	スギ	
	68	75	SD 11	X47Y73 腹部	加工板(壁板)	33.2	15.7	1.3		
	69	75	SD 11	X47Y73 腹部	加工板(壁板)	41.2	15.7	1.2	スギ	
	70	75	SD 11	X65Y74 I 層	加工板	33.5	1.5	1.3	スギ	
126	71	75	SD 4123	X121Y138 旗層	加工板	280.0	2.6	1.9		
	72	76	SE 1229	加工板	9.0	3.2	1.0	スギ		
	73	76	SK 1305	加工板	12.1	5.2	1.1	スギ		
	74	76	SK 1303	加工板	(21.1)	(3.5)	0.7	スギ		
	75	76	SK 1301	加工板	(18.8)	4.2	(1.2)	スギ		
	76	76	SX 12	X60Y57	加工板	29.9	9.4	1.6	スギ	
	77	76	SE 451	D区	加工板	(19.2)	9.6	0.7	スギ	

第19表 岩坪岡田島遺跡 石製品一覧

件名	遺物	有数	遺構	出土地点	種類	法量(cm・g)			材質	備考
						長さ	幅	厚さ		
127	1	77	8号土器集中地點	X135Y149-150	石砍	2.7	2.5	0.3	1.1	砂岩
	2	77		X106Y144 ④(B①)番	扁平片刃石斧	5.2	3.2	0.9	32.5	骨尖
	3	77	SX 1124		刮片	5.2	1.4	0.7	2.4	陶鉢
	4	77	SX 1121	X129Y156 ①層	刮片	5.2	5.2	2.1	33.7	泥灰岩
	5	77	SX 1121		磨石	13.6	8.7	5.3	81.0	礫灰岩
	6	77	3号土器集中地點	X130Y157	敲石	11.0	7.4	4.5	512.4	礫灰岩
	7	77	2号土器集中地點		凹石	8.3	6.3	3.1	232.3	花崗岩
128	8	78		X75Y99 II 層	砾石	4.4	3.8	0.4	10.7	頁岩
	9			X25Y40 I 層	砾石	6.1	2.9	4.0	60.0	砂岩
	10	78		X68Y95 II 層	砾石	4.7	2.4	4.9	64.0	礫灰岩
	11	78		X26Y101	砾石	5.7	2.3	2.9	42.0	礫灰岩
	12		SD 301	X104Y139 ④(B①)番	砾石	4.3	3.5	2.9	45.6	礫灰岩
	13	78		X27Y96 II 層	砾石	5.3	1.7	3.3	34.0	礫灰岩
	14	78		X38Y63 II 層	砾石	9.6	4.2	1.2	60.0	頁岩
129	15	78	SD 301	X106Y141	砾石	7.9	4.1	2.5	86.8	礫灰岩
	16	78		X27Y57 I 層	砾石	7.9	5.6	2.2	100.0	礫灰岩
	17		SE 508		砾石	5.2	4.6	2.9	60.0	砂岩
	18	78	SE 1106	漁網	砾石	9.3	7.8	4.2	333.3	礫灰岩
	19	78	SK 428		砾石	12.3	6.6	5.9	570.0	砂岩
	20	78	SD 301	X123Y142 ④(B①)番	砾石	16.2	5.5	2.5	152.1	礫灰岩
	21	77	SE 504	上層	刮片(火打ち石)	2.8	3.3	1.9	20.0	めのう
	22	77	SD 301	X106Y142 ④(B①)番	石錐	6.2	6.2	3.1	126.2	練石

第20表 岩坪岡田島遺跡 金属製品一覧

辨別	遺物	万葉図版	遺構	出土地点	種類	法量(cm:g)			
						長さ	幅	厚さ	重さ
130	1	80	SK 1371		銭(開元通寶)	2.34	24	1.14	2.07
	2	80	SK 1371		銭(乾元重寶)	2.42	—	1.33	3.18
	3	80	SK 1371		銭(平元通寶)	2.46	—	1.10	2.46
	4	80	SD 361	X107Y144	銭(咸平通寶)	2.27	23	1.17	1.69
	5	80	SK 1308		銭(天祐通寶)	2.05	25	1.21	2.11
	6	80		X103Y135	銭(大足通寶)	2.53	25	1.20	2.20
	7	80	SD 361	X103	銭(景祐通寶)	2.47	24	1.28	2.74
	8	80	SK 1371		銭(皇宋通寶)	2.51	24	1.30	3.58
	9	80	SK 1371		銭(熙寧通寶)	2.41	—	1.45	2.94
	10	80	SK 1371		銭(元祐通寶)	2.34	—	1.22	2.33
	11	80	SK 1371		銭(元祐通寶)	2.41	—	1.37	2.66
	12	80		X103Y133	銭(元祐通寶)	2.50	25	1.23	3.00
	13	80		X80Y77	銭(聖宋通寶)	2.27	23	1.07	0.88
	14	80	SK 1371		銭(大足通寶)	2.43	—	1.46	3.03
	15	80	SK 1371		銭(乾祐通寶)	2.44	—	1.02	2.63
	16	80		X25Y70	銭(大足通寶)	2.50	25	1.29	1.77
	17	80		X128Y144	銭(寛永通寶)	2.16	22	1.04	2.23
131	18		SK 1108		刀子	3.9	16	0.4	6.7
	19	79	SE 508	C区 上層	刀子	6.0	23	0.8	13.8
	20	79	SE 508	C区 上層	刀子	14.5	18	0.5	62.9
	21	79	SE 1004		履靴頭	5.7	4.5	0.4	23.6
	22	80	SK 1278		錫剪	7.3	13	0.7	7.9
	23	79	SE 508	D区 上層	鉄鉗	2.9	9.0	0.2	2.0
	24	80		X84Y101	鉤?	5.9	6.6	0.4	3.8
	25	80	SE 1229	B区	鉤	3.0	0.4	0.3	2.3
	26		SK 743	X106Y120	鉤?	5.2	0.5	0.5	11.2
	27	80	SE 1299		鉤?	6.8	0.9	0.7	11.5
	28	80	SK 1296		鉤	5.5	0.7	0.4	17.8
	29	80		X106Y138 T層	鉤	8.1	0.7	0.7	32.3
	30		SD 401	X125Y145	鉤子金具	3.0	1.8	0.6	3.6
	31	79		X26Y45 I層	鉤賣	4.8	1.4	0.6	15.7
	32	79		X60Y55 I層	鉤賣	18.1	0.7	—	28.5
	33		SE 603		純金金具製品	5.0	4.3	0.8	157.6
	34			X96Y123 西層地土	羽口	2.7	3.4	2.0	—
	35		SK 101	A区	羽口	(2.2)	(3.5)	—	—
	36		SD 301	X104Y134 ④(BD2)層	羽口	3.1	2.7	1.4	—
	37		SE 850	上層	羽口	5.7	2.8	1.8	—
	38		SK 404	C区	羽口	3.7	3.1	2.2	—
	39		SE 850	下層	羽口	4.6	3.7	2.6	—
132	40	83	SP 676(SB18)		鉄漆	3.0	19	1.0	6.2
	41	81	SE 503	A区	鉄漆	2.6	19	1.7	10.4
	42	81	SE 508	D区 上層	鉄漆	3.7	2.1	1.6	9.0
	43	82	SD 401	X111Y108	鉄漆	3.5	2.4	1.8	12.5
	44	82	SD 401	X111Y108	鉄漆	3.0	2.6	1.3	12.2
	45	82	SD 401	X111Y108	鉄漆	3.9	3.1	1.1	11.1
	46	83	SK 404		鉄漆	4.6	2.5	1.6	21.0
	47	81	SE 1204		鉄漆	3.8	3.3	1.5	13.5
	48	82	SD 401	X110Y108	鉄漆	3.7	4.6	1.0	28.8
	49	83	SK 327		鉄漆	3.6	3.5	2.4	26.9
	50	83	SE 451	D区	鉄漆	4.0	3.6	2.1	47.3
	51	83	SK 404	C区	鉄漆	2.9	5.4	0.6	14.4
	52		SE 850	T層	鉄漆	5.6	3.0	1.7	—
	53		SE 850	下層	鉄漆(鉛引漆)	5.2	3.6	1.4	—
	54	83	SK 494	D区	鉄漆	3.6	4.3	1.8	31.0
	55			X134Y146 I層	鉄漆	3.2	5.0	2.1	31.5
	56	82	SD 453	X144Y146	鉄漆	4.9	2.6	3.0	62.5
	57	82	SD 453	X133Y146 西層地	鉄漆	5.0	4.2	2.6	45.0
	58	82	SD 1485	X125Y146	鉄漆	5.4	3.1	3.1	97.7
	59	81	SE 508	C区 上層	鉄漆	5.8	6.6	4.6	115.3
	60	81	SE 504	上層	鉄漆	5.8	7.7	4.7	153.8
	61	83	SK 404	C区	鉄漆	5.3	9.0	2.2	86.8

## 4 地震痕跡

岩坪岡田島遺跡では、噴砂・地割れ・地層の変形の3つの地震痕跡を確認した。ただ、調査区は広く各地区どこでも同じものを確認したわけではない。そのためここでは、これらの地震痕跡ごとに地区を分けて見ていくこととする。

### (1) A地区

A地区では、噴砂と地割れを検出した。噴砂は、地割れの埋土を切っておりこれより新しく。

#### A 地割れ (S X10・S X12, 第133~139図, 図版28~30)

地割れは、調査区の北 (S X12) と南 (S X10) の2箇所で中世の遺構検出面であるⅢ層上面で検出したが、一部では中世遺物包含層であるⅡ層も引き裂いていることを土層観察により確認した。形状は、網目状に複雑に絡み合っており、検出当初は地割れと認識できずにいたが断ち割りを行い、V字状の断面と他の遺構とは異なるブロック状の埋土から確認した。地割れの規模は、最大幅50cm・最大深130cmで、人工的な遺構と異なり底面が細く尖っているため完掘できず、数箇所断ち割りを行って確認した。埋土には、Ⅲ・Ⅳ層がブロック状に入る黒褐色シルトの上に砂層が入るものが多く、地割れ後の堆積状態を示すものである。つまり、前者は当時の表土と地山の崩落した土が混ざりあって地震発生後間もなく埋まつた土であり、後者はその後若干窪地となったところに、降雨等によって砂混じりの土が流れ込んだものと考えられる。また、地割れ (S X10) の下部からは9世紀の土師器(432~435)や籠状木製品が出土したが、これらは下層の古代遺物包含層にあったものが地割れによって現れたものと考えられる。時期は、中世の遺構検出面で確認したことと、S X12から15世紀末~16世紀前半の瀬戸美濃(436)が出土したことからこれ以降の大地震である天正地震(1586年)によるものと見られる。天正地震は、岐阜県の阿寺断層や御母衣断層などを震源とするマグニチュード7.8規模の大地震で中部地方に被害をもたらした。特に県内では同じ高岡市内の木舟城がこの地震で崩壊し、城主他多数が圧死したことが文書に記されており、この付近の開鶴大滝遺跡などでも多くの地震痕跡を確認している。

#### B 噴砂 (第134・136・139~141図, 図版31)

噴砂は、調査区のほぼ全域で近世の遺物包含層であるI b層上面で検出した。噴砂の幅は、1~5cmと細く、これらが北と南に集中してみられた。噴砂の集中している部分は、検出面の下に落ち込む地形がありこれを反映しているようで、砂脈はこれと同じ東西方向に並んでいた。時期は、調査区南側で地割れと重なっている部分があり、ここで地割れの埋土を切っておりこれより新しく、近世の遺物包含層の上に吹き上がりが見られることから手洗野赤浦遺跡と同様な飛越地震(1858年)によるものとみられる。

### (2) B地区

B地区では、B 1・2地区で自然流路の土層堆積内に地層の変形、B 2地区で噴砂と地割れ、B 3地区で噴砂を検出した。

#### A 地層の変形構造 (第47図, 図版31)

地層の変形構造は、A・B 1・2地区をほぼ南北に流れるS D11の断面で検出した。S D11の断面では、上層の砂層と下層のシルト層との境界が流動変形して、砂がシルトに沈み込んだり遊離してシルト内に取り残される現象や砂層にシルトが取り込まれて小褶曲を見せる現象や砂層上面に回転性の変形構造がみられるなどの地震痕跡を確認した。寒川旭氏によれば、これらはコンボルート葉理(擾

乱構造) やフレーム構造などと呼ばれるものに相当する<sup>20)</sup>。SD11の上面の砂層の年代から飛越地震によるものと考えられる。また、噴砂にこれが切られていることから、地震動の初段階で砂層が流动変形し、続いて噴砂が発生したと考えられる。

#### B 地割れ (第139図、図版30)

地割れは、B2地区ではほぼ東西方向に走る数条をⅢ層上面で検出した。層位からA地区のものと同時期と考えるが、幅は10cm程度で狭く、深さも深くて1m、複雑に絡み合うこともなく走っていた。このことからA地区とは、土質が異なっていることが考えられる。それは、A地区よりもB2地区の方が北東側の台地に近く、同じ低地部にありながら少しの立地の違いでこのような地震の痕跡も変化するのであろう。その証拠にB2地区よりも台地部に近いB3地区やC7地区の低地部では地割れは見られなかつたし、台地部のC1~7地区でも見られなかつたからである。

#### C 噴砂 (第140・141図、図版31)

噴砂は、B2・3地区のほぼ全域で近世の遺物包含層であるIb層上面で検出した。A地区同様に噴砂は、幅が狭く規模の小さいもので数条が一まとまりとなって東西と南北方向に走っていた。東西方向に走るものは調査区の北側で台地部に沿うような形となっており、南北方向に走るものは、調査区の南側で自然流路SD301に沿うような形となっている。これらは、調査区北東部で合うが重ならないようである。時期は、A地区同様に飛越地震(1858年)によるものと見られる。

### (3) C地区

C地区では、C6地区で噴砂を検出した。

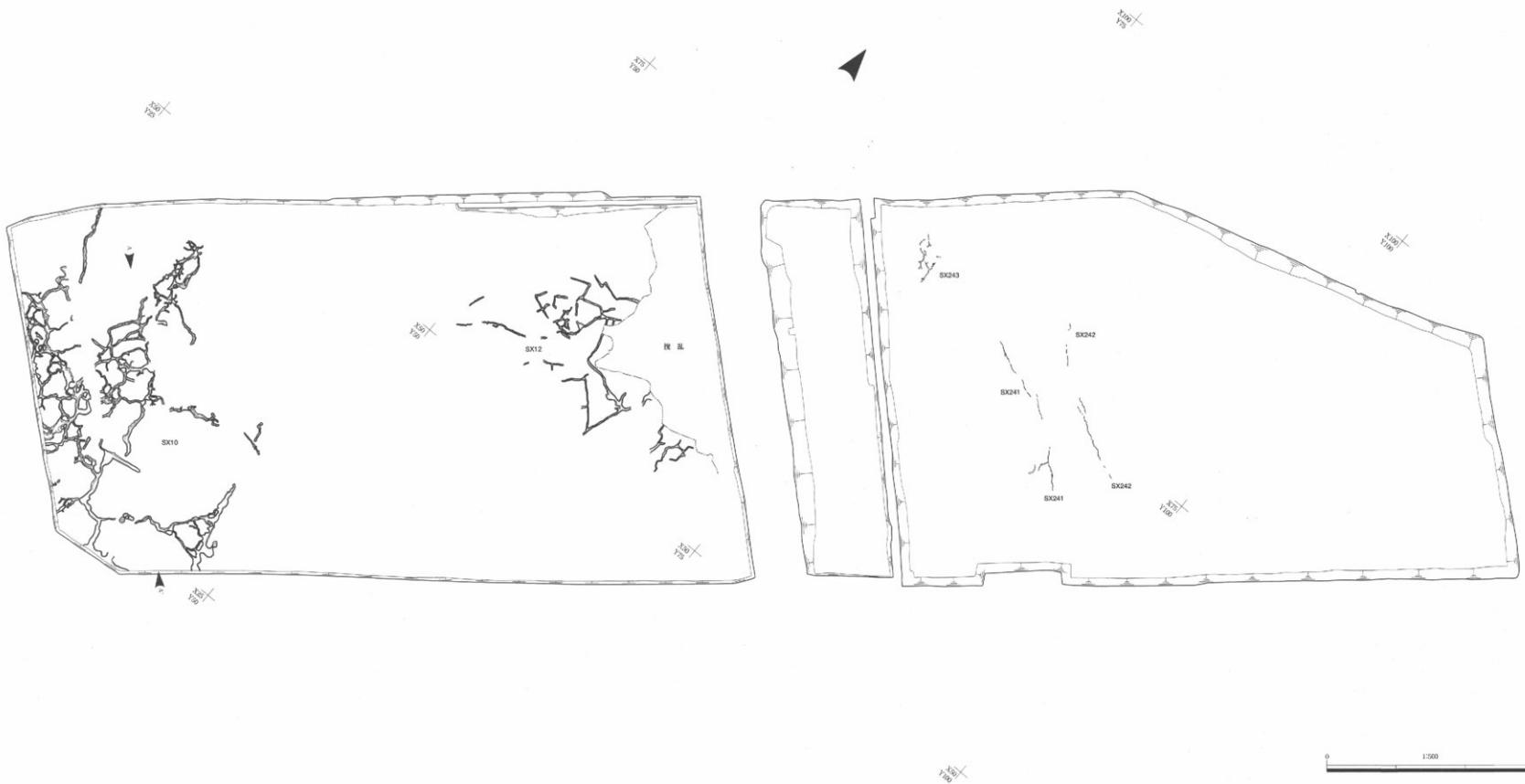
#### A 噴砂 (第142図)

噴砂は、C6地区の下層である縄文時代前期層の調査時に南側の谷部から検出した。この谷は、遺物は出土していないが層位から縄文時代前期後葉にはあったものと見られ、その後有機物層と粘土層が互層となって自然堆積し、これを切るように噴砂が見られた。噴砂の幅は数cmで細く、平面では検出できなかつた。吹き上がりもわかりづらく、時期を決定することができなかつたが、堆積状況から縄文時代前期後葉以降で上層遺構が7世紀からあることからこの間の時期となろう。ただ、他の地震痕跡とは違う古い時期であることは間違いないであろう。

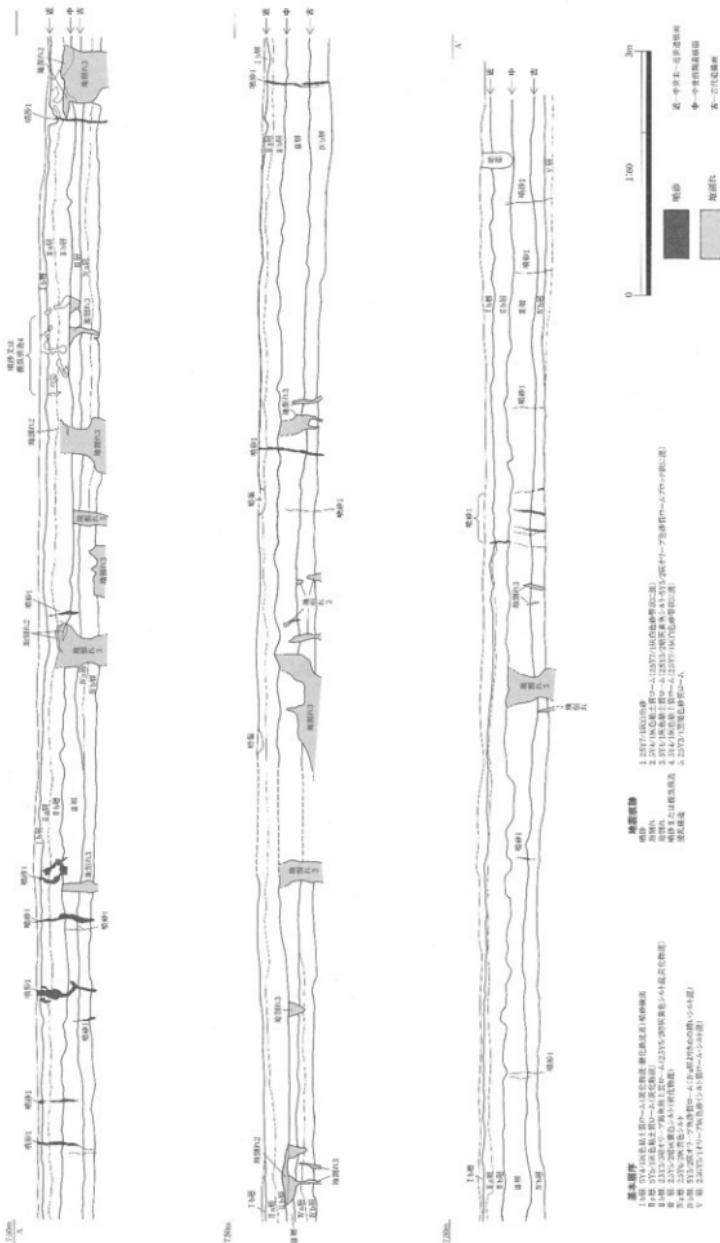
### (4) 手洗野赤浦遺跡と岩坪岡田島遺跡における地震痕跡の意義

手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡の調査では、大規模な地震痕跡を検出した。地震の痕跡には、液状化現象による噴砂・地面が引き裂かれる地割れ・地形の変形がある。これらの痕跡が、両遺跡では各所で見られた。富山県は、大規模な地震が少ないとこで史料にも数える程度の記載しかない。そのため、これらの地震痕跡をどの時代のどの地震に比定するといった作業は、遺跡の層位と史料からある程度想定できる。特に手洗野赤浦遺跡と岩坪岡田島遺跡は、中世を主体とする遺跡でこれらの遺構を切る形で多くの地震痕跡が見つかっていることから、天正地震(1586年)か飛越地震(1858年)のいずれかの爪痕を残すものと見られる。ただ、同じ地震によるものといってもその痕跡は異なり、例えば手洗野赤浦遺跡では幅1mで長い噴砂、岩坪岡田島遺跡では幅数cmで短い噴砂といった状況が見られる。これは、遺跡の堆積状況や地形の差異をあらわしているものと言える。また岩坪岡田島遺跡では、地割れの後に噴砂がそれを切るという2つの地震痕跡を見ることができた。このように手洗野赤浦遺跡と岩坪岡田島遺跡では、地震痕跡を明確に確認でき、その時期も押さえられる重要な遺構と言えよう。

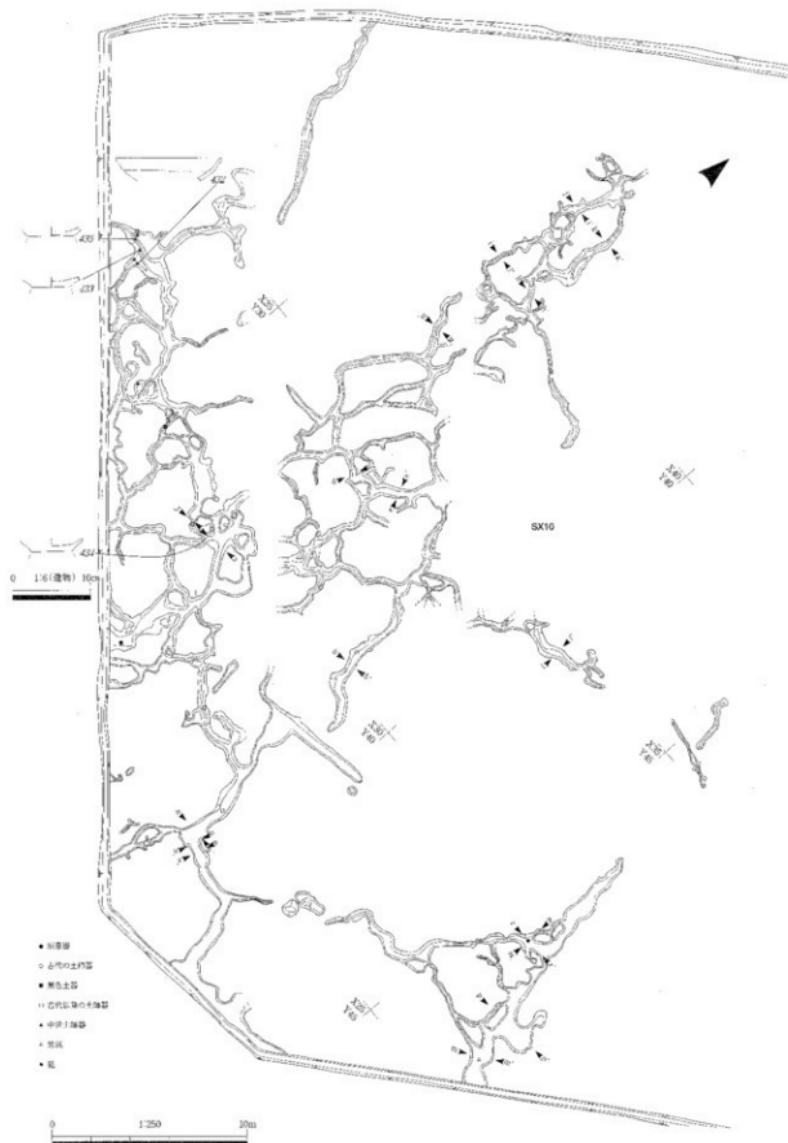
(町田賢-)



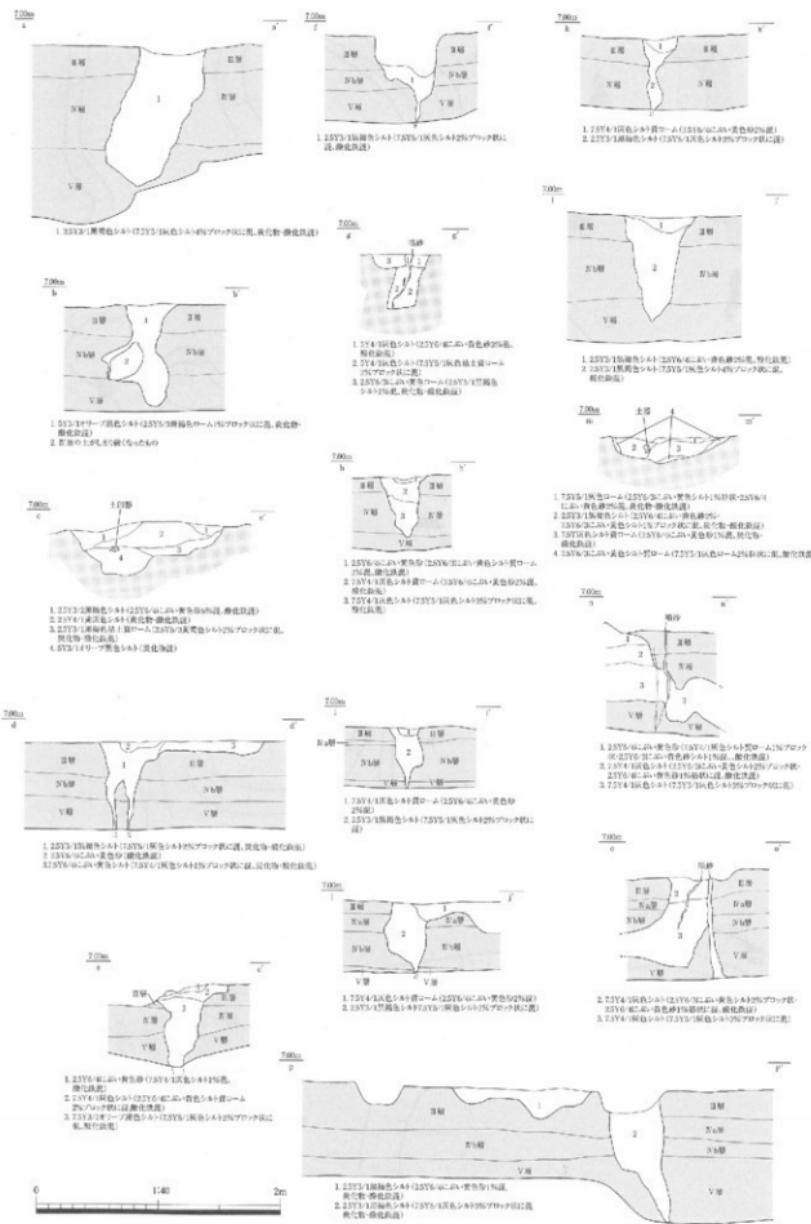
第133図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地質痕跡 地割れ



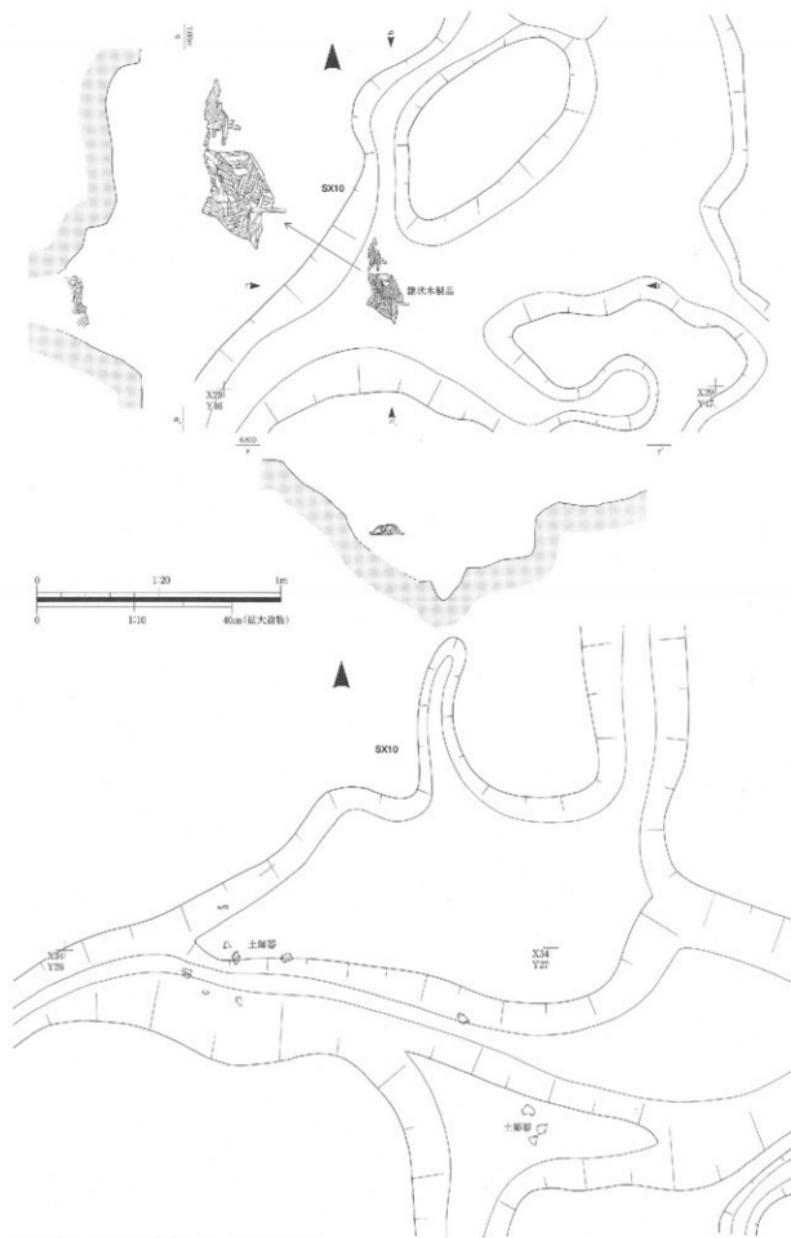
第134図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 噴砂 地割れ



第135図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 地割れ (SX10)



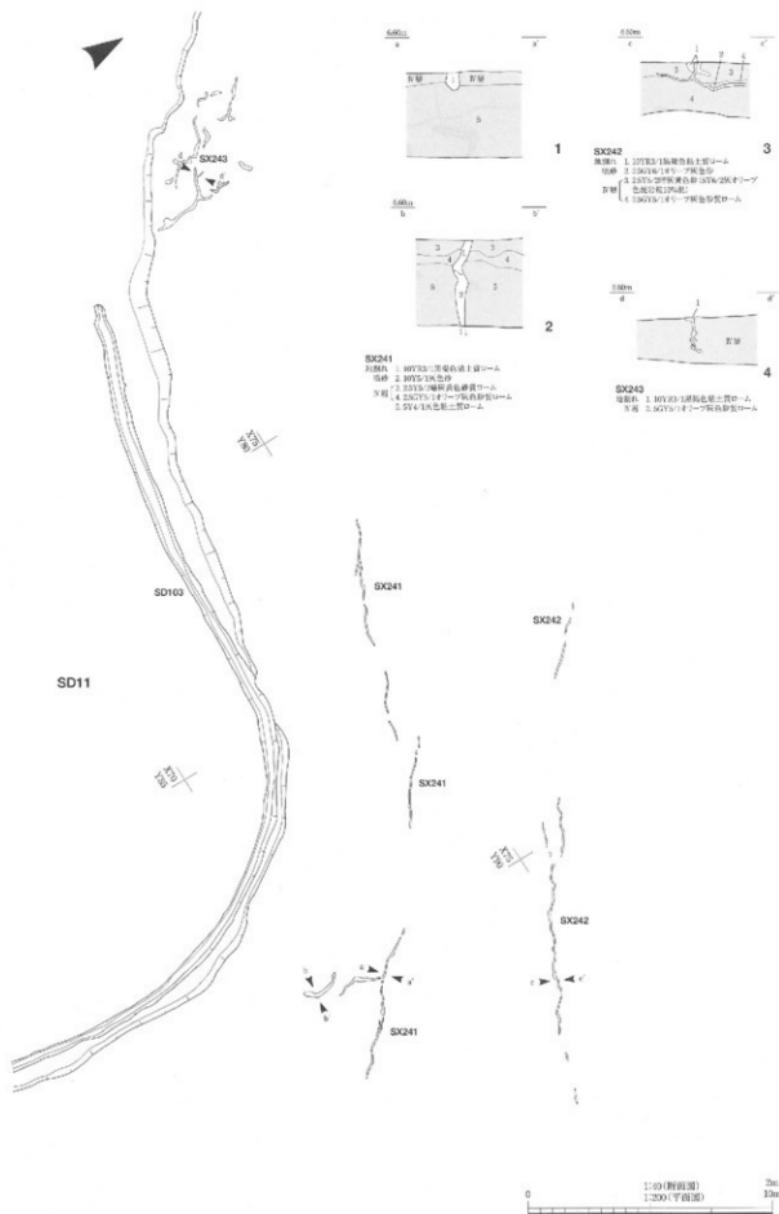
第136図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 地割れ (SX10) 噴砂



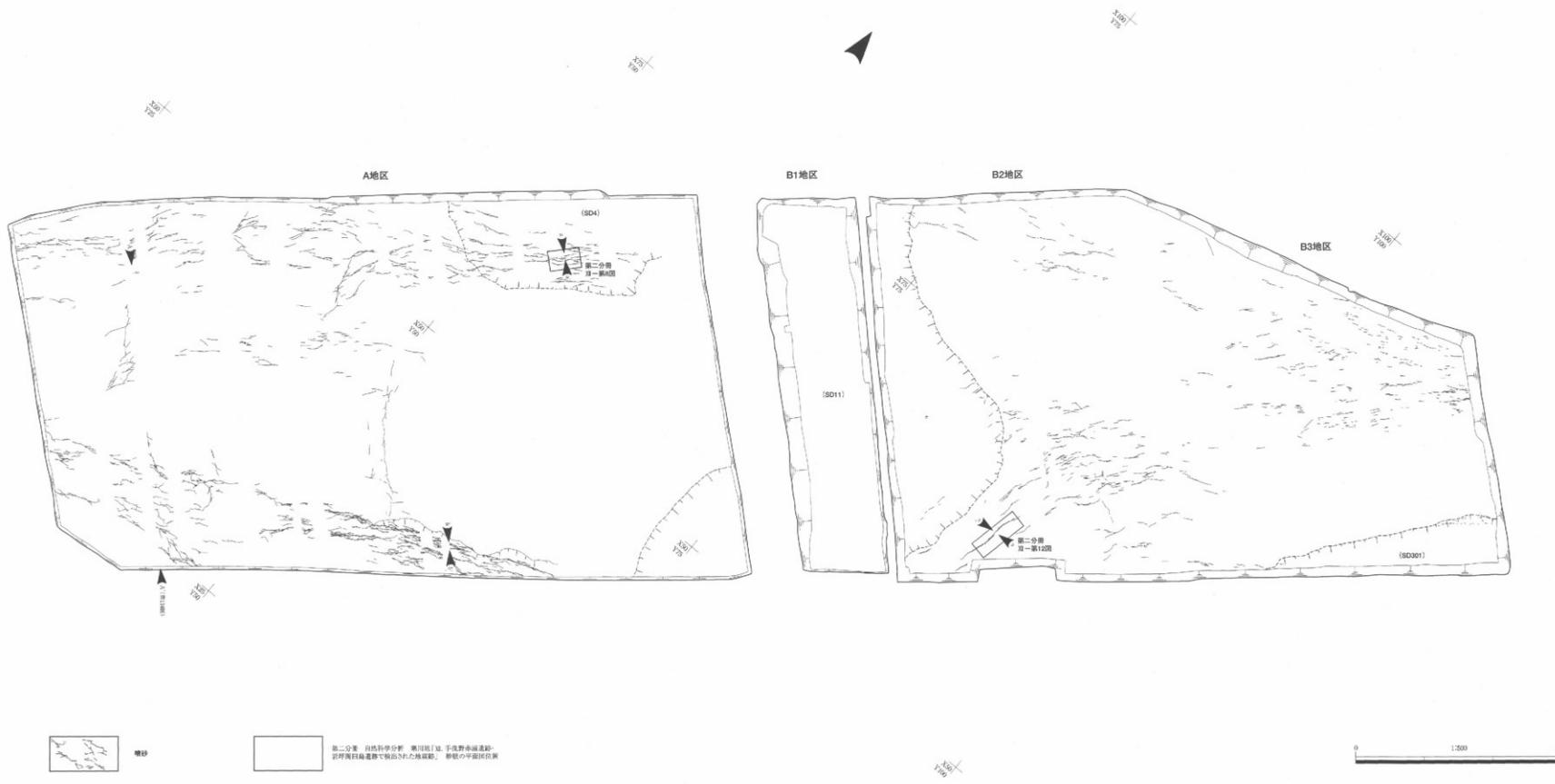
第137図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 地割れ (SX10)



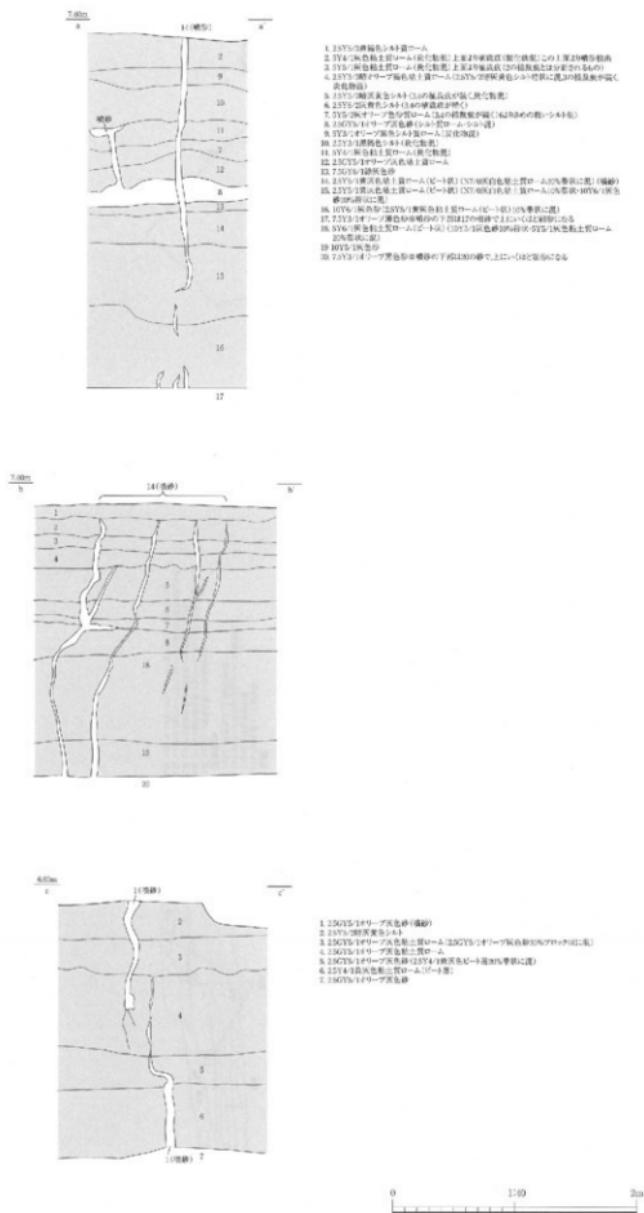
第138図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 地割れ (SX12)



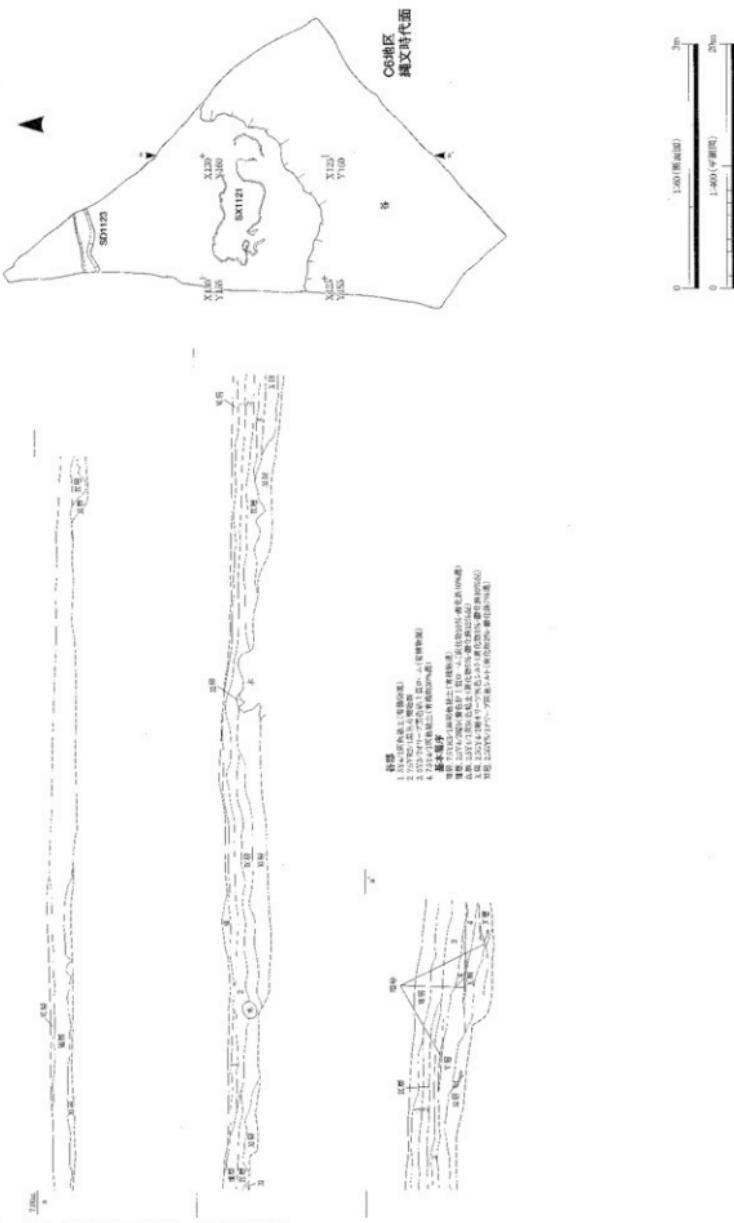
第139図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 地割れ 噴砂 (1・2. SX241 3. SX242 4. SX243)



第140図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地質痕跡 墓砂



第141図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 噴砂



第142図 岩坪岡田島遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 噴砂

# 第IV章 手洗野赤浦遺跡

## 1 遺跡の概要

### (1) 概 要

手洗野赤浦遺跡は、岩坪岡田島遺跡から南西方向へ約800mの近距離に位置するが、主要な遺構の時代はやや降って中世中頃～末期を中心とする。遺構面は一部で2面の重層になっているが、上層と下層の時期に大きな隔たりはない。

調査区の西側は中央の微高地より一段低い谷状地となっており、埋土の下から中世中頃～後半の掘立柱建物・溝・井戸・土坑が検出された。谷状地理土下の遺構検査面の標高は、建物等が集中する部分では約6.4～6.6mであるが、南側の舌状にのびる微高地では約6.6～6.8mを測り、中央の微高地とはほぼ同じ高さになる。建物と溝の方向はほぼ東西・南北の方角に則っており、方格地割が敷かれていたとみられる。特にそれぞれの微高地上で検出された直線的にのびる長い溝は、集落を通る主要な道路の側溝と推定される。谷状地理上下では14世紀から15世紀頃にかけての遺構の変遷がみられるが、15世紀後半～16世紀のある時期に洪水等により埋まると推定される。その後、埋土上に掘立柱建物と井戸が構築されるが、軟質の石材と曲物を使用する井戸の構築方法が埋土下の井戸と同じであることから、上層で期間の隔たりはあまりないものと考えられる。また建物からやや離れた位置に爐があり、付近の土坑埋土の花粉・種実分析ではアサ・ソバが検出されている<sup>229</sup>。調査区の中央から西の微高地では掘立柱建物・溝・井戸・土坑等が検出され、14世紀～16世紀の年代幅がある。道路の側溝と並行して長楕円形の深い大型土坑があり、付近の溝埋土からヒシが検出されたことから當時灌水していた池と考えられるが<sup>230</sup>、水田に閑適した池であろう。調査区の東端も自然流路の氾濫により形成されたとみられる谷状の地形となっており、西側の谷状地と同様の土が埋積する。その埋土下では特殊な形態をもつ14世紀の井戸が検出され、上面では15世紀後半の掘立柱建物が検出されている。

出土遺物には、土器・陶磁器、木製品、石製品、金属製品、骨角製品がある。土器・陶磁器には、土師器・須恵器・中世上師器・珠洲・輸入陶磁器・古瀬戸・瀬戸美濃・越前・信楽・瓦質土器・越中瀬戸・伊万里・唐津・土製品等がある。遺構出土の遺物のうち、珠洲はⅣ期～V期、輸入陶磁器は14世紀～15世紀、古瀬戸は後期様式のものが多く、中世中頃～後半が中心となっている。土器集中地点では祭祀に使用されたと考えられる中世土師器がまとめて出土しており、これらも同時期のものである可能性が高い。包含層の遺物では越中瀬戸・唐津が一定量あり、遺構は検出されなかつたが、16世紀末～17世紀には周辺で新たな開発が行われたものと推測される。木製品には、鍼・曲物・漆器・折敷・匙・柱・呪符木筒等がある。樹種同定の結果、中世前期の岩坪岡田島遺跡に比べてヒノキ属の利用が多く、柱はクリを主体とする広葉樹であることがわかった<sup>231</sup>。呪符木筒は井戸祭祀に関わると推測されるものである。石製品は、五輪塔・石鉢・砥石が溝を中心として出土した。金属製品は、主に包含層から錢貨・煙管等が出土した。骨角製品には土坑出土の笄が1点ある。

### (2) 土 層

基本層序は、I層：表土、II層：灰色シルト質ローム（中世～近世包含層）、III層：灰色砂質ローム（中世遺構検査面）、IV層：灰色砂（無遺物層）となっている。II層は徐々に薄くなり途切れる部分もあるが、ほぼ全面にあり、平均的な部分で約10～20cmの層厚がある。III層面は、座標軸Y30付近

注229 第二回 岩野赤浦遺跡 植生分類 1. 手洗野赤浦遺跡 岩野赤浦遺跡の花粉化分析。

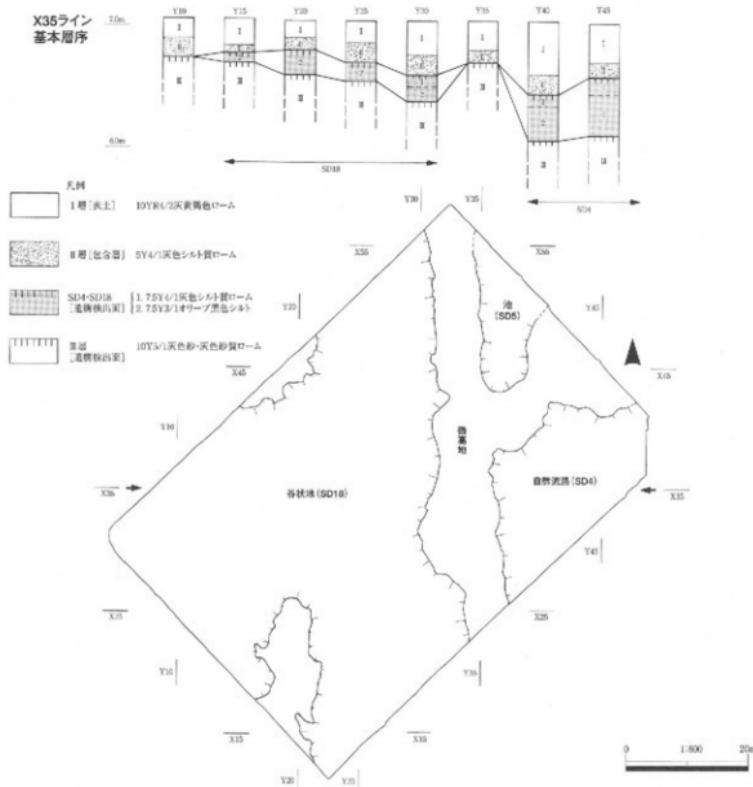
注230 第二回 岩野赤浦遺跡 植生分類 1. 手洗野赤浦遺跡 岩野赤浦遺跡の花粉化分析。

注231 第二回 岩野赤浦遺跡 植生分類 1. 手洗野赤浦遺跡 岩野赤浦遺跡の花粉化分析。

注232 第二回 岩野赤浦遺跡 植生分類 1. 手洗野赤浦遺跡 岩野赤浦遺跡の花粉化分析。

を境に西側が谷状に一段下がり、灰色シルト質ローム・オリーブ黑色シルトがⅡ層の下に堆積する。この谷状地をSD18としている。SD18の上面では中世末期の遺構が検出され、SD18の埋土を除去したⅢ層上面でも中世中頃～後期の遺構を確認した。Y30以東の微高地で検出した遺構は、切り合いや重複があり、中世中頃～末の年代幅をもつ。調査区の東端にも自然流路SD4とした谷状地があり、SD18と同様の埋土となっている。SD4の上面では15世紀後半、埋土下では14世紀の遺構が検出されている。

地震痕跡としては、噴砂をⅡ層上面で検出した。Ⅱ層堆積後の地震によるもので、古地震の記録から安政5年（1858）の飛越地震の痕跡と推定される。Ⅲ層の土質は、東の微高地では砂質ロームが主であるが、SD18の下では砂質ロームから細砂となっており、さらに下位のⅣ層の粗砂が噴砂の由来となっている。谷状地では、谷埋土とⅡ層がⅢ層を覆っており、その層厚は平均的なところで約30～50cm、最も厚いところでは約70cmを測る。また、調査区東側の微高地上には深さ約60cmの自然流路SD4、池SD5がある。これらの谷状地、自然流路、池といった、比較的粘性のある土が一定の層厚をもって広範囲に堆積した場所に、大型の噴砂が多くみられた。



## 2 遺構

### (1) 堀立柱建物

1号堀立柱建物（SB 1, 第144・145図, 図版86~88）

谷状地（SD 18）埋土下で検出した。調査区中央に位置し, SD 33・SD 173・SD 69等の溝に3方を囲まれる。

2間×1間の東西棟側柱建物で, 主軸はN-83°-Eである。桁行4.1m, 梁行3.4mで面積は13.94m<sup>2</sup>である。柱穴の平面形はほとんどが円形で, SP 269が梢円形である。柱穴規模は直径16~26cm, 深さ10~20cmである。掘形埋土は黄橙色ロームが粒状に混じるオリーブ黒色シルトの単層である。SP 61は掘形に接して幅広の噴砂が走るため, 平面形は原形をとどめない。建物軸方向がわずかにずれるSB 2と重複し, 建て替えが推定される。出土遺物はない。

建物の年代は, 周囲を囲む溝と同時並行でSK 47・SE 158が同時期または近い時期のものと推測されることから, 14世紀前半~15世紀前半頃と推定される。

2号堀立柱建物（SB 2, 第144・145図, 図版86~88）

谷状地（SD 18）埋土下で検出した。調査区中央に位置し, SD 33・SD 173・SD 69等の溝に3方を囲まれる。

南北棟建物で主軸はN-7°-Wである。検出された柱穴はL字状に並び北東側を欠くが, 噴砂や湧水のため検出されなかつた穴があると仮定して, 真舎は2間×1間, 四方に庇が付くと推定する。しかし庇部分については, 桁行の柱間が85cm~2.25mと差が大きく一定でないこと, 真舎と柱列が揃わないことから, 檻の可能性もある。桁行6.8m, 梁行3.7mで面積は25.02m<sup>2</sup>である。

柱穴の平面形はほとんどが円形で, SP 32は梢円形である。柱穴規模は直径9~42cm, 深さ9~24cmである。埋土は黄橙色ロームが粒状に混じるオリーブ黒色シルトの単層が多い。SP 56では柱痕が残り, 柱痕はオリーブ黒色シルト質ローム, 掘形は灰色ロームを基調とする。SP 32は灰色粘土質ロームを埋土とする。SP 38では柱が出土したが, その他に出土遺物はない。

建物の年代は, 周囲を囲む溝と同時並行で, SK 47・SE 158が同時期または近い時期のものと推測されることから, 14世紀前半~15世紀前半頃と推定される。主軸方向がわずかにずれるSB 1と重複し, 建て替えが推定される。また, 土器祭祀の跡と考えられる土器集中地点とSB 2の範囲は重複しており, 時期が異なるものと推測される。

3号堀立柱建物（SB 3, 第144・145図, 図版86・87）

谷状地（SD 18）埋土下で検出した。調査区中央に位置し, SD 33・SD 173・SD 69等の溝に3方を囲まれる。

1間×1間の東西棟建物で, 主軸はN-82°-Eである。柱痕のあるSP 54が軸線に近い位置にあるが, 別棟の柱穴であろう。桁行3.25m, 梁行2.05mで, 面積は6.28m<sup>2</sup>である。小規模な建物で, 倉庫あるいは小屋など付属屋の性格の建物と考えられる。

柱穴の平面形はすべて円形で, 柱穴規模は直径21~37cm, 深さ10~16cmである。埋土は黄橙色ロームが混じるオリーブ黒色シルトの単層が多く, SP 62は灰色ロームが加わる。出土遺物はない。

建物の年代は, 周囲を囲む溝と同時並行で, SK 47・SE 158が同時期または近い時期のものと推測されることから, 14世紀前半~15世紀前半頃と推定される。

## 4号掘立柱建物（SB4, 第146図, 図版86~88）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央やや南西よりに位置し, SD156とSD169に2方を囲まれた区域の北西隅にある。付近には幅広の噴砂が多数あり、湧水も著しいので、この建物に属する柱穴も含め検出できなかった柱穴が周辺に存在した可能性もある。そのためSB4は完全な建物形態を示すことが難しいが、SP161・SP163で柱が出土したことから、これらを含めた軸線上にSB4を想定した。南北棟建物で主軸は真北である。東西2面に庇または櫛があると考える。

柱穴の平面形はほとんどが円形で、SP162・SP177は楕円形である。柱穴規模は直径16~62cm、深さ8~26cmである。SP161は柱の芯が虚になり樹皮の間に黒褐色粘土質ロームが入る。掘形埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。SP163は柱片とみられる木質遺物が出土したが小片で、黒褐色粘土質ロームが柱痕とみられる。掘形埋土は灰色砂質ロームである。その他の柱穴埋土は暗オリーブ色シルト、黒褐色粘土質ローム、灰色粘土質ローム、灰オリーブ色粘土質ローム等がある。

出土遺物は、SP161・SP163の柱である。切り合ひ関係は、SP163がSP164を切るが、SP164は浅い小穴で、SP163の一部とも考えられる。

建物の年代はSD156・SD169と同時並行で、北側の建物群とも同時期あるいは近い時期のものと推測されることから、14世紀前半~15世紀前半頃と推定される。

## 5号掘立柱建物（SB5, 第146図, 図版88）

調査区中央やや西よりの微高地で検出した。南北棟建物で、主軸はN-10°-Eである。桁行は3間あるが、梁行はSP283しか確認できないので、SP137からSP280の柱通りで構成される構列かもしだれないが、SP280~283の4基から柱（34・35）が出土しており、その太さから建物と推定する。柱材はSP280はサイカチ、SP281はクリである。柱穴は浅く、SP283のように掘形が検出されず、柱根のみ確認した例もあることから、後世に削平を受けて消滅した柱穴が他にも存在した可能性がある。

柱穴の平面形はすべて円形である。柱穴規模は直径11~23cm、深さ12~28cmである。掘形埋土は黒褐色シルト、灰色砂質ロームを基調とする。柱に対する掘形が狭く、SP283は掘形がほとんどない。SP137・SP281がSD110の上面から掘り込まれているのでSB5がSD110より新しい。

## 6号掘立柱建物（SB6, 第146図）

調査区中央やや西よりの微高地で検出した。2間×1間の南北棟側柱建物で、主軸はN-10°-Eである。桁行3.75m、梁行2.65mで、面積は9.93mである。SP225・SP253は柱の並びからややすくなるためSB6の柱としては検討の余地があるが、柱が出土していることと、地山が砂質であるため地震により元の位置からずれる可能性もあると考え、SB6に含めておく。

柱穴の平面形はSP225のみ楕円形で他は円形である。柱穴規模は直徑21~39cm、深さは4~22cmである。掘形埋土はオリーブ褐色砂が混じる黒褐色砂質ロームまたは暗灰黄色シルトが混じる黒褐色粘土質ロームである。掘形は柱に対して狭い。また、柱が地山にくい込んでおり、打ち込まれたものと考えられる。柱材はSP225がオニグルミ、SP253がウメかモモである。この2本の柱の放射性炭素年代はSP225が15世紀、SP253が15世紀中頃~17世紀前半であるので<sup>注22</sup>、これらをSB6とすれば建物の年代は15世紀中頃~後半と推定される。出土遺物はSP223・SP225・SP227・SP253の柱（37・36）、SP249の中世士器皿（I）1点である。

## 7号掘立柱建物（SB7, 第147図, 図版87）

調査区北東部の微高地で検出した。1間×2間の東西棟側柱建物で、主軸はN-73°-Wである。

<sup>注22</sup> 第二分集 自然科学研究 森式会社加瀬謙一郎著 1. 手稿財産通路跡・井戸周辺出土物の放射性炭素年代测定

桁行4.4m, 梁行3.6mで, 面積は15.31m<sup>2</sup>である。

柱穴の平面形はS P204のみ楕円形で他は円形である。柱穴規模は直径18~50cm, 深さは8~50cmである。掘形埋土は一様ではなく, オリーブ黒色シルト質ローム, 黒褐色シルト, 灰色粘土質ローム等である。S P209・S P272には柱痕があり, S P199・S P202・S P204は上下2層に分かれる。出土遺物はない。S P204はS K12の埋土上面から掘り込まれ, S K12より新しい。

#### 8号掘立柱建物 (S B 8, 第147・148図, 国版87・88)

調査区北東部の微高地で検出した。2間×1間の南北棟側柱建物で, 主軸はN-8°-Eである。桁行6.1m, 梁行2.7mで, 面積は16.75m<sup>2</sup>である。

柱穴の平面形はS P238のみ不整形で他は円形である。柱穴規模は直径18~57cm, 深さは11~24cmである。埋土は一様ではなく, オリーブ黒色砂質ローム, オリーブ褐色シルト, 暗灰黄色シルト等がある。

出土遺物はS P197・S P238・S P257の柱(38・39)である。柱の材はS P238がクリ, S P257がカバノキ属である。切り合い関係は, S P238がS B10のS P239及びS K12より新しく, 放射性炭素年代はS P238が15世紀前半, S P239が13世紀末~15世紀初頭であることから<sup>注32</sup>, 建物の年代は15世紀前半と推定される。

#### 9号掘立柱建物 (S B 9, 第147・148図, 国版87)

調査区北東部の微高地で検出した。2間×1間の南北棟側柱建物で, 主軸はN-2°-Eである。桁行5.45m, 梁行5.2mで, 面積27.68m<sup>2</sup>である。

柱穴の平面形は円形である。柱穴規模は直径13~43cm, 深さは4~24cmである。埋土は一様ではなく, オリーブ黒色シルト, 灰色ローム, 灰オリーブ色シルト等がある。出土遺物はS P192の柱である。切り合い関係はS P208がS K207より古い。

#### 10号掘立柱建物 (S B 10, 第147・148図, 国版87・88)

調査区北東部の微高地で検出した。2間×1間の南北棟側柱建物で, 主軸はN-1°-Wである。桁行4.95m, 梁行1.95mで, 面積は7.82m<sup>2</sup>である。S P190は埋土断面が柱痕状であるためS B10に含めたが, 柱の並びからずれるので確実ではない。

柱穴の平面形は, S P228がやや不整形であるが, 他は円形である。柱穴規模は直径27~51cm, 深さは16~30cmである。掘形埋土は一定ではなく, オリーブ黒色粘土質ローム, オリーブ黒色シルト, 灰オリーブ色シルト, 灰色シルト質ローム等である。

出土遺物はS P239・S P258の柱(45~47)で, S P258の柱のうち45は立った状態で出土したが, その他にもう1点(46)出土した。材はS P239がクリ, S P258がクリとハンノキである。S P239, S P258はともに地山深くくい込んでおり, 打ち込まれたものと考えられる。切り合い関係は, S P239がS B 8のS P238より古く, S K12より新しいので, 建物の年代は14世紀~15世紀初頭と推定される。

#### 11号掘立柱建物 (S B 11, 第149・150図, 国版89)

谷状地(S D18)の埋土上面で検出した。調査区中央に位置し, S E28・S B12の南側に隣接する。3間×2間の南北棟側柱建物で, 主軸はN-8°-Wである。桁行6.4m, 梁行5.5mで, 面積は33.87m<sup>2</sup>である。S P23は柱が出土したが軸線上ではなく, 別棟の柱穴であろう。S P30は対称位置に柱穴がなく確実ではないが, 深さもあるので一応S B11に含めておく。

柱穴の平面形はS P13・S P30のみ楕円形で, 他は円形である。柱穴規模は直径22~48cm, 深さは

<sup>注32</sup> 第二分冊 自然科学分析 株式会社放射性年代測定所「S, 放射性炭素年代測定」, 手洗野赤浦遺跡・岩坪岡出島遺跡三十数軒の放射性炭素年代測定」

13~38cmである。柱穴埋土はオリーブ黒色粘土質ローム、オリーブ黒色シルト等を基調とし、上下2層に分かれるものが多い。

出土遺物はS P13の加工材、S P21・S P29・S P105の柱(40~42)、S P14の中世土師器皿・瀬戸美濃の小片各1点、S P21の土師器小片1点である。柱はすべてクリ材で、30cm以上の長さがある。立った状態で、掘形から下へ沈み込むように出土しており、打ちこまれたものと考えられる。S P13から出土した加工材は3点で、長さ12~17.5cm、厚さ0.5~4.5cmで重なって出土したが、用途は不明である。中世土師器は非クロコ成形で一段のナデを施すもの、瀬戸美濃は灰釉のかかる破片であるが、小片であり、詳細な時期は不明である。S D18の埋土上面で検出した建物はS B11の他にはS B12のみで、井戸S E28と畠等があるが、これらはS B11と同時期または近い時期の遺構と推定する。

#### 12号掘立柱建物 (S B12, 第149・150図, 図版89)

谷状地 (S D18) の埋土上面で検出した。調査区中央に位置し、S E28の南東側に隣接する。主軸はN-51°-Eである。周辺は幅の広い噴砂が多く、検出できなかった柱穴が他にも存在した可能性を考え、柱の残る柱穴、深い掘形をもつ柱穴を中心として、並ぶ柱穴をS B12としておくが、不明な点は多い。

柱穴の平面形はS P20が梢円形で、他は円形である。柱穴規模は直径23~69cm、深さ10~68cmである。掘形埋土はオリーブ黒色シルト質ローム、灰色シルト等を基調とする。S P20・S P100の掘形は上方を広く掘り、下部はその一部を深く掘り下げる2段掘りになっている。

出土遺物はS P20の土師器小片、S P19・S P20・S P101の柱(44)である。S P20の柱材はイタヤカエデで、残存長は95cmと長い。他の柱はS P19が15.5cm、S P101が8cmの小片である。S E28に隣接していることから井戸に関連する遺構の可能性もあるが、詳細は不明である。

#### (2) 檻

##### 1号檻 (S A1, 第151図, 図版87)

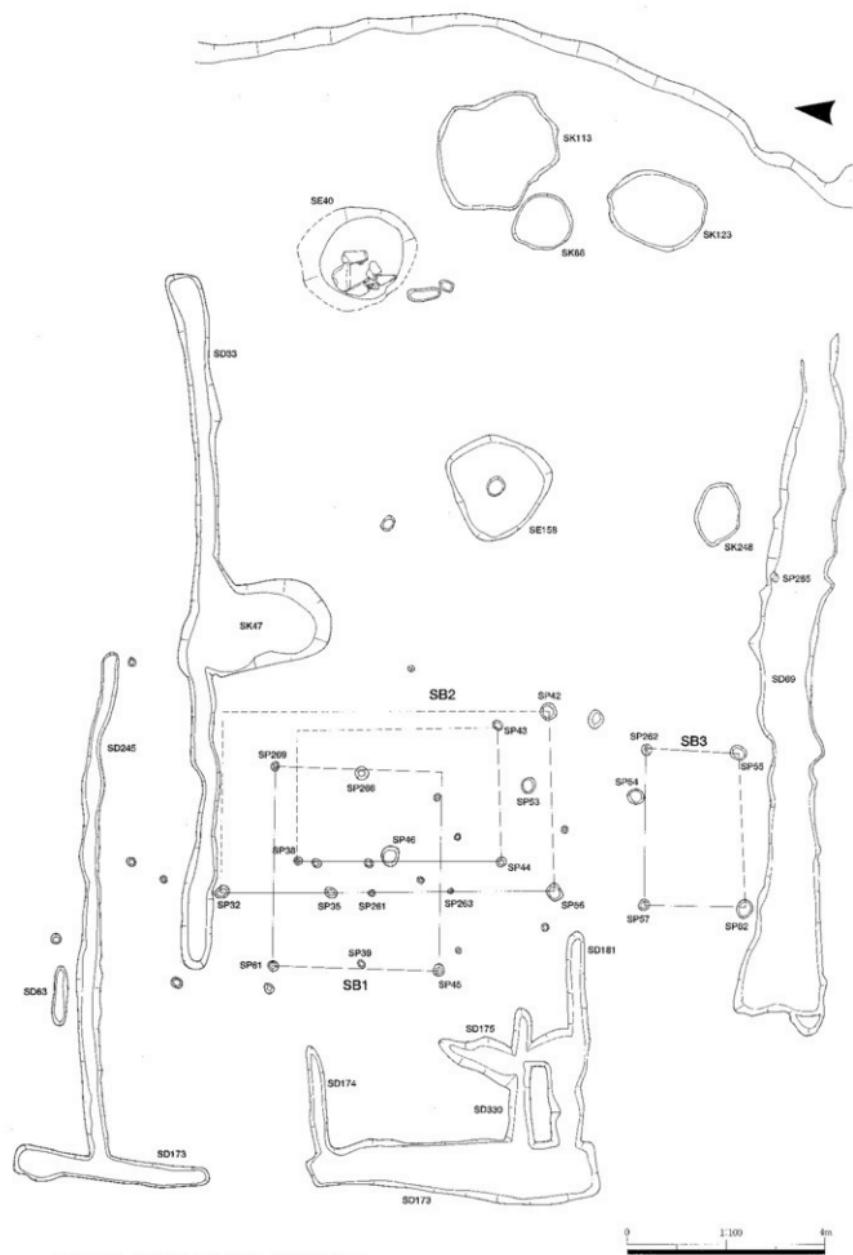
谷状地 (S D18) 埋土下で検出した。調査区北西部に位置し、S B1~3を取り囲む溝の外にある。柱間が一定でなく檻とする根拠に乏しいが、同一線上にある4基の柱穴をS A1とした。付近には幅広の噴砂が網目状に走り、湧水も著しいため、検出できなかった柱穴とともに建物を構成していた可能性もあるが、S A1・2の端には太い柱があり、塀や門とも考えられる。

柱穴の平面形は円形で、規模は直径21~40cm、深さは8~22cmである。掘形埋土は灰色シルト質ローム、灰色粘土、オリーブ黒色シルト質ローム等である。S P132で柱(48)が出土したが、斜めに倒れて地山にくい込んでおり、地震による液状化現象の影響かもしれない。柱材はスルデで、直径25cmと太い。S D18埋土の下で検出しているので、遺構の年代は16世紀が下限と推定される。

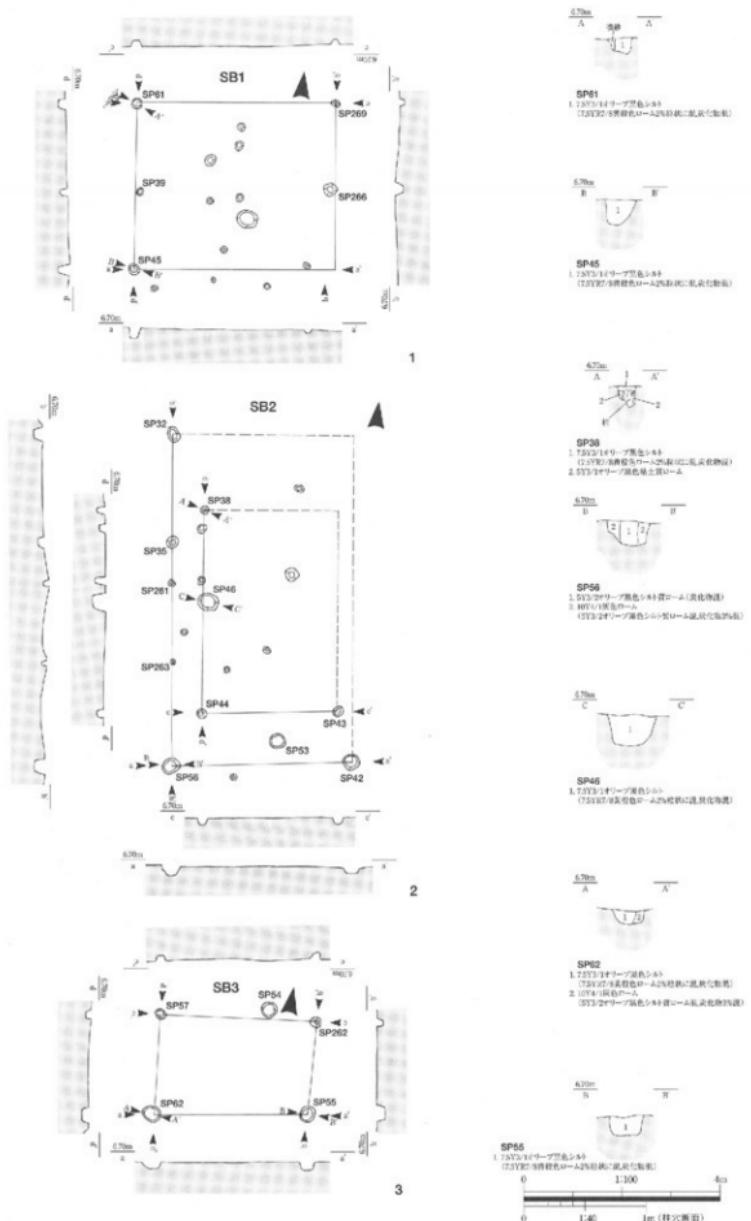
##### 2号檻 (S A2, 第151図, 図版87)

谷状地 (S D18) 埋土下で検出した。調査区北西部に位置し、S B1~3を取り囲む溝の外にある。柱間が一定でなく檻とする根拠に乏しいが、同一線上にある6基の柱穴をS A2とした。付近には幅広の噴砂が網目状に走り、湧水も著しいため、検出できなかった柱穴とともに建物を構成していた可能性もあるが、S A1・2の端には太い柱があり、塀や門とも考えられる。

柱穴の平面形は円形で、規模は直径19~33cm、深さは20~30cmである。掘形埋土はオリーブ黒色シルト質ロームを基調とする。S P112には柱痕があり、S P122からは柱が出土した。S D18の埋土の下で検出しているので、遺構の年代は16世紀が下限と推定される。

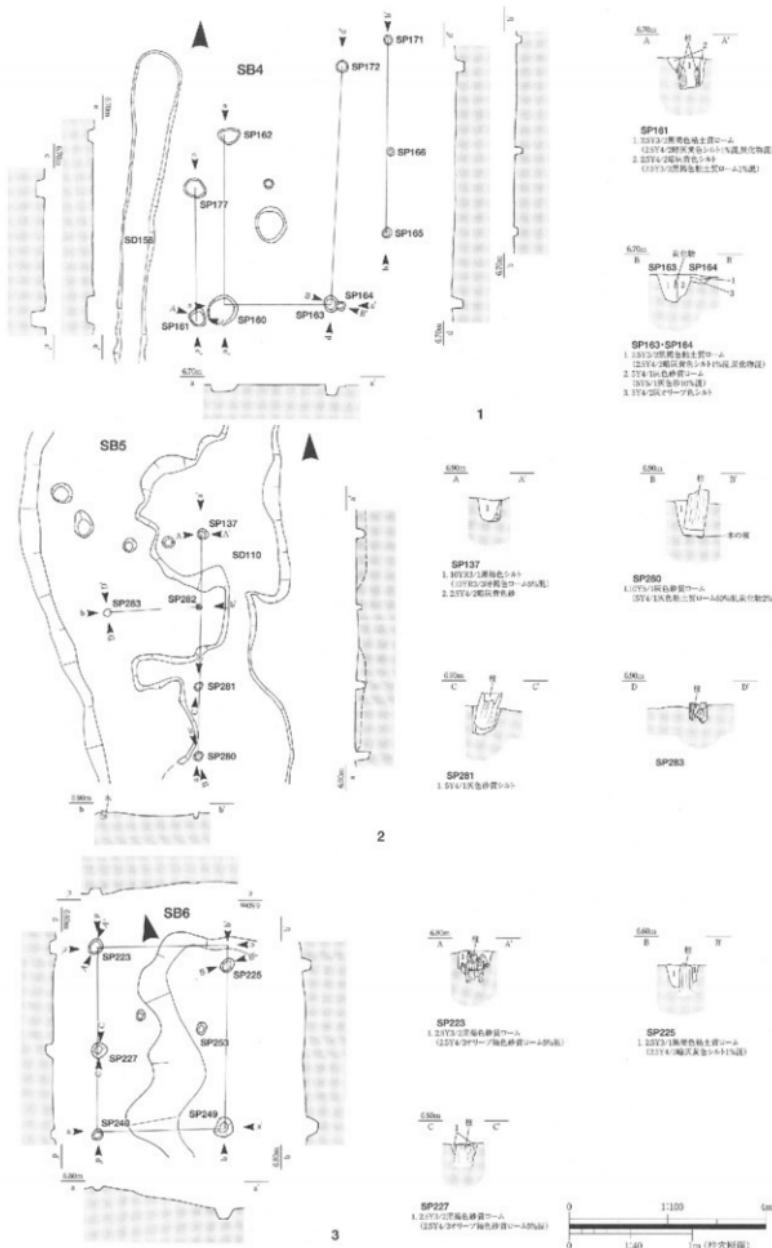


第144図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SB1・SB2・SB3・SP285



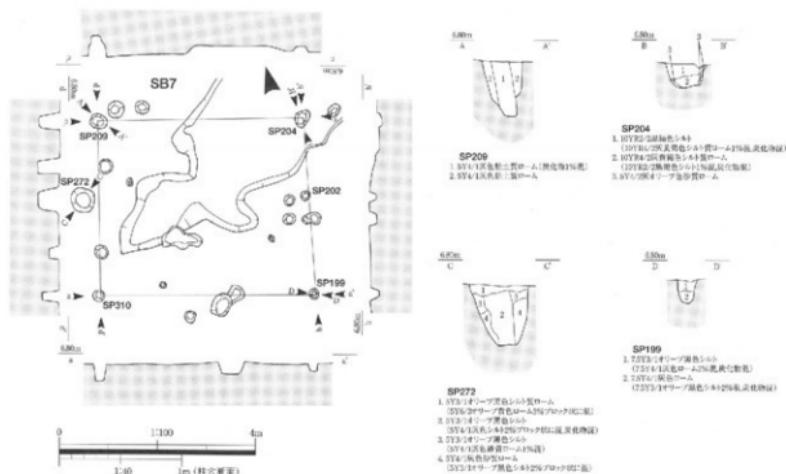
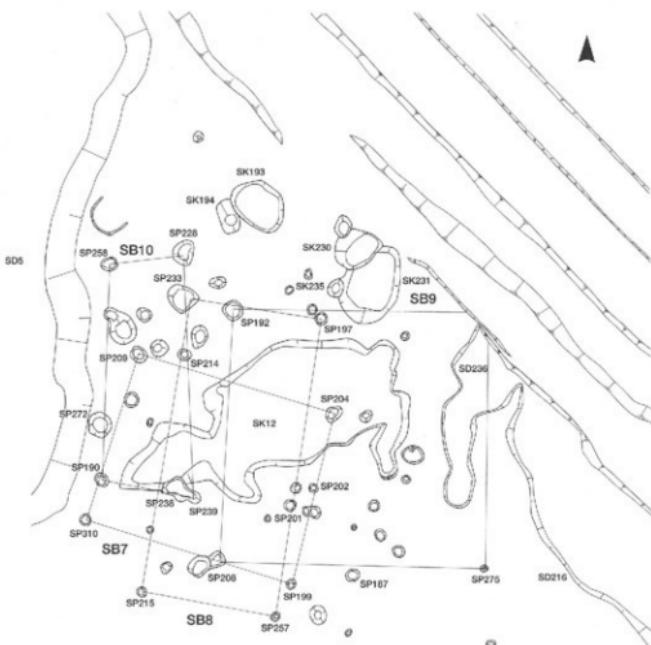
第145図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1 SB1 2 SB2 3 SB3



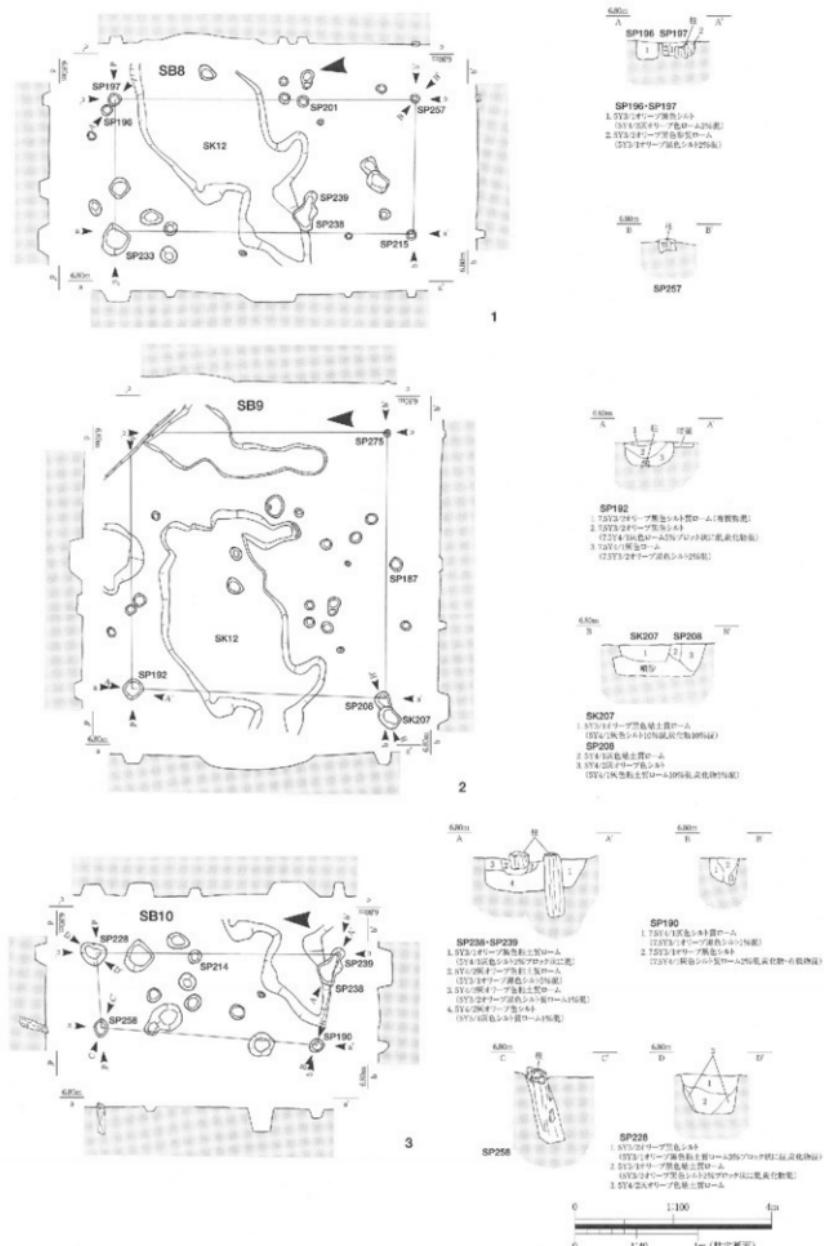
第146図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SB4 2. SB5 3. SB6



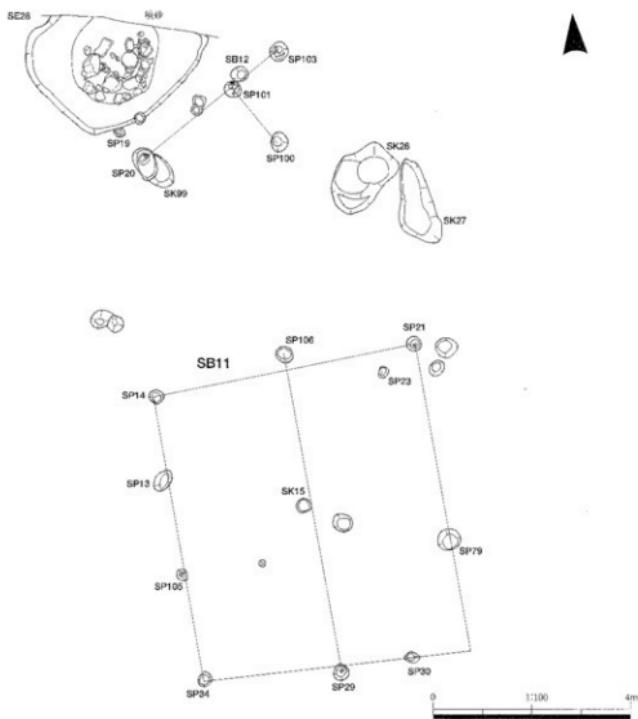
第147図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

SB7～SB10

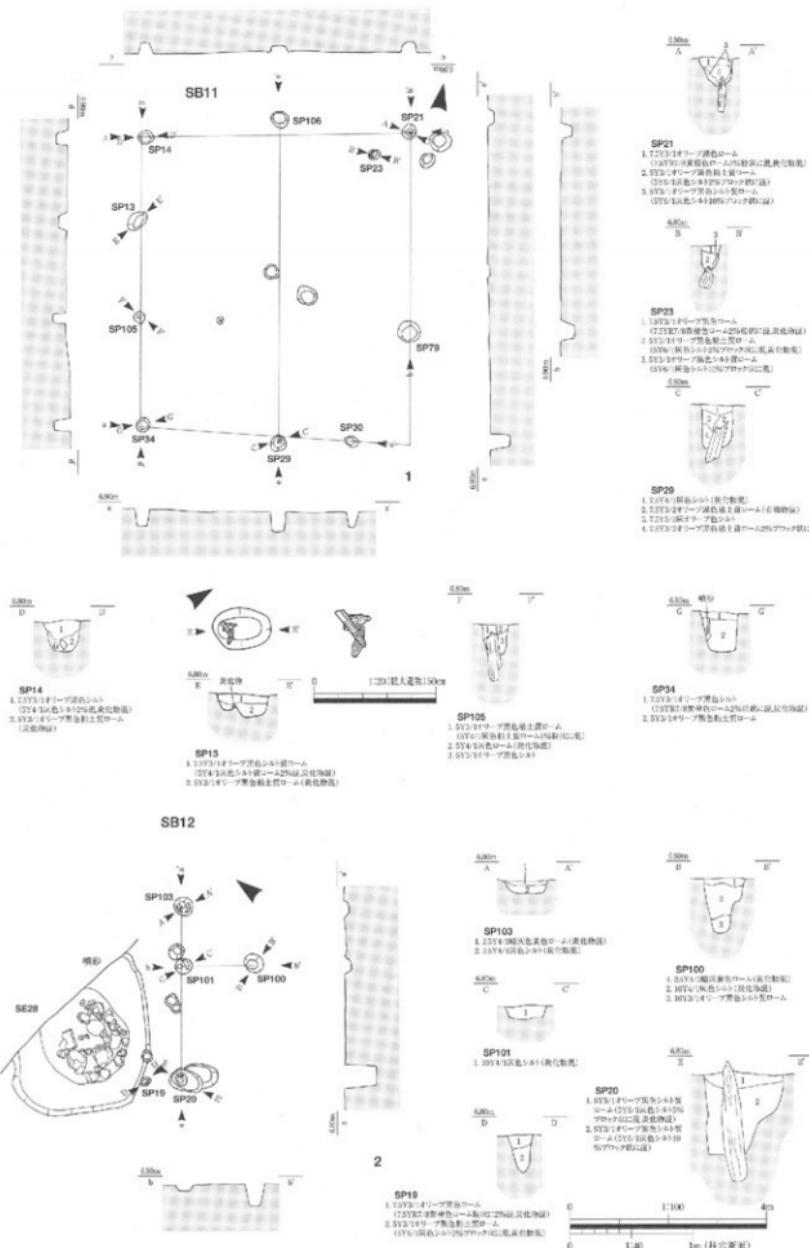


第148図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1 SBS 2 SB9 SK207 3 SB10

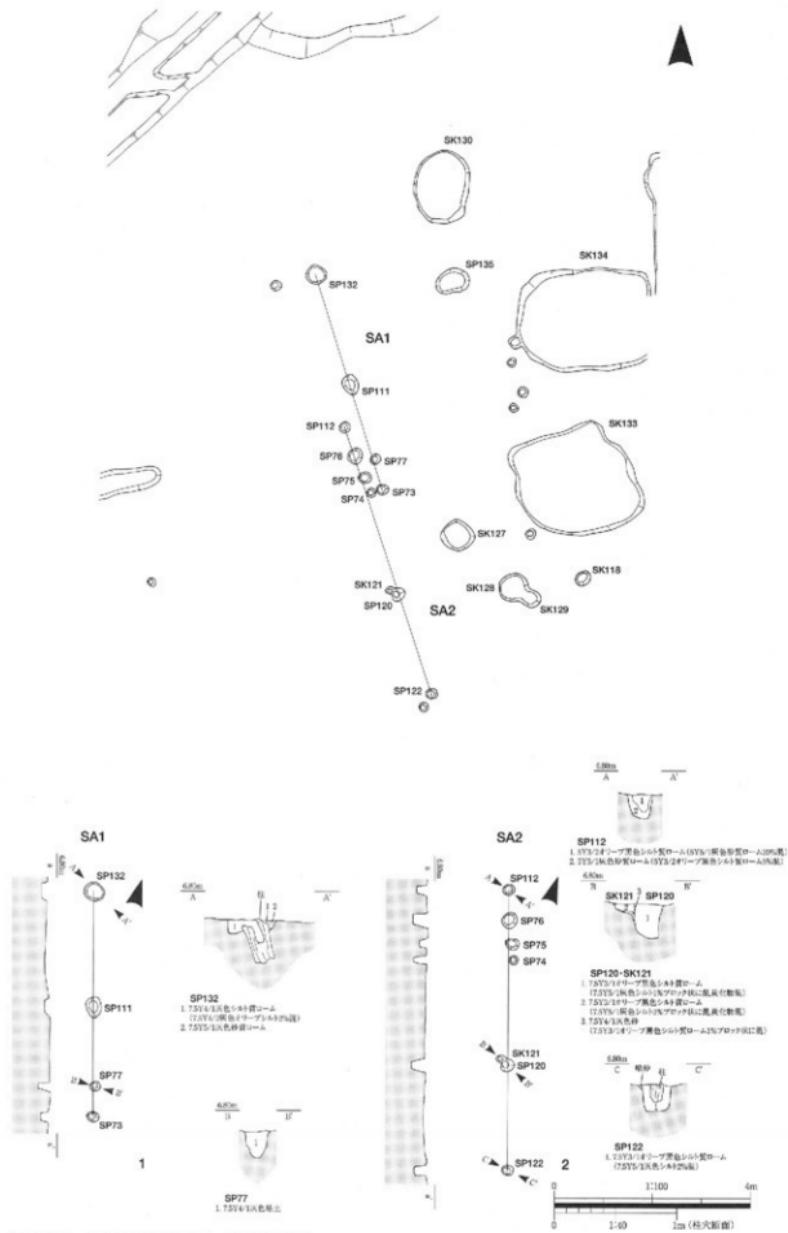


第149図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SB11 SB12



第150図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SB11・SP23 2. SB12



第151図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SA1 2. SA2

### (3) 柱穴

柱が出土していながら、あるいは埋土に柱痕が認められながら、掘立柱建物や柵列に並ばない柱穴等を以下に述べる。手洗野赤浦遺跡は地震による液状化現象の影響で、最大で幅1m、長さ14mの大型の噴砂が谷状地（S D 18）や自然流路（S D 4）等比較的粘質の土が堆積した場所に多く発生し、遺構が引き裂かれたり、変形したりしている。大型の噴砂にⅢ層が引き裂かれて、柱穴が元位置を保っていないことも考えられる。また低地では湧水が激しく、確認が困難であった遺構もあると思われる。以下の柱穴も本来は建物等に属した可能性があるが、詳細は不明である。

#### 23号柱穴（S P 23、第150図、図版89）

谷状地（S D 18）の埋土上面で検出した。S B 11の範囲内にあり、北東端にあるが並ばない。

平面形は円形で直径は22cm、深さは19cmである。掘形埋土はオリーブ黒色ローム、オリーブ黒色粘土質ロームを基調とする。柱（43）が掘形より下へ沈み込むようにして出土し、打ち込まれたものと考えられる。

#### 51号柱穴（S P 51、第152図）

谷状地（S D 18）埋土下で検出した。調査区中央に位置し、S E 40の南側に隣接する。近辺に建物はないが、隣接するS P 65でも柱が出土している。S E 40に隣接することから井戸の覆い屋の可能性もあるが、覆い屋を構成する他の柱穴は検出されなかった。

平面形は梢円形で長径66cm×短径22cm、深さ20cmである。掘形埋土はオリーブ黒色シルトと灰色砂である。細長い掘形の中央に柱（49）が残る。材はクリである。残存長は35.7cmで地山に沈み込んでおり、打ち込まれたものと考えられる。

#### 53号柱穴（S P 53、第152図）

谷状地（S D 18）埋土下で検出した。調査区中央のS B 2の範囲内にあり、南側に位置するが、並ばない。

平面形は円形で、直径31cm、深さ8cmである。埋土のオリーブ黒色シルト質ロームは柱痕とみられる。掘形埋土は灰色ロームである。出土遺物はない。

#### 54号柱穴（S P 54、第152図）

谷状地（S D 18）埋土下で検出した。調査区中央のS B 3の北面の軸線に近い位置にあるが、ややずれており、対称位置に柱穴がないため、別棟の建物であろうか。

平面形は円形で、直径33cm、深さ10cmである。埋土のオリーブ黒色シルト質ロームは柱痕とみられる。掘形埋土は灰色ロームである。出土遺物はない。

#### 65号柱穴（S P 65、第152図）

谷状地（S D 18）埋土下で検出した。調査区中央に位置し、S E 40の南側に隣接する。

近辺に建物はないが、隣接するS P 51でも柱が出土している。S E 40に隣接することから井戸の覆い屋の可能性もあるが、覆い屋を構成する他の柱穴は検出されなかった。

平面形は円形で、直径28cm、深さ12cmである。埋土はオリーブ黒色シルトと灰色砂である。柱（50）が出土しており、材はリョウブである。残存長は18.2cmで地山に沈み込んでおり、打ちこまれたものと考えられる。

#### 126号柱穴（S P 126、第152図）

調査区中央やや東よりの微高地で検出した。S B 5の北側に隣接しているが並ばない。

平面形は円形で直径42cm、深さ18cmである。掘形埋土は灰色シルト等である。オリーブ黒色粘土質

ロームは柱痕とみられる。出土遺物はない。

#### 135号柱穴（S P 135, 第152図）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区西側に位置し、S A 1の東側に隣接するが並ばない。平面形は梢円形で長径70cm, 深さ36cmである。掘形埋土は柱の周りが灰色シルト、その外側がオリーブ黒色シルト質ロームである。柱（55）は中央に立って出土した。材はクリ、残存長は48.8cmと長く、太い。

#### 152号柱穴（S P 152, 第152図）

調査区北側の微高地で検出した。S D153を挟んでS P 157と対称位置にある。溝にかけられた簡易な橋を固定したものであろうか。

平面形は円形で直径16cm, 深さ10cmである。埋土は灰色砂質ローム混じりのオリーブ黒色シルト質ロームである。加工した棒状木製品が立った状態で出土したが、細く、橋脚にあたるかどうかは不明である。

#### 157号柱穴（S P 157, 第152図）

調査区北側の微高地で検出した。S D153を挟んでS P 152と対称位置にある。溝にかけられた簡易な橋を固定したものであろうか。

平面形は円形で直径18cm, 深さ16cmである。埋土はオリーブ黒色シルト質ロームと灰色ロームを基調とする。出土遺物はない。

#### 191号柱穴（S P 191, 第152図）

調査区北東の微高地で検出した。

平面形は円形で直径31cm, 深さ36cmである。埋土は灰色シルト質ローム混じりのオリーブ黒色シルトである。柱が出土した。

#### 205号柱穴（S P 205, 第152図）

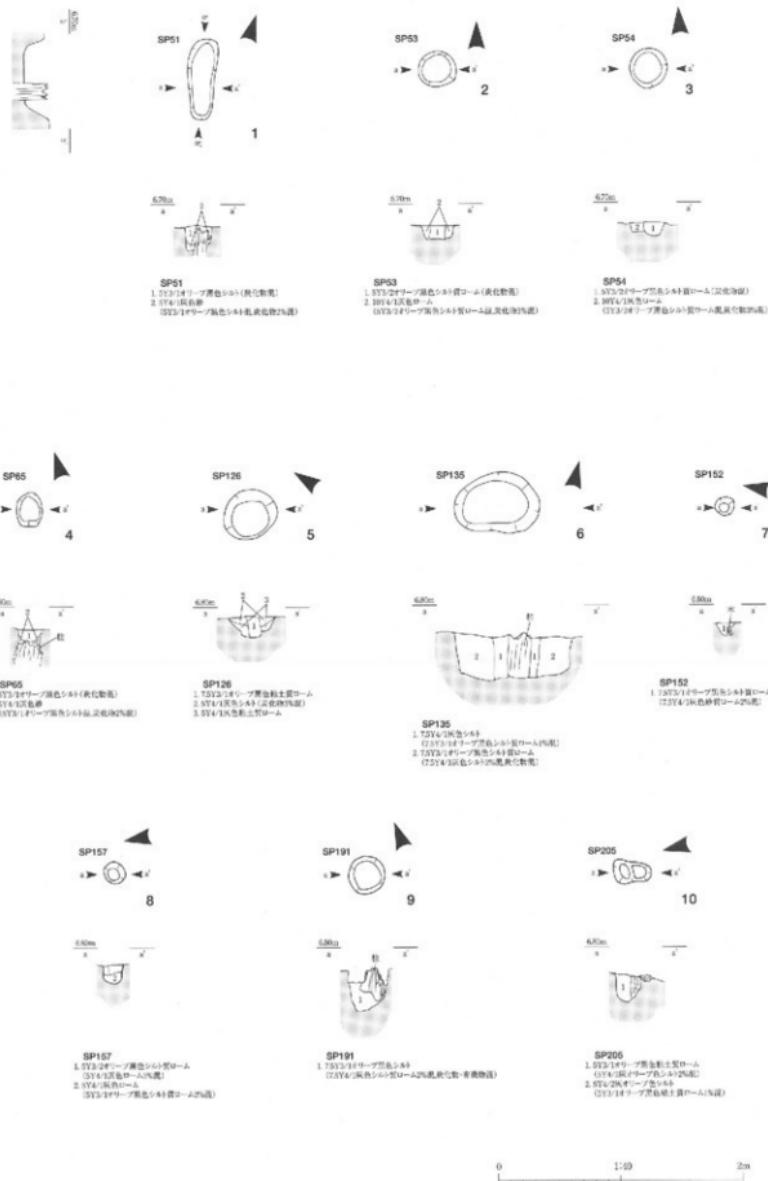
谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区中央南側にある。

平面形は梢円形で長径30cm, 深さ22cmである。埋土はオリーブ黒色粘土質ロームと灰オリーブ色シルトを基調とする。残存長9.2cmの柱片（51）が出土した。

#### 285号柱穴（S P 285, 第144図）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区中央に位置し、S D69の埋土上面から掘り込まれている。

出土した柱（52）はクリ材で、残存長は40.1cmである。掘形は確認されなかった。ゆるい砂質の堆山であるため打ち込まれたものと考えられる。



第152図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SP51 2. SP53 3. SP54 4. SP65 5. SP126 6. SP135 7. SP152 8. SP157 9. SP191
10. SP205

## (4) 溝・自然流路・池

## 4号自然流路 (SD 4, 第153・154図, 図版90)

調査区南東に位置する。自然流路としたが、埋土は灰色シルト質ロームとオリーブ黒色シルトが上下に水平堆積したものであり、底面は平坦であることから、河川跡ではなく低地が沼地化して徐々に埋積したものと考えられる。遺跡が所在する一帯は小矢部川低地とよばれる小矢部川の氾濫平野であることから、小矢部川またはその支流の氾濫により形成された小地形とも推測されるが、調査区外に広がっており詳細は不明である。検出した最大幅は25.4mで、深さは30cmである。西肩は緩やかに傾斜し、東に向かって深くなる。地山が砂質であるため、底面では湧水が見られる。

出土遺物は土師器・珠洲(4・5)・中国製青磁(2・3)・円形板(14)・漆器(23)・加工板(60・62)・種実(モモ)で、他に焼けた自然礫(淡飛流紋岩)が数個出土した。珠洲と土師器の破片が多く、珠洲は甕・壺・擂鉢の破片がそれぞれ一定量ある。埋土の切り合い関係では、SB 6のSP225はSD 4の上面で検出した遺構で、SD 4が古い。また、SE 183はSD 4の埋土下から検出した遺構で、SD 4が新しい。出土遺物とSE 183の上層から出土した部材の放射性炭素年代から<sup>14C</sup>、14世紀末～15世紀に埋まつたものと考えられる。

## 5号池 (SD 5, 第155・156図)

調査区北側に入り込んでいる幅の広い溝状の遺構である。南端は緩やかに傾斜し、東西の肩は弧状に立ち上がる。最大幅9.5m、深さ76cmである。埋土は上層のオリーブ黒色シルト質ローム、下層のオリーブ黒色粘土質ロームを基調とし、上下層とも噴砂に切られている。調査区に延びるため全容は不明であるが、埋土の堆積状況からは水勢のある河川跡とは考えにくく、池の可能性が高いと考える。調査中においても著しい湧水によって水を湛え、排水作業を行うと干溝によって却つて遺構の崩壊が進むという状況であった点や、SD 5に沿つた道の側溝SD 6から幾分水深のある環境が周囲にあつたことを示唆するヒシの実が出土している点から<sup>14C</sup>、SD 5は當時湛水していた池と推定する。SD 6等の花粉・種実分析結果から周辺に水田・畑地があったと推測され、池の具体的な用途については、水田に関連する養魚池<sup>注34</sup>、溜池等が考えられる。

出土遺物は土師器・中世上土師器(6)・珠洲(7・8)・中国製白磁で、破片が数点ずつ出土している。出土遺物は14世紀末～15世紀前半のものであるが、SD 6に伴うSD 170とは切り合いがみられないことから15世紀後半に埋没した可能性が高いと考えられる。

## 6号溝 (SD 6, 第155・157・158図, 図版90)

調査区北側の微高地で検出した。SD 5に沿つてほぼ直角に曲がる。SD 110・SD 237と平行に走り、直角に枝分かれするSD 170をもつてSD 110と繋がる。北側ではSD 151を挟んで徐々に浅くなり途切れているが、一連のものと推測される。最大幅1.75mで、深さ18cmである。埋土はオリーブ黒色粘土質ローム等を基調とする。SD 110とともに道路の側溝であったと考えられる。

出土遺物は土師器・中世上土師器(9・10)・珠洲(18～21)・越前・古瀬戸(16・17)・信楽・中国製青磁(11～13)・中国製白磁(14・15)・加工板(58・59・61)・底板(15)・曲物(3)・漆器(20)・五輪塔(1)・砥石(7)・種実(モモ・カキノキ)で、他に焼けた自然礫(凝灰岩・流紋岩)が出土した。珠洲の破片が多く、甕・壺・擂鉢がそれぞれ一定量ある。その他の陶磁器は少量ずつ出土している。自然礫の他は割れた破片であり、不要品を廃棄したものと考える。出土遺物から15世紀後半頃に埋没した遺構と考えられるが、開削は14世紀に遡る可能性もある。

SD 6の埋土を分析した結果、アサ・アブラナ科等の花粉や、イネ・アサ・シソ属等の栽培種、水

<sup>注34</sup> 第二分冊「自然科學分冊」株式会社加藤出版研究室「1. 放射性炭素年代測定」、1. 手漉和紙遺跡・赤坪岡出島遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」  
注35 第二分冊「植物形態分冊」株式会社ハリオ「2. 有田燒・有田窯・有田燒出島遺跡出土の有田燒」  
注36 第二分冊「植物形態分冊」株式会社ハリオ「3. 有田燒・有田窯・有田燒出島遺跡出土の大野燒物化名」

田雜草であるコナギ等の種実を検出し、水田や畑地が付近に存在した可能性が示唆された。また、当遺跡の建物の柱材にも利用されているクリ、オニグルミ、ハンノキ、モモ等の落葉樹が周辺にも生育していたことが推定された<sup>107</sup>。ヒシの果実が検出され、幾分水深のある水域が付近に存在した可能性があることは、隣接するSD5が水を湛え、SD6と同時期に存在したことを傍証するものと考えられる。

### 33号溝（SD33、第161・162図、図版98）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央を東西に走る溝で、SK47と接する。最大幅75cmで、深さ22cmである。埋土はオリーブ黒色シルトである。南側にある建物域を区画する溝と考えられる。

周辺の地山直上とSD245内で中世土師器皿がまとめて出土しており祭祀行為の跡と推測されるが、SD33内から出土遺物はなく、土器祭祀がSD33に伴わない可能性がある。SD33に交差するSK47の埋土上部で出土した土師器が祭祀に使用されたものと同じタイプであるため、SK47と土師器皿祭祀の新旧は明白であるが、SK47とSD33の切り合い関係は噴砂のため明確ではなかった。

### 63号溝（SD63、第161・162図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央を東西に走る溝で、SD245と並走する。最大幅26cmで、長さ約1.22m、深さ7cmである。埋土は灰色ロームである。出土遺物はない。

### 64号溝（SD64、第161・162図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央に位置する。最大幅32cmで、長さ約89cm、深さ8cmである。埋土はオリーブ黒色シルトである。出土遺物はない。

### 69号溝（SD69、第161・162図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央を東西に走る大型の溝で噴砂により変形している。SD169と並走する。最大幅1.6mで、深さ14cmである。埋土はオリーブ黒色シルトを基調とする。北側の建物群を区画する溝と考えられ、SD169との間は道路であったと推測する。出土遺物はない。

### 109号溝（SD109、第153・154図）

調査区東側の微高地で検出した。SD110と南側で合流するが、本来はSD110の幅は北側と同じ程度で交わらず並走していたものと考えられ、ともに道路の側溝と推定される。最大幅56cmで、深さ18cmである。埋土は下層に灰色砂質ロームが薄く堆積し、上層はオリーブ黒色粘土質ロームを基調とする。

出土遺物は土師質土器小片1点、須恵器壺底部片1点、加工材1点、加工板1点、種実（モモ）9点である。

### 110号溝（SD110、第153・154図、図版90）

調査区北東の微高地で検出した。南北に走る溝で、北側でSD6、南側でSD9と並走し、ともに道路の側溝であったと考えられる。SD151が枝分かれし、SD170が直交するが、切り合いはない。最大幅5mで、深さ30cmである。南側の幅が北側より極端に広くなっているが、地山が砂質土であるため、後世に肩が崩れて幅が広くなったものと考えられる。本来は北側で検出された溝幅が実際に機能していた時の幅に近いものであろう。埋土は下層に灰色砂、灰色シルト質ロームが薄く堆積し、上層は黒褐色粘土質ローム、暗オリーブ灰色シルト質ローム等を基調とする層が堆積する。

出土遺物は須恵器（22）・中世土師器（23）・株洲（24）・古瀬戸・漆器（22・26）・種実（モモ）である。すべて破片で、株洲片が多く、壺・壺・擂鉢がそれぞれ一定量ある。須恵器は杯身と杯蓋の破

注37 第二分類：自然科學分析：株式会社リバ・ラビ 舟山雅徳「E、花粉分析」  
第一分類：自然科學分析：株式会社リバ・ラビ 舟山雅徳、須田裕志「V、土質學小系述論：岩村西田森遺跡から出土した大根植物化粧」  
第二分類：自然科學分析：株式会社リバ・ラビ 舟山雅徳「G、須田裕志「I、手洗野赤浦遺跡：須田裕志尚應指出木本植物の個体別度」

片が各1点、中世土師器は皿片が1点、古瀬戸は天目茶碗が1点である。15世紀後半に埋没したと推定されるSD6と同時期の遺構と考えられる。

#### 138号溝（SD138、第153図、図版99）

調査区東側の微高地で検出した。SD237・SD63を結ぶ線上にあり、これらは一連のものであった可能性が高い。噴砂に切られ変形している。最大幅1.37mで、深さ17cmである。埋土はオリーブ黒色シルト質ロームである。出土遺物は珠洲甕の小片2点である。

#### 139号溝（SD139、第163図、図版87）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区南西に位置する南北方向の溝である。SD142と平行に走り、SD141と直交する。これらの溝に囲まれた範囲に建物は検出されなかつたが、方形にめぐることから区画溝の可能性もある。最大幅46cmで、深さ7cmである。埋土は暗灰黄色シルト質ローム混じりの黒褐色粘土質ロームを基調とする。出土遺物はない。

#### 140号溝（SD140、第163図、図版87）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区南西に位置する東西方向溝である。SD141と平行に走り、SD139・SD142と直交する。これらの溝に囲まれた範囲に建物は検出されなかつたが、方形にめぐることから区画溝の可能性がある。また、SD169と同じ線上にあることから道路の側溝の可能性もある。最大幅46cmで、深さ7cmである。埋土は暗灰黄色粘土質ロームを基調とする。出土遺物はない。

#### 141号溝（SD141、第163図、図版87）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区南西に位置する。SD140と平行に走り、SD142と直交する。区画溝または道路の側溝の一部と考えられる。最大幅50cmで、深さ10cmである。埋土は灰色シルトである。出土遺物はない。

#### 142号溝（SD142、第163図、図版87）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区南西に位置する。SD139と並行して走り、SD140・142と直交する。これらの溝に囲まれた範囲に建物は検出されなかつたが、方形にめぐることから区画溝と考えられる。最大幅54cmで、深さ8cmである。埋土は上層が灰オリーブ色シルト、下層がオリーブ黒色砂質ロームを基調とする。出土遺物はない。

#### 147号溝（SD147、第155・157図）

調査区北側の微高地で検出した。SD6から分岐する短い溝で、切り合いはない。最大幅50cmで、深さ10cmである。埋土は灰黄褐色ロームである。出土遺物はない。

#### 150号溝（SD150、第163図、図版87）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。東西に走る短い溝である。最大幅67cmで、深さ10cmである。埋土は上層がオリーブ黒色粘土質ローム、下層が灰色砂質ロームである。短い溝ではあるがSD140とはほぼ平行で、ともに区画溝であった可能性もある。出土遺物はない。

#### 151号溝（SD151、第153・154図）

調査区北端の微高地で検出した。SD110より弧状に分岐してほぼ直角に折れ、SD5に至る。道路を横切ってSD110とSD5を繋ぐ意図が見受けられる。あまり勾配はないが、周辺の地山の標高は南の方に若干高くSD151付近が最も低いことから、道路側溝から池へ排水することを目的とした溝と考えられる。最大幅76cmで、深さ10cmである。埋土は上層が暗オリーブ色シルト質ローム、下層が灰色砂で、SD110と同様の埋土である。出土遺物はない。

## 153号溝（S D153, 第159図）

調査区北端の微高地で検出した。両肩にS P152・S P157があり、関連が考えられる。S D110と直交し、切り合いはない。最大幅80cmで、深さ6cmである。埋土は灰色砂質ロームである。出土遺物はない。

## 154号溝（S D154, 第159図）

調査区北端の微高地で検出した。調査区外に延びており溝としたが、大型の土坑の可能性もある。S D110と直交する。最大幅2.5mで、深さ17cmである。埋土は上層がオリーブ黒色ローム、灰色砂質ロームで、下層が灰色砂である。出土遺物はない。

## 156号溝（S D156, 第160図）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区南東を南北に走る溝である。東側に遺構群が多くあり、西側にはほとんど遺構がないことから集落域を分ける溝と考えられる。直線的でS D6・S D110と同様の規模であり、地形からもこの西側の微高地を削り路面を平坦にした可能性が窺えるので、道路側溝と推定する。最大幅76cmで、深さ20cmである。埋土は上層と下層が灰色砂、中層がオリーブ黒色砂質ロームである。出土遺物は珠洲の甕片2点、擂鉢片1点、円形板（16）が1点である。

## 168号溝（S D168, 第160図）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区ほぼ中央に位置する。S D169と直交する短い溝である。最大幅30cmで、深さ6cmである。埋土は灰色ロームである。出土遺物はない。

## 169号溝（S D169, 第160図）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区ほぼ中央を東西に走る溝である。S D168と直交し、北側のS D69と並行して走る。建物域を区画し、S D69とともに道路の側溝であったと考えられる。最大幅45cmで、深さ7cmである。埋土は灰色ロームを基調とする。出土遺物はない。

## 170号溝（S D170, 第155図）

調査区中央やや東側の微高地で検出した。S D110・S D6と直交し、それらを繋ぐ溝で、埋土の切り合いはない。さらにS D5に至っており、S D151同様に道路側溝から池への排水を目的とする溝と考える。主にS D6の排水を意図したもので、補完的にS D110からの水も受け入れた溝であろう。最大幅1.46mで、深さ8cmである。出土遺物は須恵器壺片1点、中世土師器皿片1点、珠洲甕・擂鉢片各1点である。

## 173号溝（S D173, 第161・162図、図版87）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区中央西側に位置する。S D245・S D174・S D330・S D181に直交し、S D175とほぼ並行して走る。S D174の北側で途切れる。東側の建物群の区画溝と考えられる。埋土は上層がオリーブ黒色シルト、下層が灰色砂を基調とする。最大幅1.3mで、深さ10cmである。出土遺物は焼成不良の珠洲擂鉢片2点である。

## 174号溝（S D174, 第161・162図、図版87）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区中央西側に位置する。S D181・S D245・S D330と並行して走り、S D173と直交する短い溝である。東側の建物群の区画溝と考えられる。最大幅32cmで、深さ8cmである。埋土は暗オリーブ色砂質ロームである。出土遺物はない。

## 175号溝（S D175, 第161・162図、図版87）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区中央西側に位置する。S D173と並行して走り、S D181・S D330と直交する。東側の建物群の区画溝と考えられる。最大幅75cmで、深さ9cmである。埋

土は上層が灰オリーブ色シルト、下層がオリーブ黒色ロームを基調とする。出土遺物はない。

#### 181号溝（S D181, 第161・162図, 図版87）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区ほぼ中央に位置する。S D174・S D245・S D330と平行して走り、S D173・S D175と直交する。東側の建物群の区画溝と考えられる。最大幅60cmで、深さ10cmである。埋土は上層がオリーブ黒色砂質ローム、下層が灰色沙を基調とする。出土遺物はない。

#### 216号溝（S D216, 第164図）

調査区東隅の微高地で検出した。調査区外に遺構の本体があると考えられる自然流路の一部である。最大幅2.05mで、深さ16cmである。埋土は上層がオリーブ黒色シルト、下層が灰オリーブ色シルト質ロームを基調とする。

出土遺物は硯洲甕片1点（25）、杭1点（53）、漆器2点（28・29）で、漆器には様子とよばれる非常日常的な器も含まれる。漆器の年代から16世紀の遺構と推定する。

#### 236号溝（S D236, 第164図）

調査区北東の微高地で検出した。調査区外でS D216に繋がる自然流路と考えられる。最大幅1.45mで、深さ6cmである。埋土は灰オリーブ砂質ロームを基調とする。出土遺物はない。

#### 237号溝（S D237, 第155・157図）

調査区やや東の微高地で検出した。S D 6と東西方向に並行して走り、ともに道路の側溝であった可能性がある。S D138・S D245を結ぶ同一直線上にあり、東西方向を結ぶ道路の側溝の可能性がある。最大幅68cmで、深さ9cmである。埋土は西側では暗灰黄色シルトに2cm大の砾を2%含み、東側ではオリーブ黒色粘土質ロームとなっている。出土遺物はない。

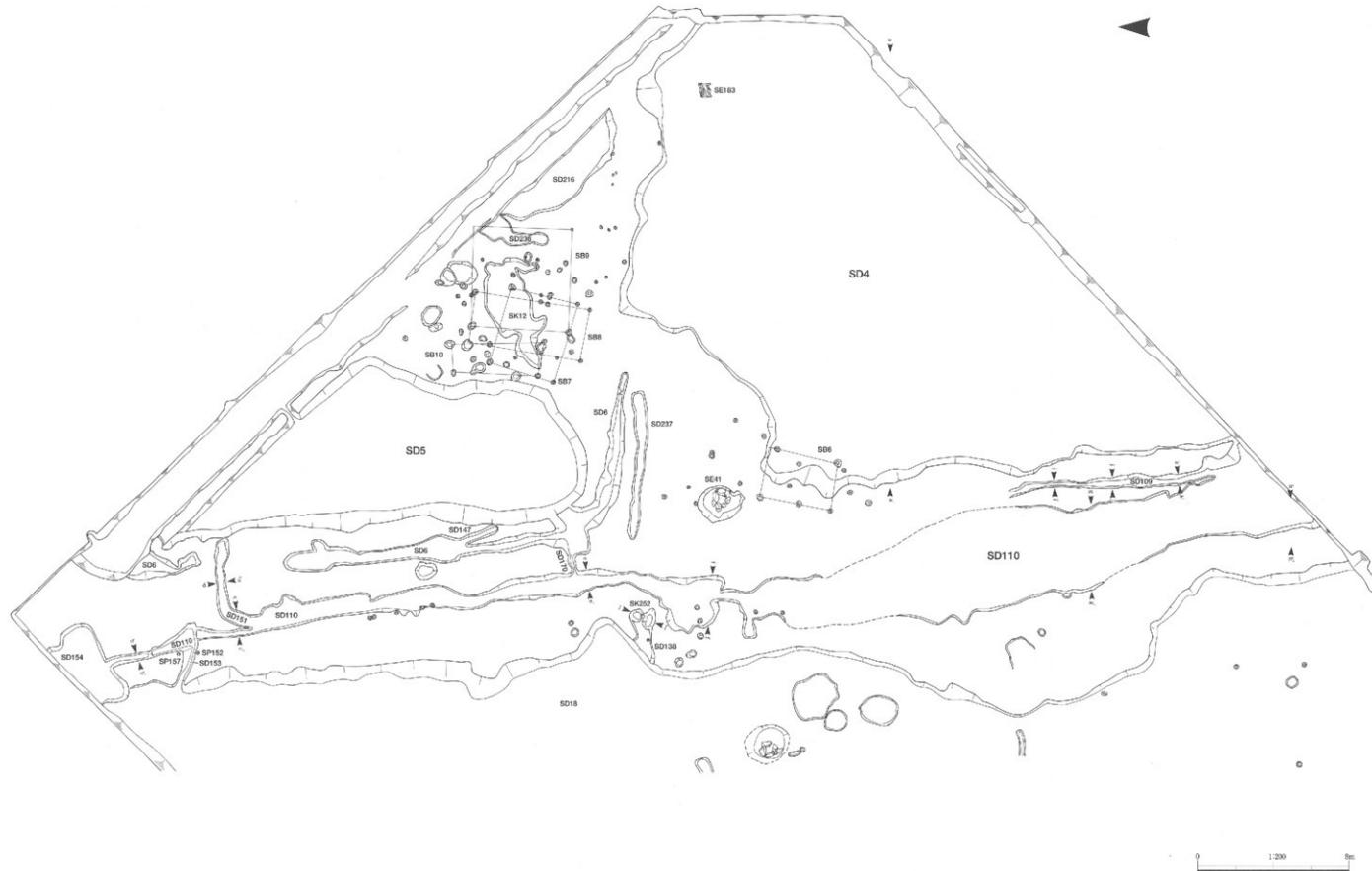
#### 245号溝（S D245, 第161・162図, 図版98）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区中央西側に位置する。南北方向のS D173と直交し、東西方向のS D33と並行して走る。建物域を区画する溝で、S D138・S D237を結ぶ同一直線上にあり、東西方向を結ぶ道路の可能性がある。最大幅50cmで、深さ10cmである。埋土は上層が灰色シルト、下層が灰色砂質ロームを基調とする。周辺の地山直上で中世土師器皿がまとまって出土しているが、その一部がS D245の肩に落ちかけた状況で出土していることから、土師器皿を使用する祭祀行為はS D245が機能していた時期に行われたと考えられる。

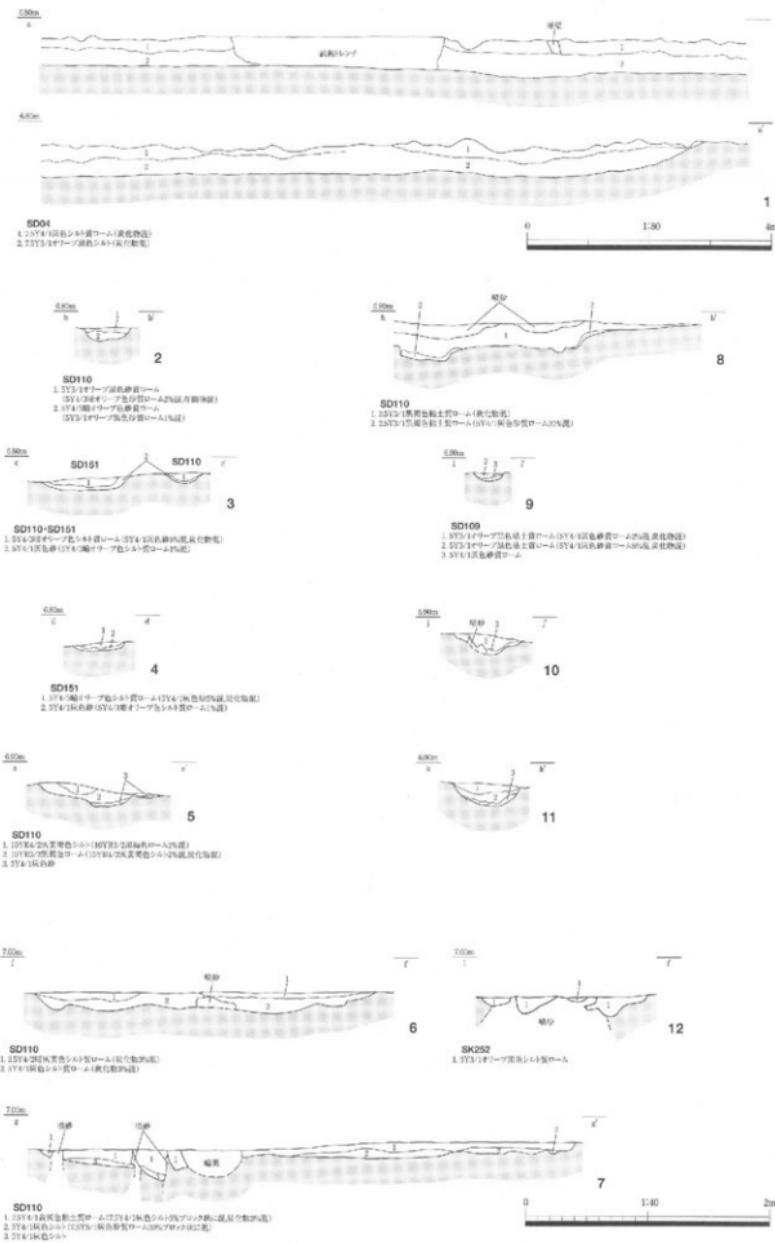
この土器集中地点の中世土師器とともに祭祀に使用されたと考えられる中国製青磁がSK47上面で出土しており、その年代からS D245は14世紀前半～15世紀前半の遺構と推定される。出土遺物はない。

#### 330号溝（S D330, 第161図, 図版87）

谷状地（S D18）埋土下で検出した。調査区ほぼ中央に位置する。S D181と並行して走り、S D173・S D175と直交する。東側の建物群の区画溝と考えられる。最大幅46cmで、深さ8cmである。出土遺物はない。

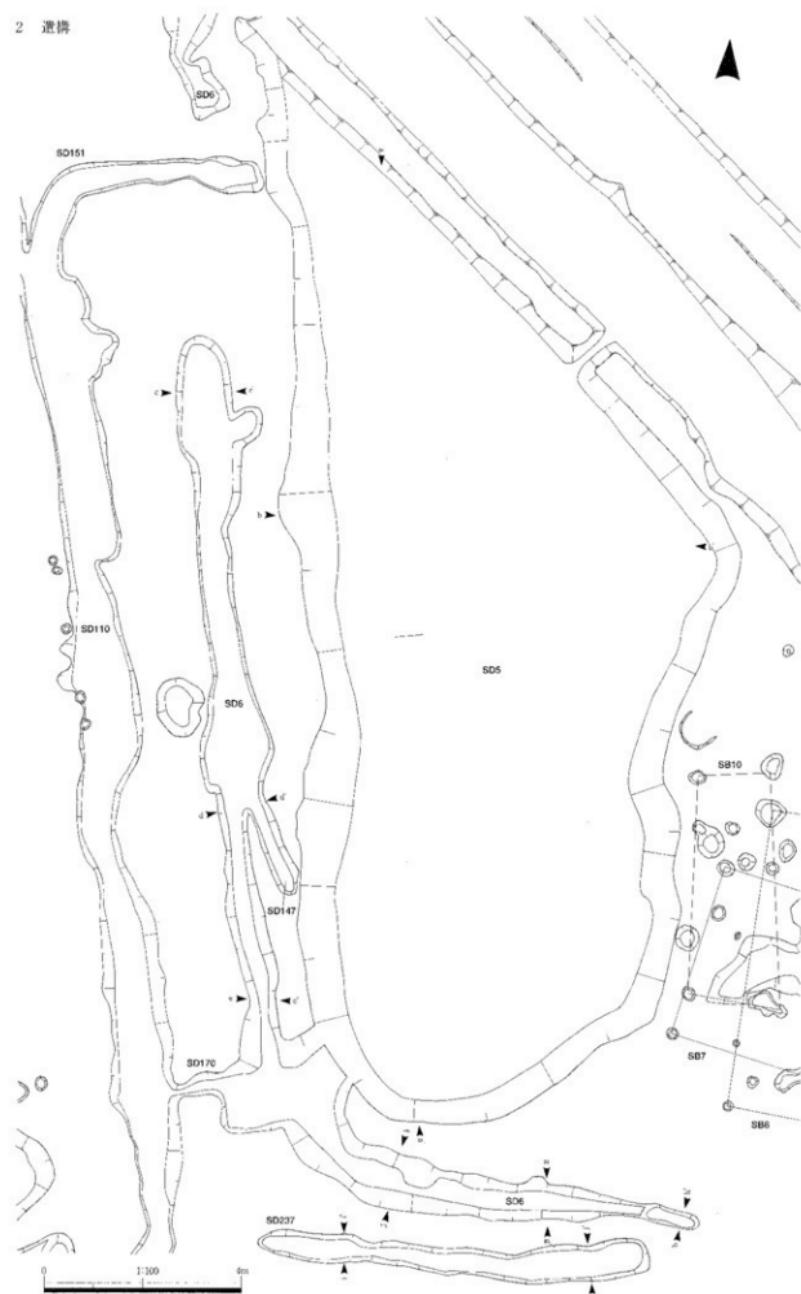


第153図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SD4・SD109・SD110・SD138・SD151・SK252

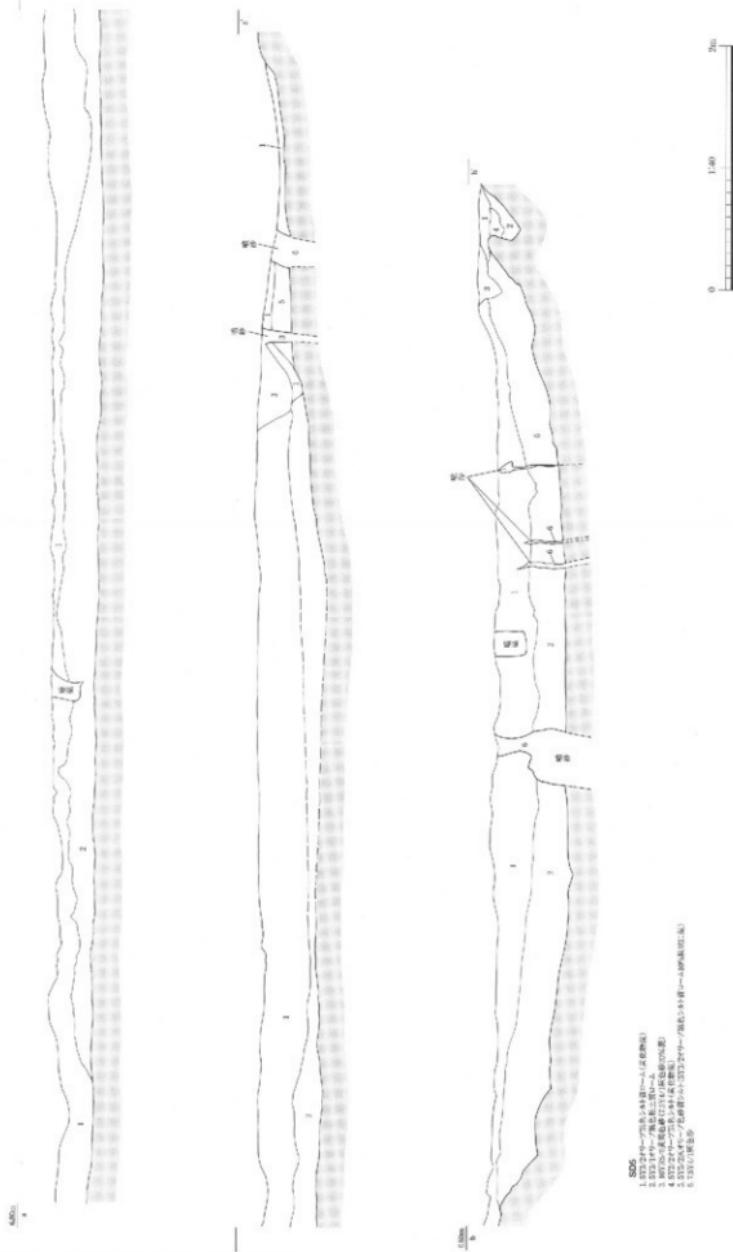


第154図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

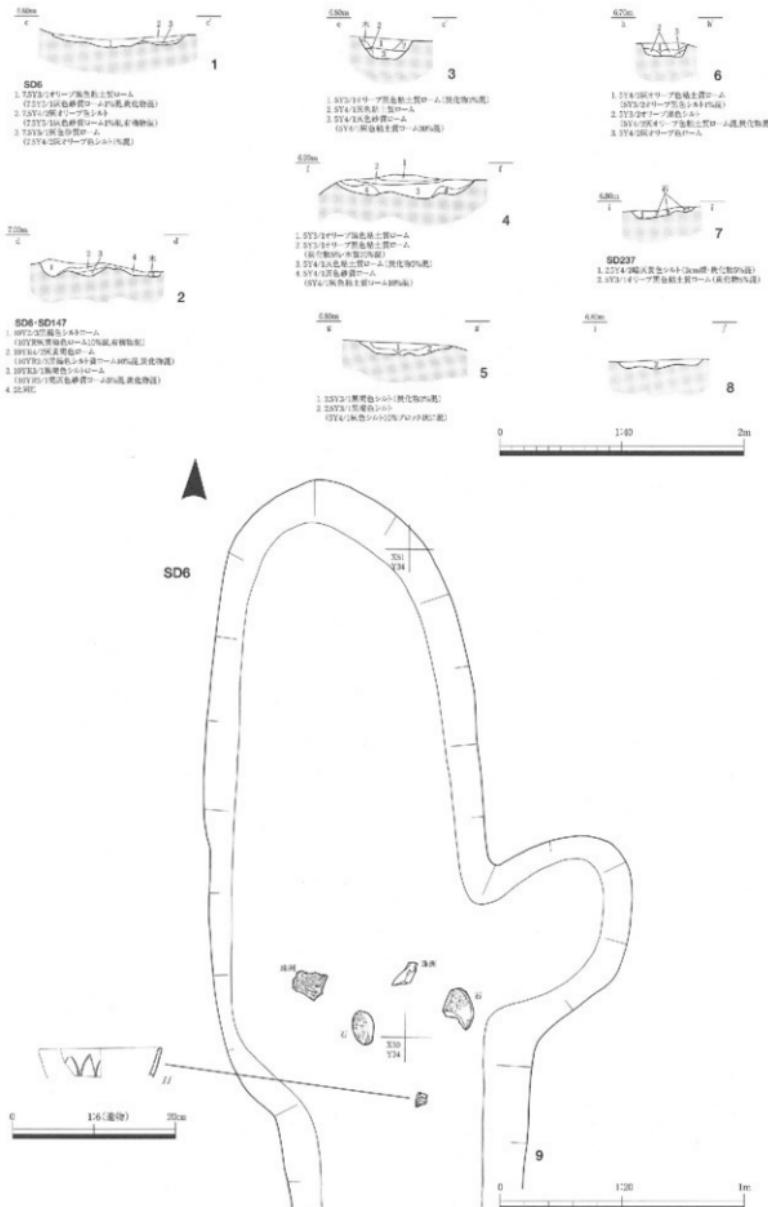
1- SD4 2- SD119 3- SD119 : SD151 4- SD151 5~8- SD119 9~11- SD109 12- SK252



第155図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SD5・SD6・SD147・SD170・SD237

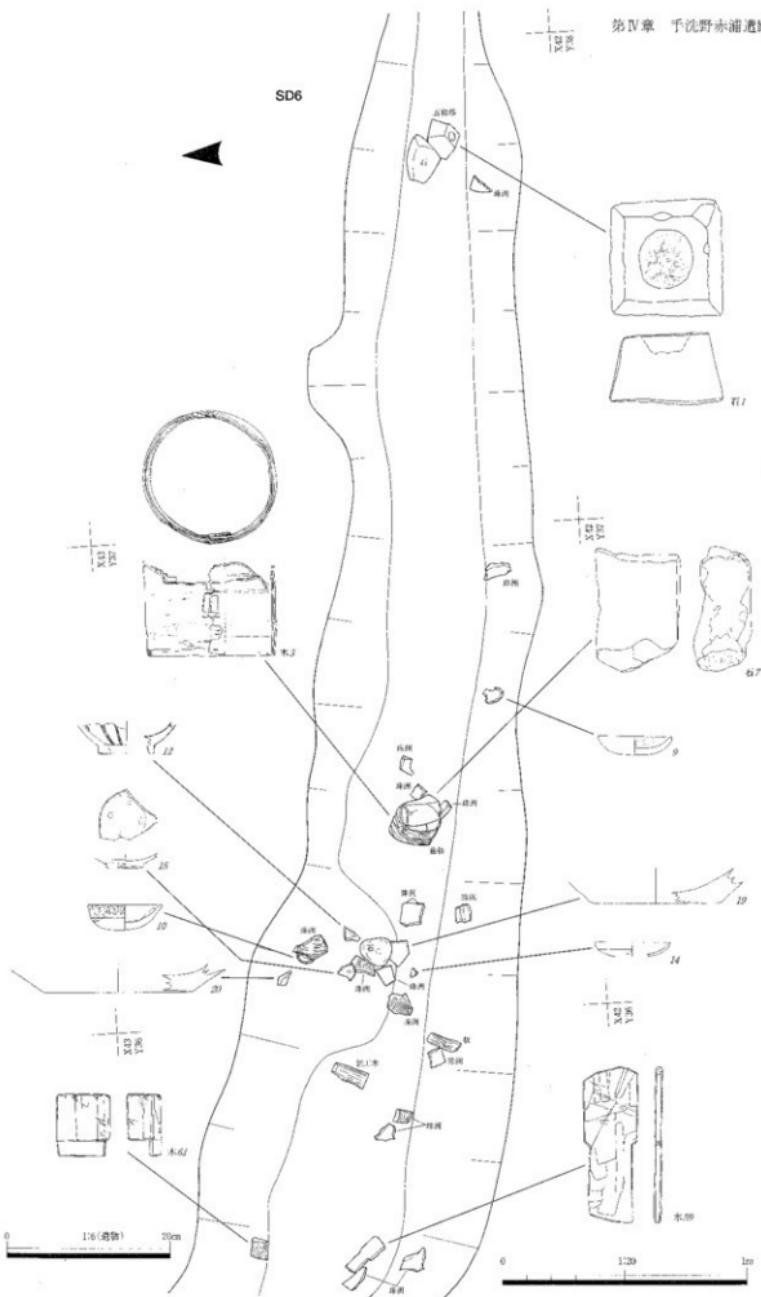


第156図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SD5

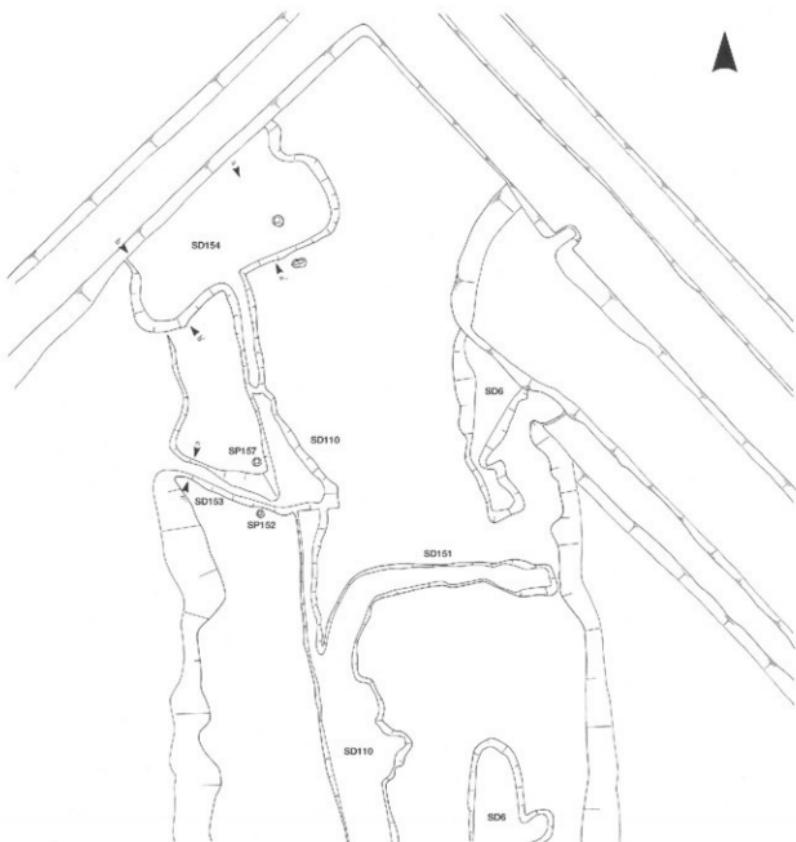


第157図 手洗野赤浦跡 遺構実測図

1・3~6. SD6 2. SD6・SD147 7・8. SD237 9. SD6

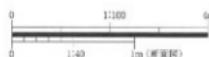


第158図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SD6



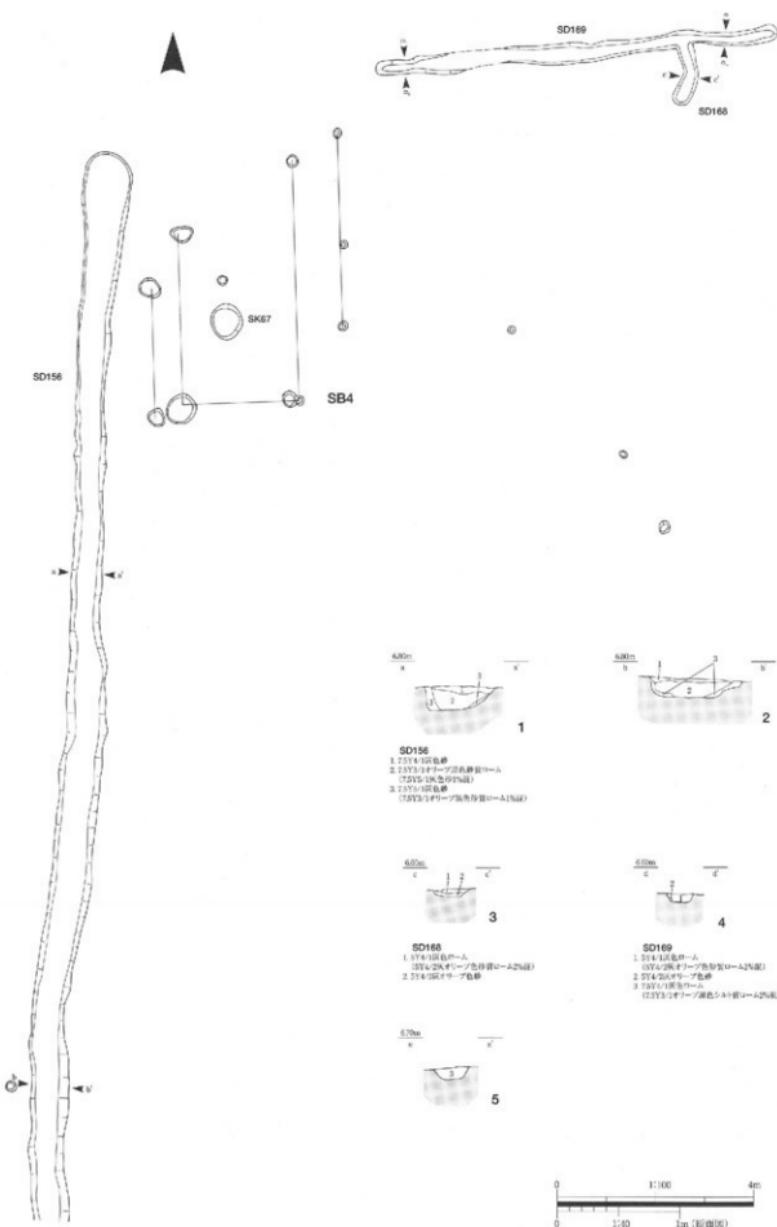
SD153  
1.TSY4/赤堀排水渠  
(2.33/10/7/28西高シヨウ横渠)

**SD154**  
1.TSY4/赤堀排水渠(2.33/10/7/28西高シヨウ横渠)  
2.574/大丸井排水渠(373.1メートル×2.8メートル×1.7メートル)  
3.573/大丸井排水渠-A  
4.TSY4/赤堀排水渠(2.33/10/7/28西高シヨウ横渠)



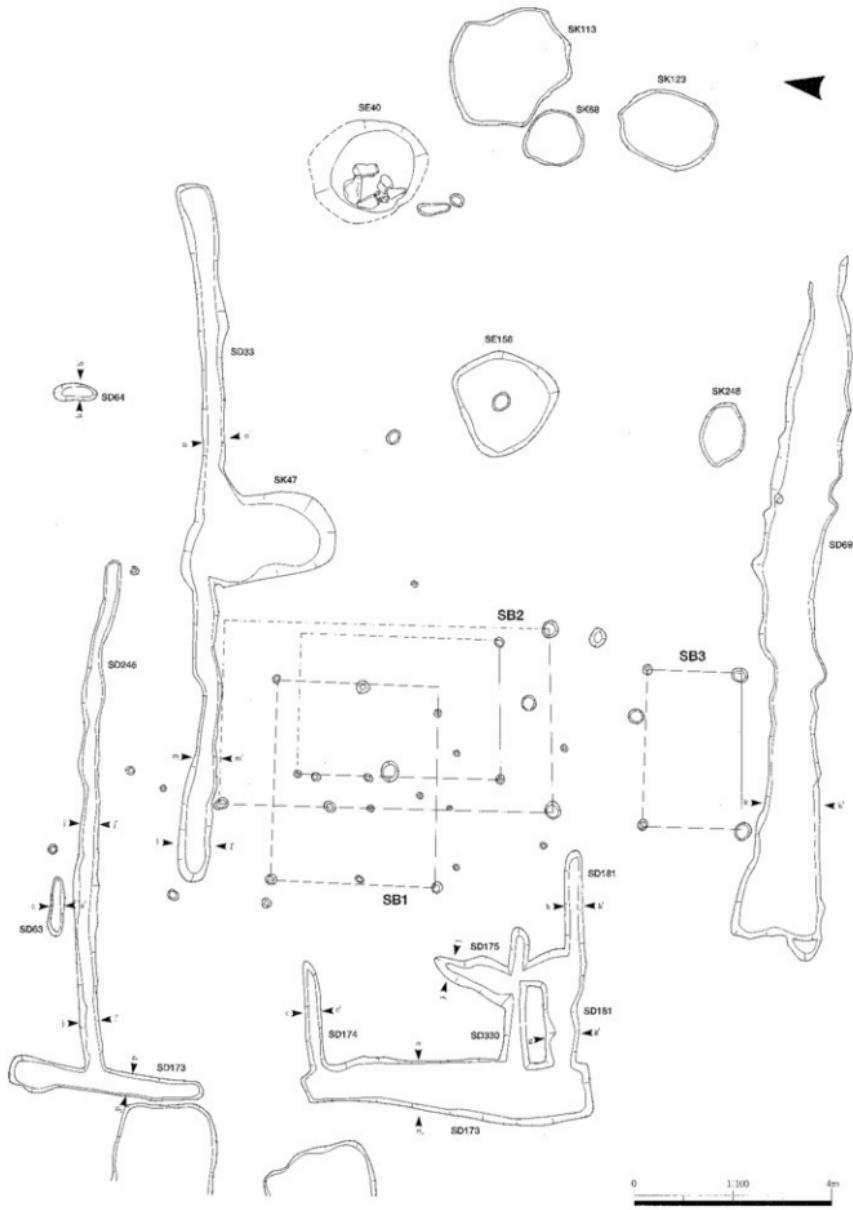
第159図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1・2. SD154 3. SD153



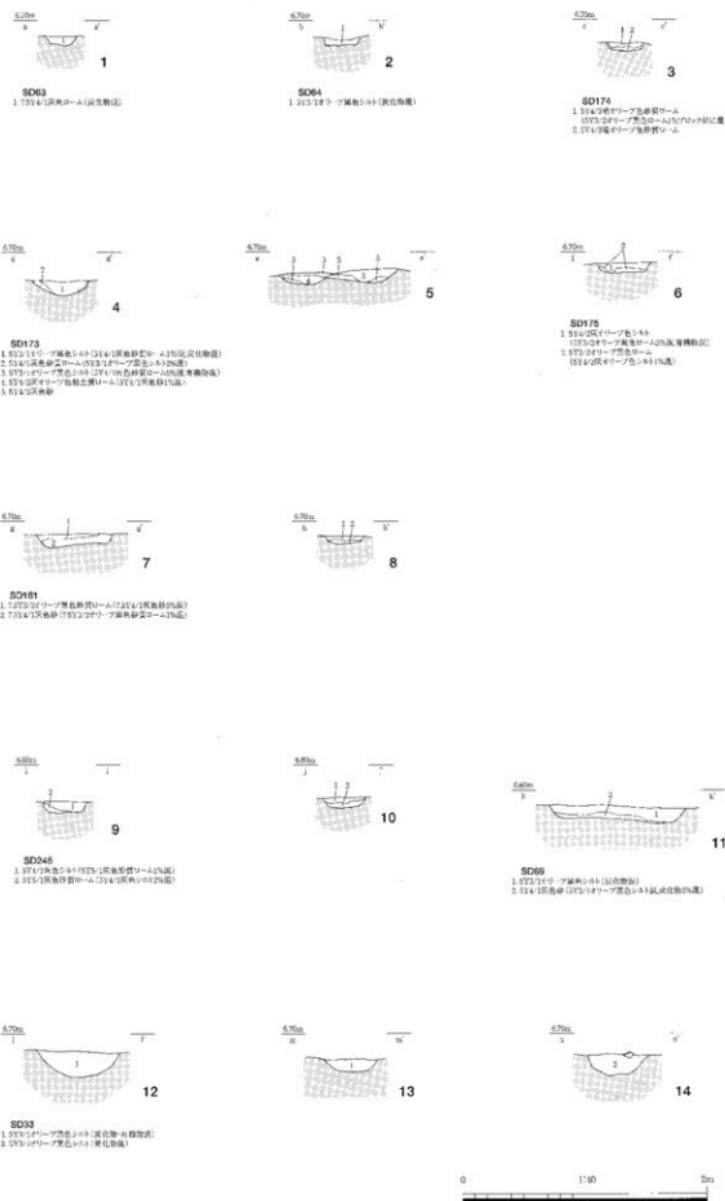
第160図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1・2. SD156 3. SD168 4・5. SD169



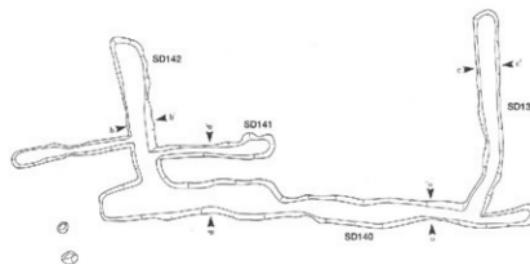
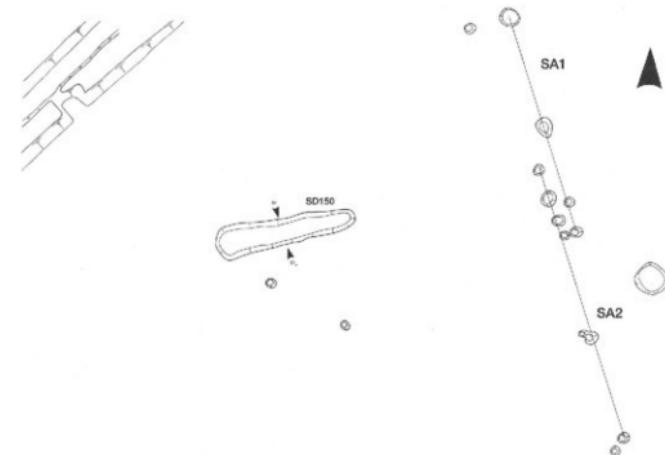
第161図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

SD33・SD63・SD64・SD69・SD173～SD175・SD181・SD245・SD330



第162図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SD63 2. SD64 3. SD174 4・5. SD173 6. SD175 7・8. SD181 9・10. SD245 11. SD69  
12～14. SD33



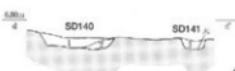
**SD150**  
1. 2.2Y4/4(黒河内色)土質ローム  
(2.3Y4/4(黒河内色)土質ローム-10%泥、有粘性度)  
2. 2.2Y5/4(黒河内色)ローム  
(2.3Y3/2(黒河内色)土質ローム-12%泥)



**SD143**  
1. 2.2Y4/2(黒河内色)土質ローム  
(2.3Y3/2(黒河内色)土質ローム-12%泥)  
2. 2.2Y3/2(黒河内色)ローム  
(2.3Y4/2(黒河内色)土質ローム-14%泥)



**SD139**  
1. 2.2Y4/2(黒河内色)土質ローム  
(2.3Y4/2(黒河内色)土質ローム-12%泥)  
2. 2.2Y4/3(黒河内色)ローム



**SD140**  
1. 2.2Y4/4(黒河内色)土質ローム  
2. 2.2Y4/4(黒河内色)土質ローム  
**SD141**  
3. 2.2Y4/3(黒河内色)ローム  
(2.3Y3/2(黒河内色)土質ローム-12%泥)



第163図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SD150 2. SD142 3. SD139 4. SD140・SD141 5. SD140



第164図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SD216・SD236

## (5) 井戸

28号井戸 (S E28, 第165図, 図版91・92)

谷状地 (S D18) 埋土上面で検出した。調査区南側に位置し, S B12の北に隣接する。

井戸側は石組と曲物からなる。長径は3.62m, 短径は2.16mの楕円形で, 深さは97cmである。北側を大きな噴砂に切られる。掘形は, まず上から約30cmは全体を下げ, 中央を直径約1.8mの円形にさらに掘り下げる。下部の掘形も大きく楕形を呈し, 底面が広い。曲物をやや西よりに据え, 周囲を石で囲んで補強し, 上面まで石を積み上げる。石は大小様々な自然礫を用い, 積み方に規則性はない。礫はS E40・41と同様に大型のものは軟質の凝灰質泥岩で, 小さい躙には凝灰岩等の硬質のものも含まれる。埋土はオリーブ黒色シルト, 黒色ローム, 灰色粘土質ロームを基調とする層が水平堆積している。

出土遺物は土師器小片2点, 漆器(21)・曲物(12)・円形板(17)・匙(33)・加工板である。谷状地上面で検出されたが, 井戸構築方法がS E40と似ていることから時期差はあまりないと考えられ, 造構の時期は15世紀後半~16世紀初頭と推定する。

40号井戸 (S E40, 第166図, 図版93)

谷状地 (S D18) 埋土下で検出した。調査区ほぼ中央に位置し, 建物よりやや離れた場所にある。直径2.46mの円形で, 深さは66cmであるが, 噴砂により激しく切られており一部原形をとどめていない箇所もある。

井戸側は石組で, 大小の自然礫を組んでいる。元の位置をとどめる石組は下層の一段だけで, 石組の一部であった可能性がある大小の自然礫が上・下層から出土した。出土した石は凝灰岩, 片麻岩, 凝灰質泥岩(大桑層泥質部)・砂岩等で石組の主体となる大型の礫は軟質の凝灰質泥岩である。井戸枠と認められるものはなかったが, 曲物の細片が出上していることから, 抜き取られた可能性もある。掘形は大きく底面も広く, 中央からやや西よりに井戸枠が構築される。黒褐色粘土質ロームと灰色シルト質ロームは裏込めの土とみられるが, 上層にレンズ状に堆積する灰オリーブ色砂質ローム, 黒褐色シルト, 黒褐色シルト質ロームは井戸崩壊後埋積した層と推測される。

出土遺物は中世土師器・珠洲(28~30)・占瀬戸(26・27)・漆器(25・27)・曲物・加工板(63)・加工材・柱(51)・円形板(18)である。土器・陶磁器は15世紀のものが多く, 降っても15世紀中頃におさまるが, 漆器の年代から造構の時期が16世紀に降る可能性もある。

41号井戸 (S E41, 第167図, 図版93・94)

調査区中央やや東よりの微高地で検出した。

井戸側は上部の石組, 下部の曲物3段からなる。石組はS E40と同様に大小の自然礫を使用し, 大型のものは軟質の凝灰質泥岩である。噴砂によって埋土が切り裂かれ, 内部の曲物も液状化現象により斜めになっていた。長径は2.46m, 短径は1.9mの不整形で, 深さは75cmである。掘形はロート状で上部が楕形で大きく開口するが, 下部はほとんど掘形がない。埋土は灰オリーブ色砂質ローム, 黒褐色シルト, 黑褐色シルト質ローム, 灰色シルト質ロームである。

出土遺物は珠洲窯片1点, 井戸枠として使用された曲物5点(4~8), 砥石1点(6)で, 他に焼けた自然礫(花崗岩)が出土した。井戸枠として使用された曲物の年輪年代の測定値は1296年で, 13世紀末~14世紀初頭に伐採された材を使用したものと推定される<sup>23</sup>。この曲物が転用後に井戸枠として使用されたとしても, 井戸の年代は14世紀代におさまるものと考えられる。造構の配置からみると, S E41はS B6に隣接し, S D110を側溝とする道路際に位置する。しかしS B6の時期は15世

<sup>23</sup>38 第 分野 白川和少分野 先谷研究「X. 手洗野赤坂遺跡・井戸周囲基礎出土木製品の年輪年代」

紀中頃～後半と推定されるため、S E 41はS B 6より古い時期のものといえ、建物に付属しない路傍の共同井戸と考えられる。

#### 158号井戸（S E 158、第168図、図版95）

谷状地（S D 18）埋土下で検出した。調査区ほぼ中央に位置し、西側の建物群との関連が考えられる。建物域を区画するS D 33・S D 69間にほぼ中央に位置する。

井戸側は曲物3段からなるが、一番上の曲物は抜き取られ、埋土に痕跡のみ残る。長径は2.01m、短径は1.99mの不整形で、深さは70cmである。掘形断面はロート状を呈し、上部は大きく皿形に開口して下部の掘形はほとんどない。

土層断面から、まず山物を積み、下層掘形に裏込めの土を入れた後に上層掘形を埋めて構築したと考えられる。井戸枠の直径に対して上層の掘形の径が大きいが、掘形から呪符木簡以外の遺物は出土していないので廃棄土坑等の別造構の可能性は低く、井戸構築のために掘られた掘形と考える。掘形の埋土は、下部の曲物周辺は灰色粘土質ローム、上部はオリーブ黒色シルト質ローム、灰色砂からなる。曲物内の埋土は上層の灰色シルト、下層の灰色粘土質ロームに分かれる。

出土遺物は珠洲窯（20）、井戸枠として使用された曲物（9・10）、漆器（19）、呪符木簡（57）であり、他に焼けた自然磚（凝灰岩）が出土した。呪符木簡以外の遺物は井戸枠内の上部からまとまって出土しており、井戸の廃棄時に埋められたものと考えられる。呪符木簡は、井戸掘形の北側隅の底面に一部深くなる部分があり、その中から尖った方を下にして斜めに倒れた状態で出土した。掘形埋土の上面では土の違いは確認されておらず、呪符木簡が埋められた後に掘形が埋められたものと考えられる。井戸構築時の祭祀に関わる可能性が高い。造構配置からS D 33・S D 69に区画された建物の井戸と考えられ、14世紀の井戸と推定する。

#### 183号井戸（S E 183、第169図、図版93・95）

調査区東端に位置し、S D 4の埋土下で検出した。付近に建物等の遺構はないが、調査区の端であるため、調査区外に同時期の遺構が存在する可能性もある。

井戸側構造は特殊で、上部は多量の草本植物の茎を立てて長方形の井壁に貼り付けるようにめぐらし、その上面に長方形に板を乗せる。板には特別な木組構造はない。また井戸内から割れた折敷底板が3枚出土しているが、井壁の補強のために転用されたものであろうか。3枚の内、辺材部が残る1枚の年輪年代の測定値は1306年である<sup>329</sup>、14世紀初頭に伐採された材を使用したものと考えられる。このことからS E 183の年代も14世紀前半と推定する。下部は梢円形の大型の曲物を据える。掘形は、著しい湧水のため地山の砂が崩れて確認が困難であったが、ほとんどないものと思われた。上部と約10cmのズレがあるが、地盤による液状化の影響と考えられる。平面形は長辺68cm、短辺56cmの長方形で、深さは67cmである。埋土は上層のオリーブ黒色粘土質ロームと下層の灰色粘土質ロームからなる。

出土遺物は井戸枠として使用された曲物（11）、折敷（30-32・66）・加工板（64）・加工棒（65）・部材（67）で、加工板・加工棒の出土が多い。

埋土の内、上層のオリーブ黒色粘土質ローム層を分析した結果、陸域指標種群の珪藻が検出され<sup>330</sup>、花粉化石が非常に少ないとから、井戸使用時ではなく、後の堆積層と推測された。また、落葉のクワ属、アメガシワ等の樹木種実、ホタルイ属等の草本果実、カタバミ属等の草本種実が検出され、湿地的環境と乾き気味の環境が周辺に存在したと推定された<sup>331</sup>。上層から出土した部材の放射性炭素年代から、井戸は14世紀末～15世紀前半に埋没したと推定され<sup>332</sup>、その頃の環境を示すものと考えられる。

329 第二分層 自然科學分析 青井研究室「X」、手洗野赤浦遺跡・井戸戸門島埋蔵古木断代」

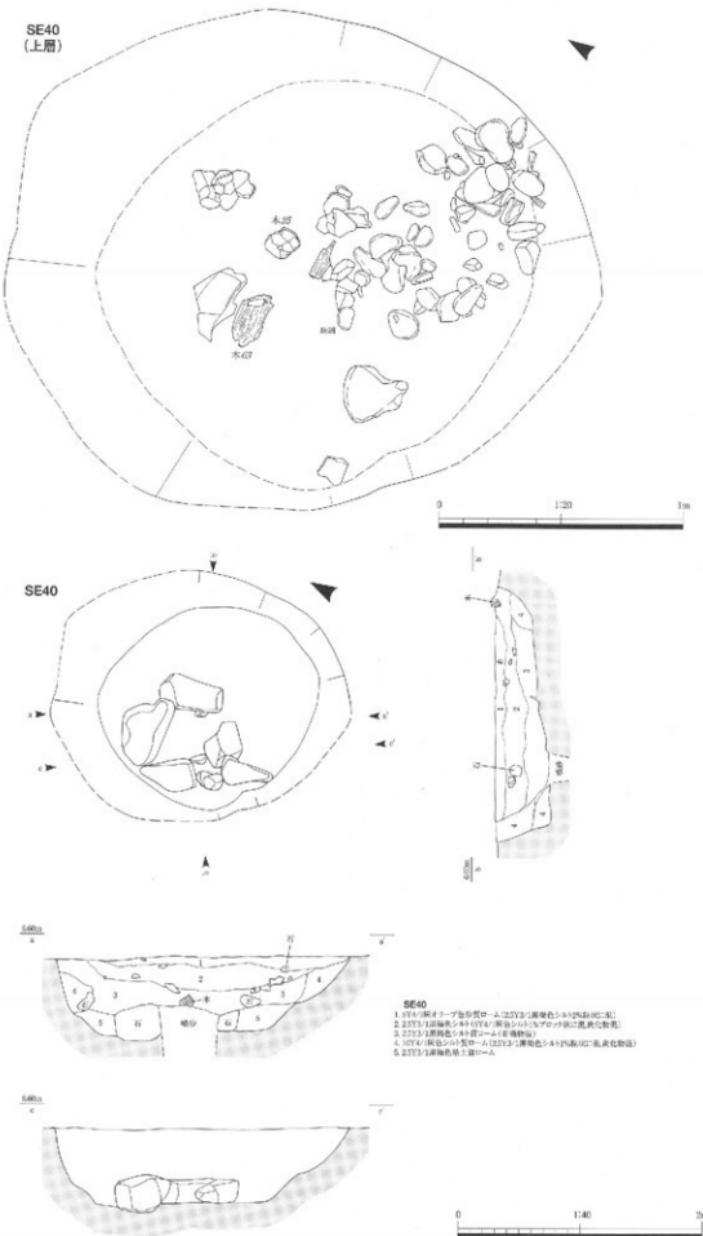
330 第二分層 自然科學分析 和式花粉分析 パリオ・ラボ「黒河・白川、川原分層 2、井戸戸門島埋蔵古木の珪藻和花粉」

331 第二分層 自然科學分析 和式花粉分析 パリオ・ラボ「黒河・白川、川原分層 3、井戸戸門島埋蔵古木の花粉」

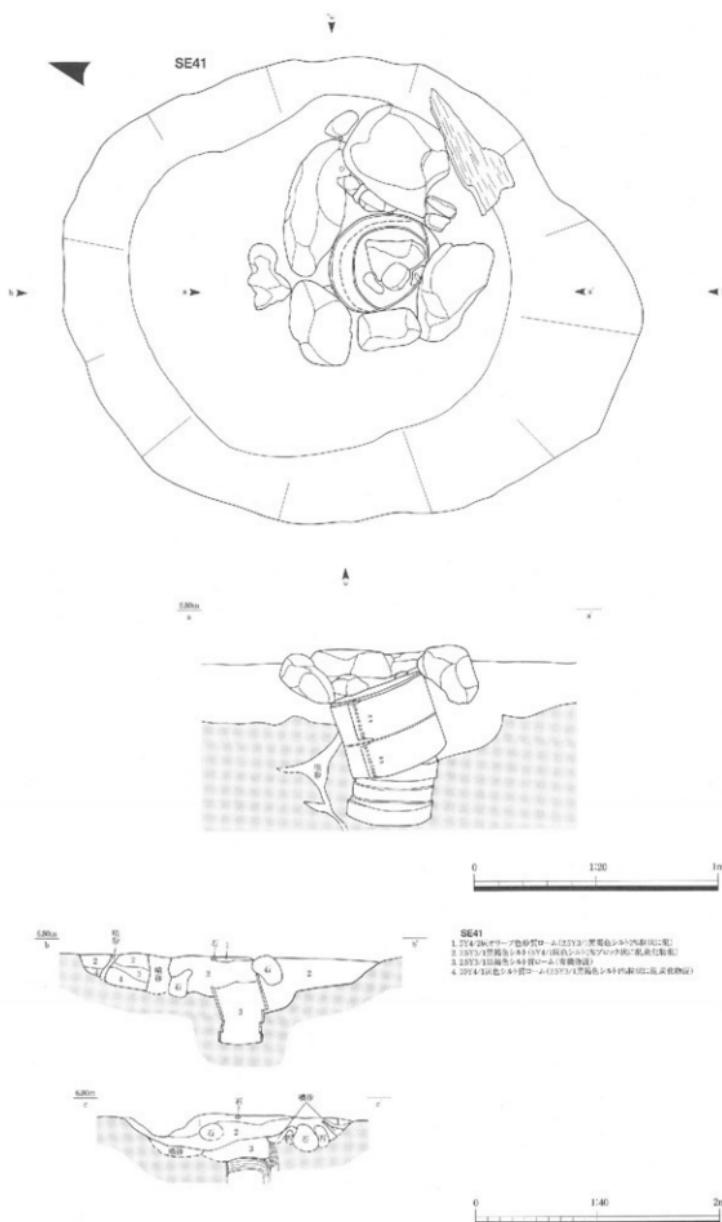
332 第二分層 佐藤長生分析 和式花粉分析分野研究会「II、放射性炭素年代測定 1、手洗野赤浦遺跡・井戸戸門島埋蔵古木の放射性炭素年代測定」



第165図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SE28

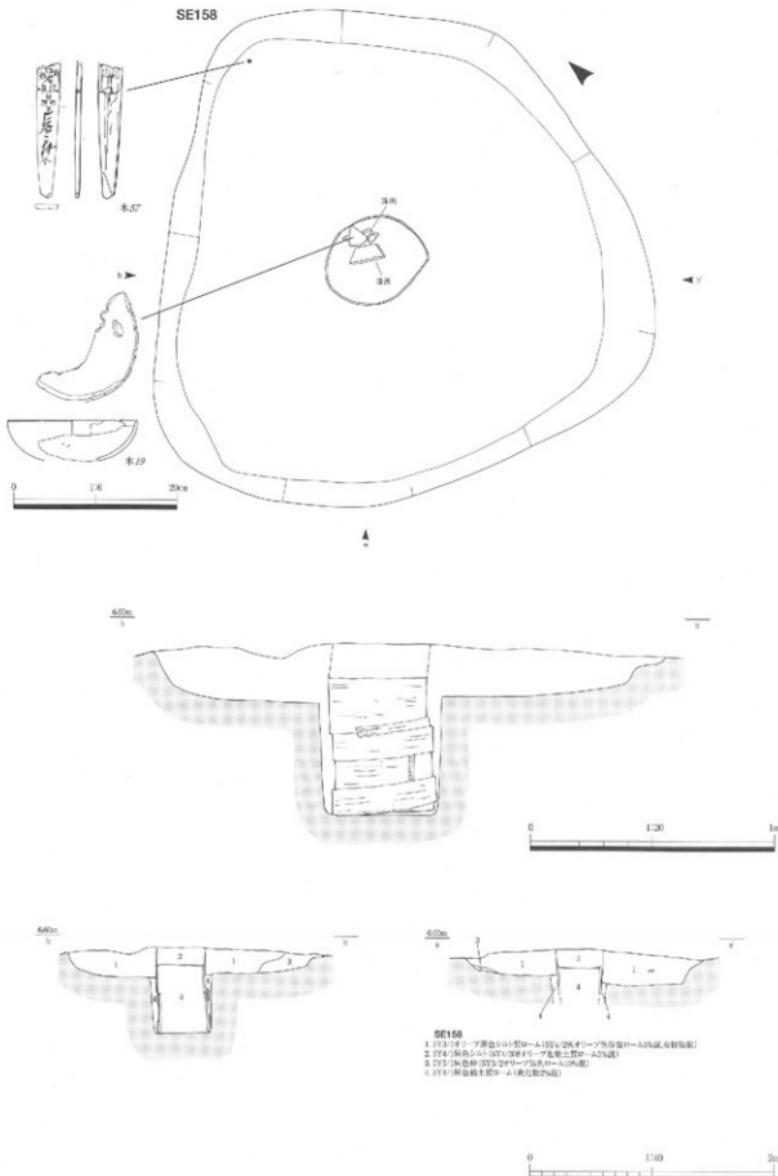


第166図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SE40

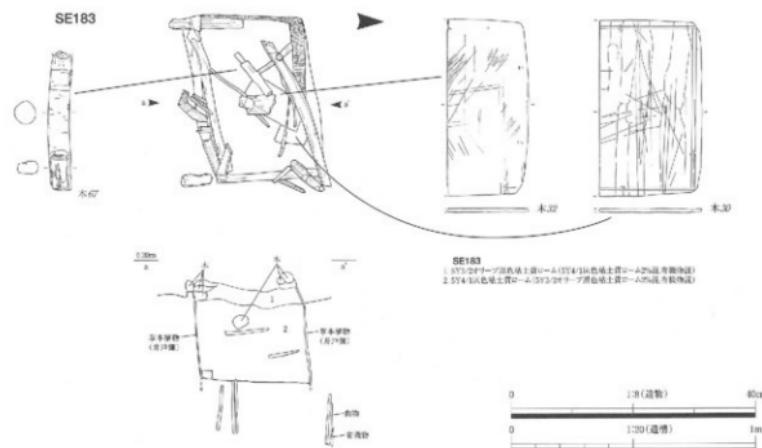


第167図 手洗野赤浦遺跡 造構実測図

SE41



第168図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SE158



第169図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SE183

### (6) 土坑

2号土坑 (SK 2, 第170図, 図版99)

谷状地 (SD 18) 埋土上面で検出した。調査区中央部北側に位置する。西側を噴砂に切られる。平面形は梢円形を呈し、規模は63cm×44cm、深さ11cmである。浅い皿状に窪み、炭化物がその中に敷かれたように薄く堆積する。埋土は下層が灰色シルト質ロームで、炭化物層を挟んで上層は灰色ローム、オリーブ黒色シルト質ロームである。出土遺物はない。

7号土坑 (SK 7, 第170図)

谷状地 (SD 18) 埋土上面で検出した。調査区中央部に位置する。SK 8~11と近接し、関連が考えられるが性格は不明である。平面形は不整形を呈し、規模は1.14m×85cm、深さは31cmである。埋土は黒褐色ローム、灰色シルト質ローム、オリーブ黒色シルトの水平堆積である。出土遺物は珠洲小片2点である。

8号土坑 (SK 8, 第170図)

谷状地 (SD 18) 埋土上面で検出した。調査区中央部に位置する。SK 7・9~11と近接し、関連が考えられるが性格は不明である。平面形は円形を呈し、直径50cm、深さは50cmである。掘形は上部を広く掘り、その一部を深く掘り下げる二段掘りになっているので柱穴の可能性もあるが、付近に並ぶ柱穴はない。埋土は上層がオリーブ黒色粘土質ローム、下層が黒色砂質ローム、灰色シルトを基調とする。出土遺物はない。

9号土坑 (SK 9, 第170図)

谷状地 (SD 18) 埋土上面で検出した。調査区中央部に位置する。SK 7・8・10~11と近接し、関連が考えられるが性格は不明である。平面形は梢円形を呈し、規模は41cm×35cm、深さは14cmである。埋土はオリーブ黒色粘土質ローム、灰色シルトを基調とする。出土遺物はない。

10号土坑 (SK 10, 第170図)

谷状地 (SD 18) 埋土上面で検出した。調査区中央部に位置する。SK 7~9・11と近接し、関連

が考えられるが性格は不明である。西側を暗渠に切られ全体の形は不明である。規模は幅55cm、深さは18cmである。埋土はオリーブ黒色ローム、オリーブ黒色粘土質ローム、灰オリーブ色砂質ロームを基調とする。出土遺物は土師質土器壺鉢の破片1点である。

#### 11号土坑（SK11, 第170図）

谷状地（SD18）埋土上面で検出した。調査区中央部に位置する。SK7～10と近接し、関連が考えられるが性格は不明である。平面形は楕円形を呈し、規模は69cm×55cm、深さは28cmである。断面は台形状を呈する。埋土はオリーブ黒色ローム、オリーブ黒色粘土質ロームを基調とする。出土遺物は珠洲の小片である。

#### 12号土坑（SK12, 第171図、図版96）

調査区北東の微高地で検出した。SB7～10の建物群と切り合いがある。平面形は不整形を呈する。規模は5.86m×2.6m、深さ34cmの大型土坑である。埋土は灰オリーブ色粘土質ローム、黒褐色砂質ローム、褐灰色砂等である。検出面は砂質であるため、建物を建てる前に凹地を整地したものであろうか。出土遺物は繩文土器・土師器・珠洲・古瀬戸（26）・骨角製簪（1）で、土器・陶磁器はすべて割れた破片であり1点ずつ出土している。古瀬戸はSE40との接合資料である。遺物の時期から14世紀の遺構と推定される。切り合い関係から、SB7のSP204・SB8のSP238・SB10のSP239より古く、SK308より新しい。

#### 26号土坑（SK26, 第171図）

谷状地（SD18）埋土上面で検出した。調査区中央南側に位置し、SB11とSB12の間にある。SK27に隣接する。平面形は楕円形を呈し、規模は1.5m×97cm、深さは56cmである。掘形は上層を広く掘り、その一部を深く掘り下げる二段掘りである。埋土は暗灰黄色シルト質ローム、オリーブ黒色シルト質ロームを基調とする水平堆積である。埋土を分析した結果、イネ未炭化穎、アサ、スペリヒユ等の種実、ソバ等の花粉が検出され、周辺に水田、畠地があった可能性が示唆された<sup>43</sup>。

出土遺物は土師器小片2点、加工板1点で、板は底面から出土した。

#### 27号土坑（SK27, 第171図）

谷状地（SD18）埋土上面で検出した。調査区中央南側に位置し、SB11とSB12の間にある。SK26に隣接する。平面形は不整形を呈し、規模は1.64m×75cm、深さは16cmである。浅い皿状の窪みで、中央部分が噴砂に切られる。埋土は暗灰黄色シルト質ローム、オリーブ黒色シルト質ローム等を基調とする。出土遺物は中世土師器（31）である。

#### 47号土坑（SK47, 第172図、図版95）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区ほぼ中央に位置し、SB1～3の北に位置するSD33と交差する。平面形は楕円形を呈し、規模は3.16m×1.75m、深さ30cm、大型で深い土坑である。埋土はオリーブ黒色シルト、黒褐色ローム、灰色砂を基調とし、間に有機物を挟んでいた。

出土遺物は中世土師器皿1点（32）、中国製青磁碗1点（33）、漆器椀1点（24）、曲物状の薄板1点である。漆器椀は完形に近く、土坑の中央底面に張り付いた状態で出土し、曲物状薄板片はやや中心から離れた底面近くで出土した。中世土師器は上器集中地点で出土した皿類と胎土等が共通する有台の後皿であり、南端の埋土上面から出土した。中国製青磁も同様に南端の埋土上面で出土した。

SK47に近い地山直上で中世土師器皿が3枚まとめて出土しており、上面で出土した中世土師器、中国製青磁は、SK47埋没後にこれらとともに祭祀的な意味合いをもって据え置かれたものと考えられる。中世土師器による祭祀はSD245に伴うものと推定されるので、SK47はSD245より古い時期

<sup>43</sup> 第二回著「農業科学分野」西大安枝・パレオ・ラボ 斎山篤志、植田也生、「V. 手洗野赤浦遺跡・岩井瀬戸島遺跡から出土した人頭骨化石」  
第一回著「植物考古学分野」株式会社パレオ・ラボ 斎山篤志、「手洗野赤浦遺跡・岩井瀬戸島遺跡の花粉化的野菜」

の遺構と考えられる。一方底面で出土した漆器等については、SK47に伴う祭祀行為の可能性が考えられる。切り合い関係では、SD33と交差するが噴砂のため新旧は明確でなかった。埋土上面の青磁が14世紀前半～15世紀前半、底面の漆器が14世紀代と推定されるので、遺構の年代は14世紀代と推定される。

#### 50号土坑（SK50、第173図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央北側に位置し、SB1～3を囲む溝の外側にある。平面形は楕円形を呈するが、噴砂に切られて若干変形している。規模は1.57m×1.08m、深さ10cmである。埋土はオリーブ黒色ローム、灰色砂が水平堆積する。出土遺物は土師器片1点である。

#### 67号土坑（SK67、第173図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央やや南側に位置し、SB4の内部にある。平面形は円形を呈し、規模は、73cm×63cm、深さ18cmである。埋土は黒褐色シルトの単層である。出土遺物はない。

#### 68号土坑（SK68、第173図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区ほぼ中央に位置し、SE40の南にあるSK113に隣接する。平面形は円形を呈するが、噴砂と湧水で変形している。規模は1.18m×1.13m、深さ29cmである。埋土は灰色砂の上に、オリーブ黒色シルト、黒褐色シルトがレンズ状に堆積する。出土遺物はない。

#### 72号土坑（SK72、第172図、図版96）

谷状地（SD18）埋土上面で検出した。調査区北西部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は2.85m×2.21m、深さは28cmである。中央に溝状の掘り込みがある。埋土は砂混じりの黒褐色粘土、灰色シルトで、水平堆積である。出土遺物は越前の擂鉢片1点である。

#### 99号土坑（SK99、第149図、図版89）

谷状地（SD18）埋土上面で検出した。調査区中央に位置し、SB12のSP20に切られる。平面形は楕円形を呈し、深さは19cmである。出土遺物はない。

#### 113号土坑（SK113、第173図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央に位置し、SE40の南に隣接する。平面形は噴砂や湧水で変形し、不整形を呈する。規模は2.49m×2.21m、深さ22cmである。埋土はオリーブ黒色シルト質ロームと灰色粘土質ロームの水平堆積である。出土遺物は13世紀末～14世紀中頃の株洲壹1点(34)である。

#### 118号土坑（SK118、第173図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区西側に位置し、SB1～3を囲む溝の外側にある。平面形は円形を呈し、規模は30cm×29cm、深さ16cmである。埋土はオリーブ黒色シルト質ロームを基調とする。出土遺物は土師器小片1点・加工板・種実（クリ）である。

#### 123号土坑（SK123、第173図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区ほぼ中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は2.05m×1.51m、深さ28cmである。埋土は壁際にオリーブ黒色シルト質ローム、その内側に灰色砂質ロームを基調とする土が埋積する。オリーブ黒色シルト質ロームは壁の崩壊を防ぐため貼り付けたものであろうか。出土遺物は加工板1点である。

#### 127号土坑（SK127、第174図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区西側に位置し、SB1～3を囲む溝群の東側にある。

平面形は楕円形を呈し、規模は68cm×62cm、深さ14cmである。埋土は灰色シルト混じりのオリーブ黒色シルト質ロームで、噴砂に切られる。出土遺物はない。

#### 128号土坑（SK128、第174図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区西側に位置し、SB1～3を囲む溝群の西側にある。平面形は円形を呈し、規模は直径62cm、深さ16cmである。埋土は灰色シルト混じりのオリーブ黒色シルト質ロームである。SK129との切り合いは噴砂のため不明である。出土遺物はない。

#### 129号土坑（SK129、第174図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区西側に位置し、SB1～3を囲む溝群の西側にある。平面形は円形を呈し、規模は直径34cm、深さ16cmである。埋土は灰色シルト混じりのオリーブ黒色シルト質ロームである。SK128との切り合いは噴砂のため不明である。出土遺物はない。

#### 130号土坑（SK130、第174図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央北側に位置し、SB1～3を囲む溝群の西側にある。平面形は楕円形を呈し、規模は1.5m×1.12m、深さ26cmである。埋土は灰色シルト混じりのオリーブ黒色シルト質ローム、灰色砂質ロームである。出土遺物はない。

#### 133号土坑（SK133、第174図、図版87）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央西側に位置し、SB1～3を囲む溝群の西側にある。平面形は隅丸方形を呈し、規模は2.42m×2.18m、深さ12cmである。埋土はオリーブ黒色砂質ロームを主体とし、中央を噴砂に切られる。

出土遺物は土師器皿の破片1点、珠洲撫鉢片1点である。土師器は回転糸切りの底部片で、土器集中地点の中世土師器と同じタイプである可能性が高い。珠洲はV期頃のものである。隣接するSK134と同様に西側の建物群に関連する遺構の可能性がある。

#### 134号土坑（SK134、第174図、図版87）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区中央西側に位置し、SB1～3を囲む溝群の西側にある。平面形は隅丸方形を呈し、規模は2.82m×2.04m、深さ24cmである。埋土は下層にオリーブ黒色ロームと灰オリーブ色砂がレンズ状に薄く堆積し、その上に灰色シルト質ロームが乗っている。

出土遺物は中世土師器（35）・種実（モモ）である。隣接するSK134と同様に西側の建物群に関連する遺構の可能性がある。遺構の年代は、モモ核の放射性炭素年代から14世紀末～15世紀前半と推定される<sup>144</sup>。

#### 155号土坑（SK155、第175図、図版96）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区南東部に位置し、SD156で区画された建物域の外側にある。平面形は円形を呈し、規模は直径51cm、深さ25cmである。

掘形の中心に曲物（13）が据えられており、底面には割れた側板の大型破片が敷かれていた。曲物は上部が欠損しており、もう少し器高があったものと考えられる。曲物内には大型の破片の他に、据えられた曲物の一部とみられる破片が裂けた状態で検出された。埋土は掘形が黄灰色粘土質ローム、曲物内がオリーブ褐色砂質ロームである。浅いため井戸の可能性は低く、集落域を離れていることと、底面の側板の出土状況から特殊な性格のものと考えられる。出土遺物は曲物の他にはない。

#### 182号土坑（SK182、第175図）

谷状地（SD18）埋土下で検出した。調査区南端に位置し、周囲に遺構はあまりみられない。平面形は楕円を呈し、規模は62cm×58cm、深さ32cmである。埋土はオリーブ黒色シルト、灰色ロームを基

<sup>144</sup> 第二分冊 自然科學分析 株式会社加藤謹子研究室「Ⅱ. 放射性炭素年代測定 1. 手洗野赤浦遺跡・也浮賀川海流岸辺上遺物の放射性炭素年代測定」

調とする。出土遺物はない。

#### 185号土坑（S K185, 第175図）

調査区北東部の微高地で検出した。SB 9内にある。平面形は円形を呈し、規模は43cm×38cm、深さ28cmである。埋土はオリーブ黒色ローム、オリーブ黒色シルトを基調とし、噴砂に切られる。中央部を深く掘り下げる柱穴状を呈するが、建物には並ばない。出土遺物は加工板1点・種実（オニグルミ）である。

#### 193号土坑（S K193, 第175図、図版96）

調査区北東部の微高地で検出した。SB 7～10の北に隣接する。平面形は楕円形を呈し、規模は1.19m×88cm、深さ8cmである。埋土はオリーブ黒色シルト、灰色シルト、灰オリーブ砂質ロームを基調とする。出土遺物はない。切り合い関係では、SK 194より新しい。

#### 194号土坑（S K194, 第175図、図版96）

調査区北東部の微高地で検出した。SB 7～10の北に隣接する。平面形は楕円形を呈し、規模は68cm×53cm、深さ12cmである。埋土はオリーブ黒色シルト、灰色シルト、灰オリーブ砂質ロームを基調とする。出土遺物はない。切り合い関係では、SK 193より古い。

#### 229号土坑（S K229, 第175図）

調査区北東部の微高地で検出した。SB 9の北側にある。平面形は楕円形を呈し、規模は46cm×33cm、深さ16cmである。埋土はオリーブ黒色粘土質ローム、灰色砂質ロームを基調とする。出土遺物はない。切り合い関係ではSK 230より新しい。

#### 230号土坑（S K230, 第175図）

調査区北東部の微高地で検出した。SB 9の北側にある。平面形は楕円形を呈し、規模は94cm×65cm、深さ22cmである。埋土は灰色シルト混じりのオリーブ黒色粘土質ロームである。出土遺物はない。切り合い関係ではSK 231より新しく、SK 229より古い。

#### 231号土坑（S K231, 第175図）

調査区北東部の微高地で検出した。SB 9の北側にある。平面形は楕円形を呈し、規模は1.49m×1.10m、深さ29cmである。埋土は灰オリーブ色粘土質ローム、灰色砂質ロームを基調とする。出土遺物はない。切り合い関係ではSK 230・SK 235より古い。

#### 235号土坑（S K235, 第175図、図版96）

調査区北東部の微高地で検出した。SB 9の北側にある。平面形は楕円形を呈し、規模は36cm×35cm、深さ40cmである。埋土はオリーブ黒色粘土質ローム、灰オリーブ色粘土質ロームを基調とする。

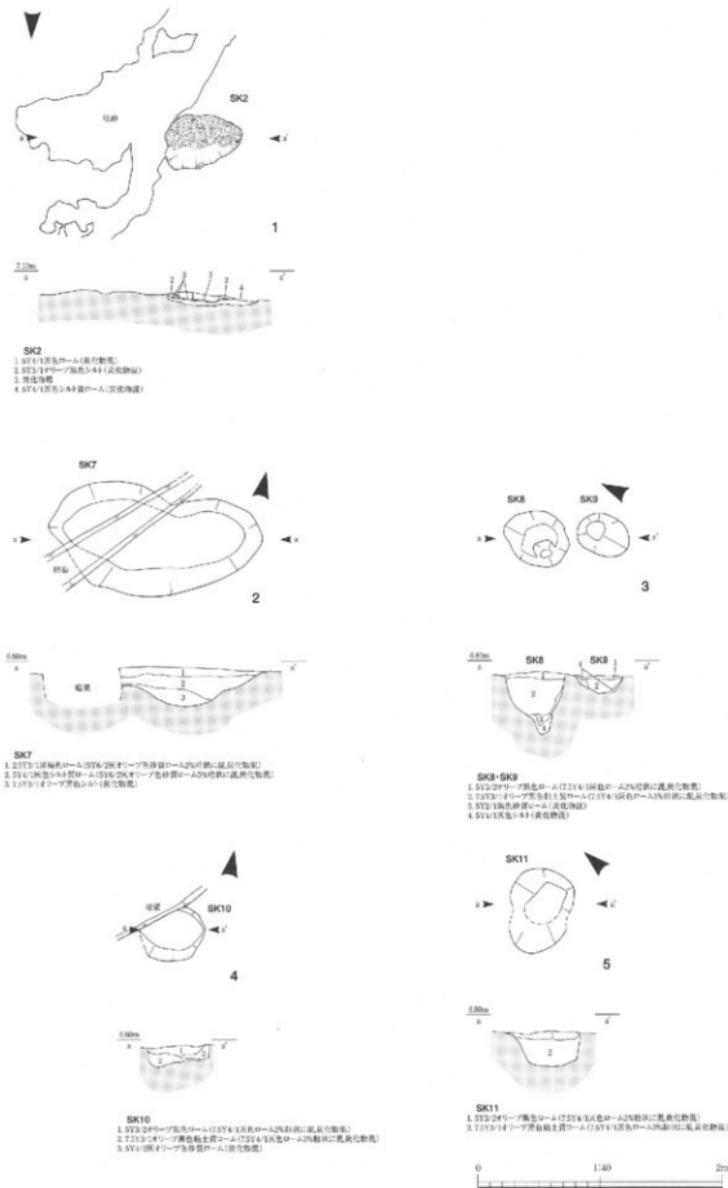
出土遺物は鐵1点（I）、柱1点（56）、加工板1点で、折り重なるようにして出土した。切り合い関係ではSK 231より新しい。

#### 248号土坑（S K248, 第175図、図版96）

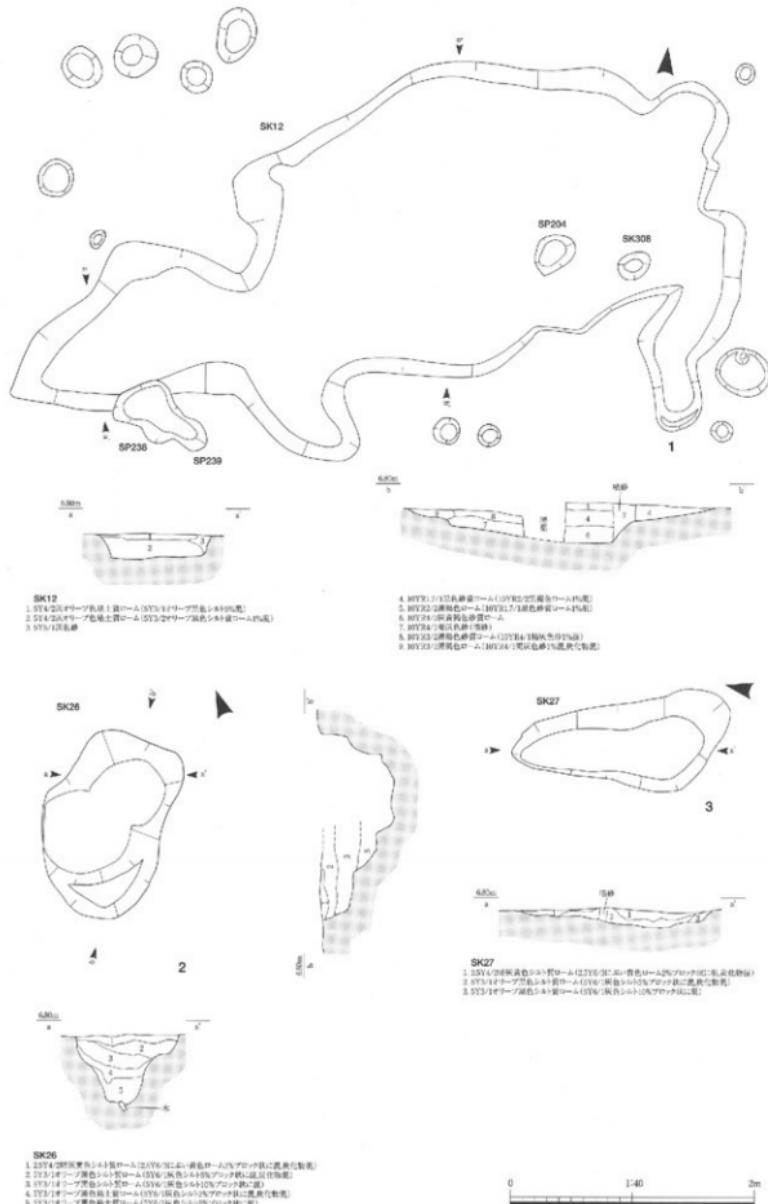
谷状地（SD 18）埋土下で検出した。SD 69の北側に隣接する。平面形は楕円形を呈し、規模は1.28m×90cm、深さ16cmである。埋土は灰色粘土質ローム、灰色シルトを基調とする水平堆積である。出土遺物は珠洲壺の底部片1点（36）、加工板で、板は下層から出土した。

#### 252号土坑（S K252, 第153・154図）

調査区東側の微高地で検出した。平面形は不整形を呈し、規模は1.45m×1.2mであるが、噴砂によって若干変形している。埋土はオリーブ黒色シルト質ロームである。出土遺物はない。切り合い関係ではSD 138より新しい。

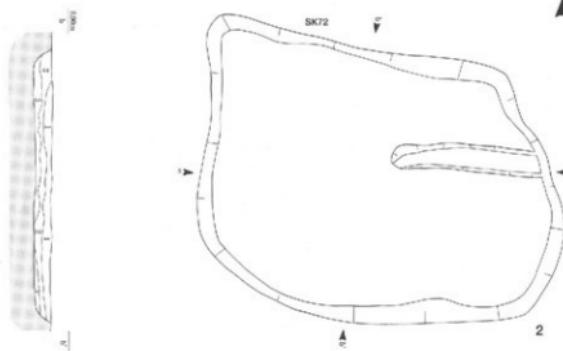
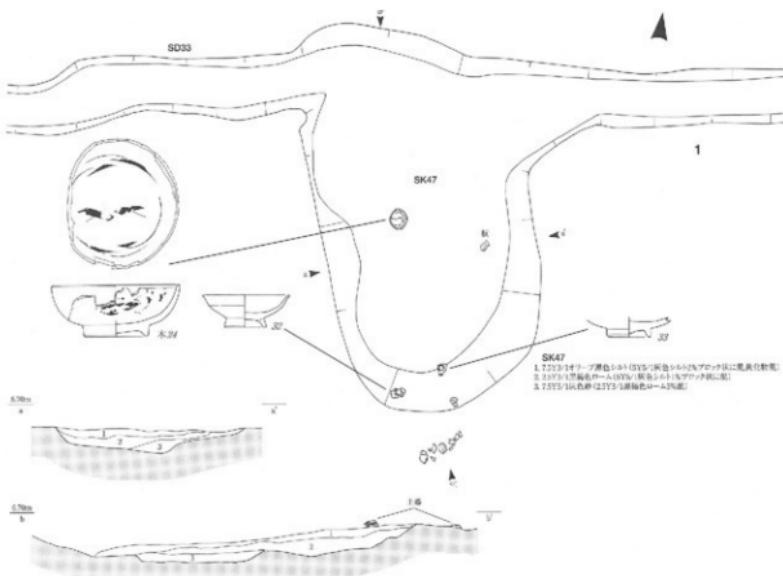


第170図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
1. SK2 2. SK7 3. SK8・SK9 4. SK10 5. SK11



第171図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1 SK12 2 SK26 3 SK27

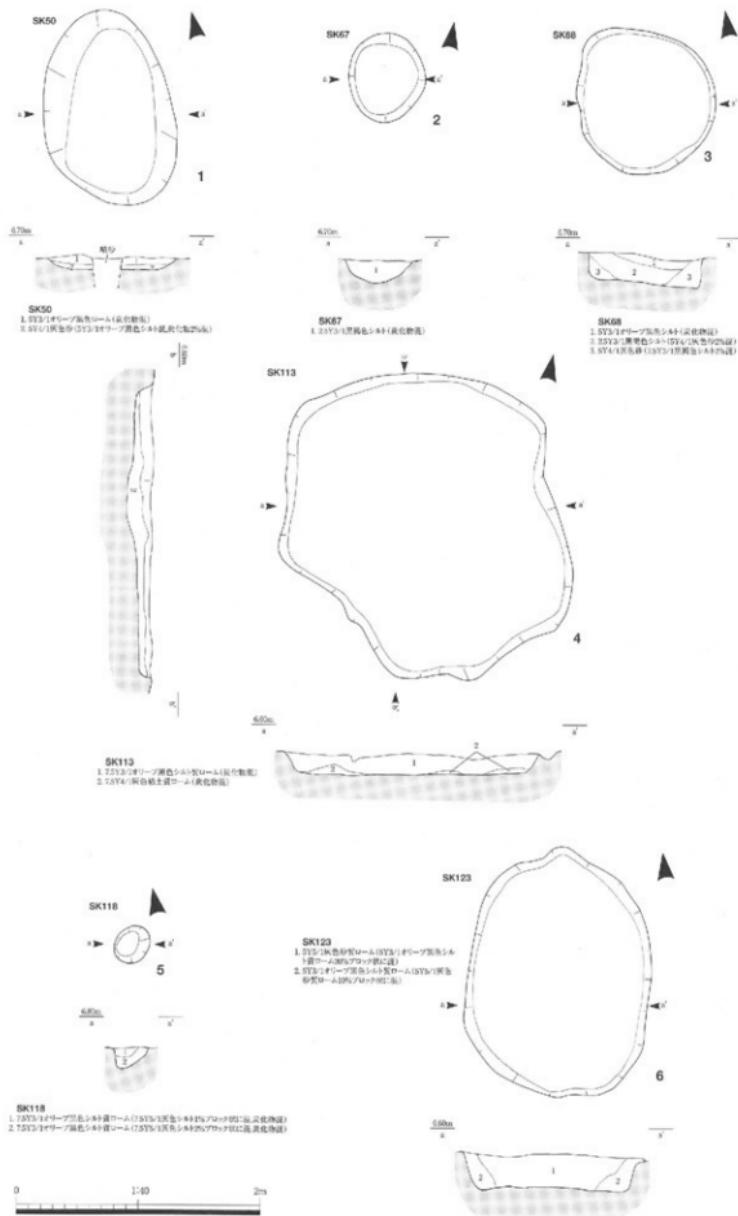


SK72  
1. 72Y3-1青色粘土(72Y3-1青色粘土)  
2. 72Y3-2深褐色粘土(72Y3-2深褐色粘土)  
3. 72Y4-3青色シート



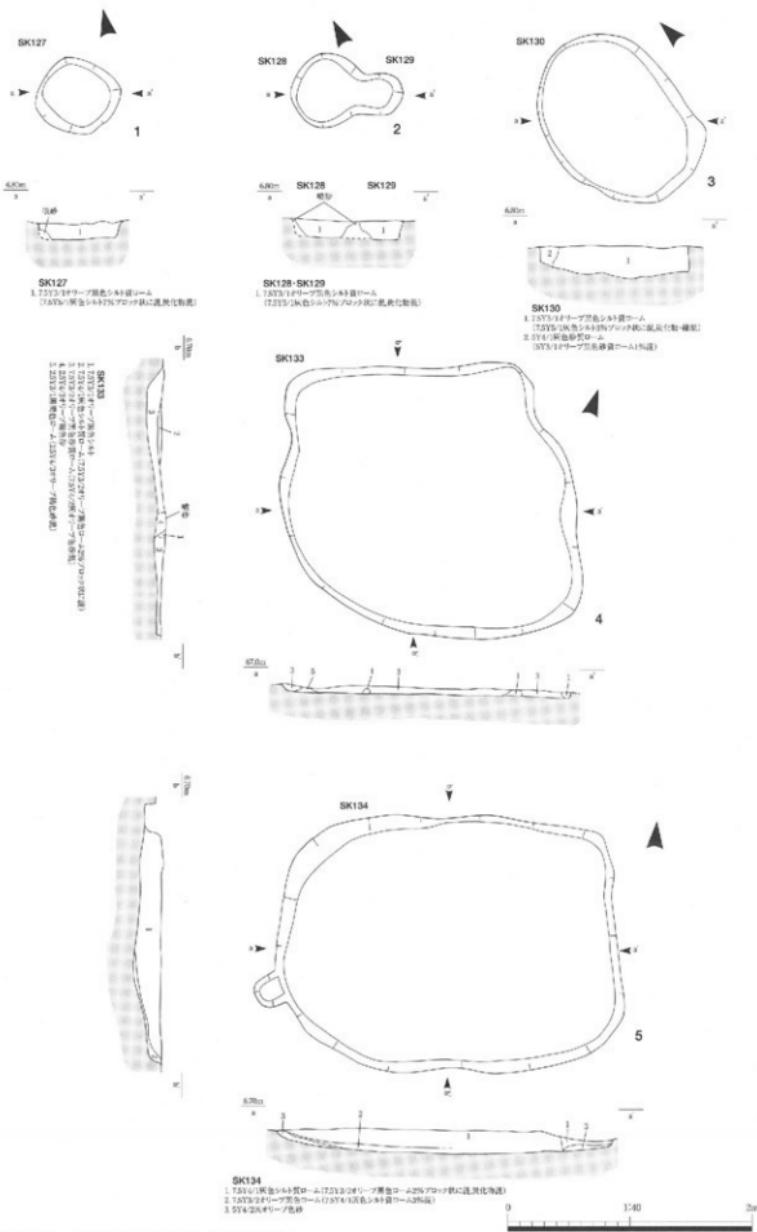
第172図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SK47 2. SK72



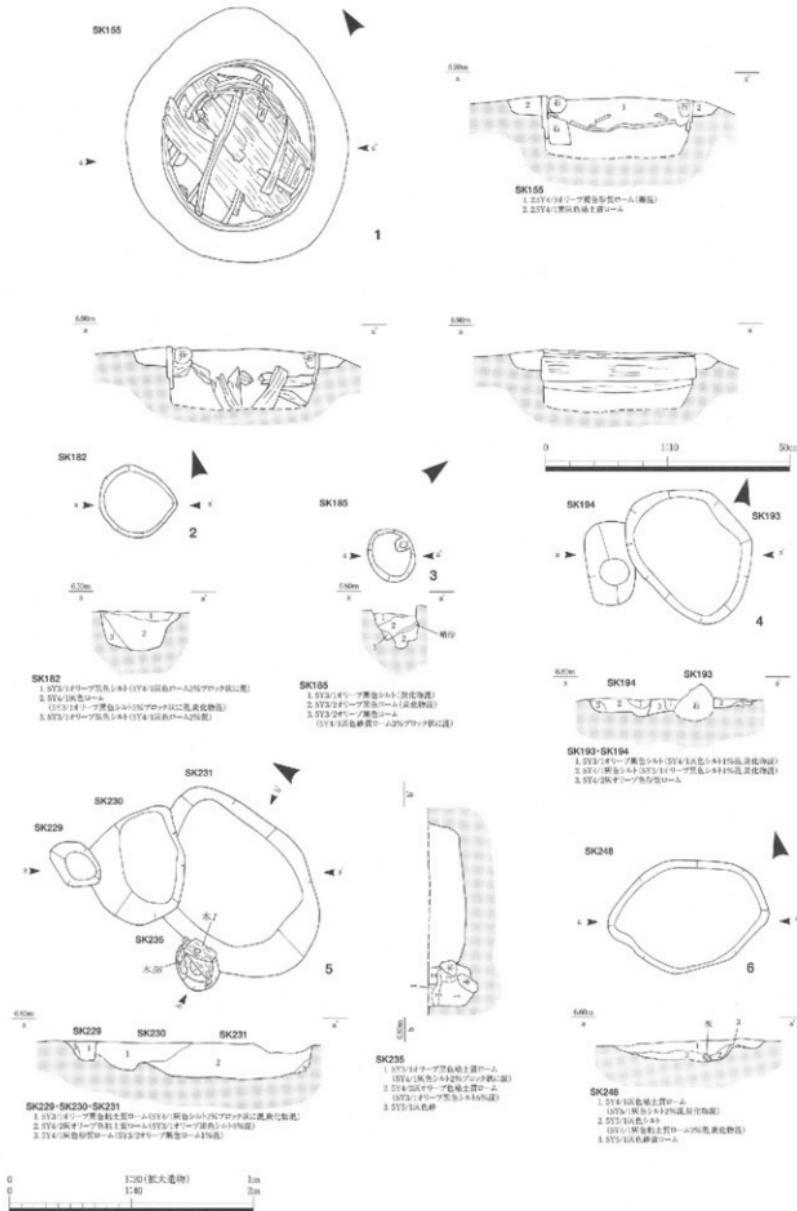
第173図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SK50 2. SK67 3. SK68 4. SK113 5. SK118 6. SK123



第174図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SK127 2. SK128 · SK129 3. SK130 4. SK133 5. SK134



第175図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図

1. SK155 2. SK182 3. SK185 4. SK193・SK194 5. SK229・SK230・SK231・SK235 6. SK248

## (7) 煙 (S D80~97, 第176図, 図版97)

谷状地 (S D18) 埋土上面で検出した。調査区西側に位置する。周辺には網目状の幅広の噴砂が多く、近代の暗渠にも切られている。幅26cm~46cm、長さ82cm~3.3m、深さ4~16cmの舷間溝（さく）が並行して走る。埋土は灰色砂質ロームである。噴砂と近代の暗渠に切られる。出土遺物は土師器小片1点・瓦質土器蓋の小片1点(70)である。中世末期の遺構と考えられ、噴砂は1858(安政5)年の安政地震によるものと推定される。また、煙と同じ面で検出したS K26の花粉・種実分析により、栽培植物のアサ、ソバが検出されたことは遺跡周辺に畠地が存在した可能性を傍証するものと考えられる<sup>145</sup>。

## (8) 土器集中地点 (第177図, 図版98)

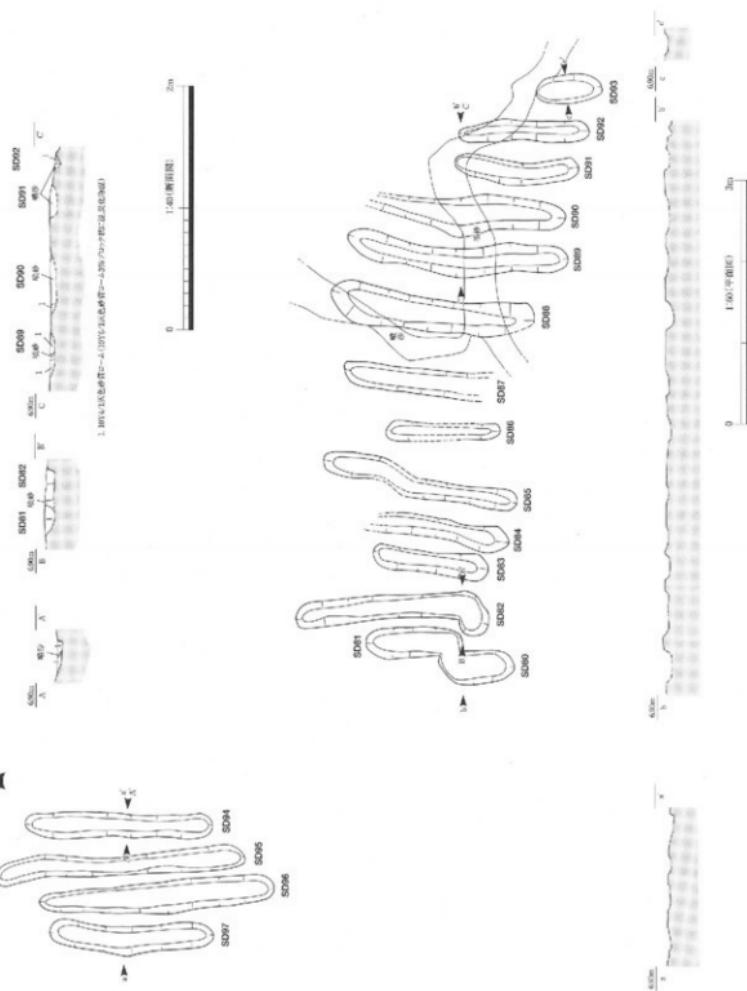
谷状地 (S D18) の埋土下、調査区中央の建物域北側の地山直上で、中世土師器皿(37~69)が集中して出土した。一部はS D245の肩に落ちかけた状態で出土しており、またS K47の埋土上面にのっているものもあり、時期としてはS K47埋没後で、S D245が機能している時のものと考えられる。S D33からは出土しておらず、遺構の配置からS D245とS D33は時期を違えて建物を区画する溝と考えており、S D33埋没後の可能性が高いと考える。

土器集中地点で出土した中世土師器皿は、他の遺構や包含層から出土した中世土師器とは形態も胎土も異なる特殊なものであり、図示した地点以外からは出土していない。これらは南北6m、東西6mの範囲に散らばっているが、ある程度まとまって出土している箇所はS D245の東端付近に無台皿5個体(44~48)、S D245の東端から西へ約3m付近に無台皿5個体(38~41・61)、そこから南へ約3m付近に無台皿6個体(51~55・64)、S K47上面南端付近に無台皿4~5個体(56~59)・有台皿1個体(32)・中国製青磁碗(33)1個体となっている。この他に散在しているものを合わせると、中世土師器無台皿33個体・有台皿1個体・中国製青磁碗1個体が確認できる。4箇所のまとまりが元位置に近い状態で出土したとすれば、中国製青磁碗・中世土師器有台皿が含まれるS K47上面南端の一群は特別な組成といえる。なお、この2点はS K47の遺物としてとり扱ったが、上面で出土しているため時期的には土器集中地点の土器に伴うと考えられる。

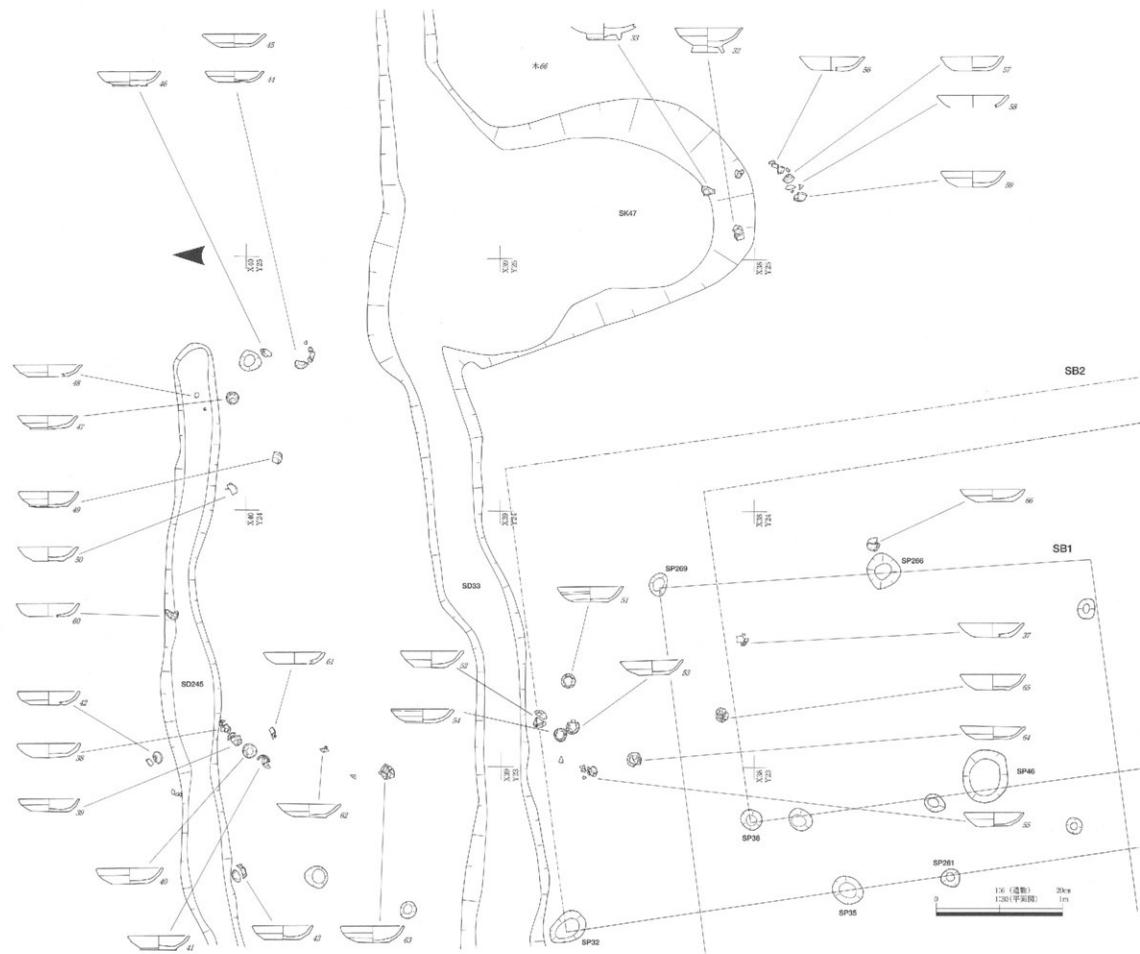
周辺は噴砂が多く、43は噴砂によって引き裂かれ割れたものである。噴砂によって元位置からはずれたと考えられるものもあるが、地震の発生は上部堆積層に完全にパックされた後であるので、噴砂による移動距離は長くはないものと考えられる。土師器皿は仰向けで出土したが多いが、40・42は伏せた状態で出土した。40を含む一群は4個体が並んで出土しており、意図的に並べられたものとみられる。

これら土器集中地点とした場所から出土した中世土師器・中国製青磁はその出土状況から何らかの祭祀を行ったものと推測される。後述するが、この土器祭祀はS D245等の溝からなる方形区画に開まれたS B 1に伴う可能性が高いと考えられる<sup>146</sup>。位置的には、S B 1を囲む方形区画内の、北東部分にあたる。

注釈 第二回目 自然科学分野 ㈱大蔵出版社・ラガ 斎藤雅志「B、花粉分析」、手洗野赤浦遺跡・岩泽瀬河鳥遺跡の花粉化石群  
第1分科 自然科学分野 ㈱大蔵出版社・ラガ 斎藤雅志、植田秀治「V. T洪崎中保遺跡・岩泽瀬河鳥遺跡から出土した大麦植物化石」  
註釈 第1回 手洗野赤浦遺跡の発掘



第176図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
SD80~97



第177図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図 (1/30)  
中世土師皿集中地点

第21表 手洗野赤浦遺跡 建物一覧

地物	地物ID	内轮廓(m)	株行距(米)	植被识别(%)	植被识别率(%)	植被识别(%)	植被识别率(%)	植被识别(%)	植被识别率(%)	植被识别(%)	植被识别率(%)	植被识别(%)	植被识别率(%)	
SB1	410	3.99	13.94	N-83°-W	0.16~0.26	0.10~0.20	4.1	1.60~1.80	SP16SP15SP16SP26NP36	144~145	96~98			
SB2	680	3.76	25.02	N-7°-W	0.09~0.42	0.09~0.24	0.65~2.25	3.70	SP23SP23SP28(树)SP42~44SP16SP16SP26SP263	144~145	86~88			
SB3	325	2.05	6.26	N-82°-W	0.21~0.37	0.10~0.16	3.10~3.25	1.90~2.05	SP16SP17SP16SP26	144~145	86~87			
SB4				测定不数	巽北	0.16~0.62	0.08~0.26		SP16SP16(树)SP42SP16SP16(桂)SP15SP16	146	86~96			
SB5				测定小数	N-10°-E	0.11~0.23	0.12~0.28		SP17SP26(桂)SP28(桂)SP28(桂)SP28(桂)	146	88			
SB6	375	2.66	9.93	N-10°-W	0.21~0.39	0.04~0.22	1.70~3.20	2.60~2.65	SP23SP23(桂)SP23(桂)SP23(桂)SP23(桂)	146				
SB7	440	3.60	15.31	N-73°-W	0.18~0.50	0.09~0.50	4.20~4.40	1.60~1.95	SP19SP20SP20SP20SP27SP310	147	87			
SB8	610	2.70	16.75	N-8°-E	0.18~0.57	0.11~0.24	2.20~2.90	2.70	SP19(桂)SP20SP15SP20SP28(桂)SP25(桂)	147~148	87~88			
SB9	545	5.20	27.68	N-2°-E	0.13~0.43	0.04~0.24	2.70~5.45	5.20	SP15SP15(桂)SP20SP25(桂)	147~148	87			
SB10	495	1.93	7.82	N-1°-W	0.27~0.54	0.16~0.30	1.95~4.45	1.50~1.95	SP16SP21SP24SP22SP20(桂)SP28(桂)	147~148	87~88			
SB11	640	3.50	33.87	N-8°-W	0.22~0.48	0.13~0.36	1.75~2.40	1.95~4.45	SP13(加工)SP14(中尾)SP15(中尾)SP16(中尾)SP15(桂)SP16(桂)SP16	149~150	89			
SB12				测定小数	N-0°-E	0.23~0.69	0.10~0.68	1.75~2.40	2.70~2.80	SP15SP15SP15SP15(桂)SP10SP10(桂)SP103	149~150	89		

第22表 手洗野赤浦遺跡 柱穴一覧(1)

地 物	造 横	平面形	底板(m)			出 口物	特 性	博 国	写真用版
			長さ	幅	深さ				
SB1	SP29	円	0.16	0.13	0.12			144-145	
	SP45	円	0.23	0.21	0.20			144-145	
	SP61	円	0.23	0.21	0.12			144-145	88
	SP26	円	0.26	0.25	0.16			144-145	
	SP29	椭円	0.17	0.14	0.10			144-145	
SB2	SP32	椭円	0.28	0.24	0.18			144-145	
	SP35	円	0.24	0.21	0.09			144-145	
	SP38	円	0.16	0.15	0.16 柱			144-145	
	SP42	円	0.34	0.33	0.12			144-145	
	SP43	円	0.20	0.18	0.11			144-145	
	SP44	円	0.18	0.18	0.12			144-145	
	SP46	円	0.42	0.35	0.24			144-145	
	SP26	円	0.35	0.31	0.26			144-145	88
	SP261	円	0.13	0.13	0.10			144-145	
	SP263	円	0.09	0.08	0.12			144-145	
SB3	SP55	円	0.31	0.29	0.16			144-145	
	SP57	円	0.21	0.20	0.19			144-145	
	SP92	円	0.37	0.32	0.12			144-145	
	SP252	円	0.21	0.21	0.14			144-145	
SB4	SP160	円	0.62	0.39	0.18			146	
	SP161	円	0.36	0.34	0.26 柱			146	88
	SP162	椭円	0.45	0.33	0.08			146	
	SP163	円	0.32	0.27	0.22 柱	>SP161		146	
	SP164	円	0.18	(0.16)	0.08	<SP163		146	
	SP165	円	0.21	0.17	0.10			146	
	SP166	円	0.16	0.16	0.14			146	
	SP171	円	0.18	0.18	0.16			146	
	SP172	円	0.25	0.24	0.12			146	
	SP177	椭円	0.42	0.39	0.12			146	
SB5	SP137	円	0.23	0.21	0.18	>SD110		146	
	SP280	円	0.19	0.18	0.28 柱(3F)			146	88
	SP281	円	0.19	0.15	0.22 柱(3F)	>SD110		146	88
	SP282	円	0.11	0.10	0.12 柱			146	
	SP283	円			柱	柱のみ・断面加工		146	
SB6	SP223	円	0.32	0.28	0.15 柱			146	
	SP225	椭円	0.29	0.26	0.18 柱(3F)	>SD4		146	
	SP227	円	0.22	0.22	0.12 柱			146	
	SP240	円	0.21	0.20	0.04			146	
	SP249	円	0.39	0.37	0.22 中世・和器(3F)			146	
	SP253	円	0.23	0.19	0.17 柱(3F)			146	

第22表 手洗野赤浦遺跡 柱穴一覧(2)

柱 物	造 構	平面形	直径(m)			出土遺物	特 記	地 図	参考図版
			長 S	幅	深 S				
SB7	SP199	円	0.21	0.18	0.20			147	
	SP202	円	0.18	0.17	0.08			147	
	SP204	楕円	0.32	0.31	0.20		>SK12	147	
	SP209	円	0.34	0.30	0.44			147	
	SP272	円	0.50	0.48	0.60			147	
	SP310	円	0.23	0.22	0.33			147	
SB8	SP197	円	0.29	0.27	0.12 柱			147-148	
	SP201	円	0.23	0.23	0.11			147-148	
	SP216	円	0.29	0.19	0.14			147-148	
	SP238	不整	(0.49)	0.29	0.24 柱(SF)		>SP239-SK12	147-148	88
	SP257	円				柱(SF)	柱のみ・彫形無し	147-148	
SB9	SP187	円	0.27	0.23	0.04			147-148	
	SP192	円	0.43	0.40	0.20 柱			147-148	
	SP208	円	0.32	0.28	0.24		<SK207	147-148	
	SP225	円	0.13	0.12	0.04			147-148	
SB10	SP190	円	0.28	0.25	0.22			147-148	
	SP214	円	0.27	0.23	0.16			147-148	
	SP228	不整	0.51	0.42	0.30			147-148	
	SP239	円	(0.22)	0.21	0.23 柱(47)		SK12<SP239<SP238	147-148	88
	SP258	円				柱(45-46)	柱のみ・彫形無し	147-148	88
SB11	SP13	楕円	0.68	0.30	0.20 加工柱			149-150	89
	SP14	円	0.32	0.27	0.26 中世土器群・廻戸美濃			149-150	
	SP21	円	0.32	0.30	0.22 土師器・柱(40)			149-150	
	SP29	円	0.31	0.26	0.38 柱(47)			149-150	89
	SP30	楕円	0.24	0.23	0.31			149-150	
	SP34	円	0.28	0.28	0.34			149-150	
	SP79	円	0.47	0.45	0.22			149-150	
	SP106	円	0.24	0.21	0.24 柱(47)			149-150	89
SB12	SP19	円	0.23	0.18	0.30 粕			149-150	
	SP20	楕円	0.69	0.64	0.68 土師器・柱(47)		>SK199	149-150	89
	SP100	円	0.41	0.35	0.44			149-150	
	SP101	円	0.25	0.31	0.10 柱			149-150	
	SP103	円	0.38	0.35	0.10			149-150	
SA1	SP73	円	0.25	0.21	0.14			151	
	SP77	円	0.21	0.21	0.22			151	
	SP111	円	0.26	0.24	0.08			151	
	SP132	円	0.49	0.36	0.12 柱(48)			151	
	SP74	円	0.19	0.17	0.24			151	
SA2	SP75	円	0.25	0.24	0.26			151	
	SP76	円	0.33	0.30	0.30			151	
	SP112	円	0.22	0.22	0.20			151	
	SP120	円	0.28	0.28	0.28		>SK121	151	
	SP122	円	0.22	0.21	0.22 粕			151	
	SP123	円	0.22	0.19	0.20 柱(47)			151	
	SP51	楕円	0.66	0.22	0.26 柱(48)			152	
	SP53	円	0.31	0.28	0.08			152	
	SP74	円	0.33	0.30	0.16			152	
	SP95	円	0.28	0.22	0.12 柱(50)			152	
	SP126	円	0.42	0.40	0.18			152	
	SP135	楕円	0.70	0.48	0.36 柱(55)			152	
	SP152	円	0.16	0.15	0.10 加工椎			152	
	SP157	円	0.18	0.17	0.15			152	
	SP191	円	0.51	0.28	0.46 柱			152	
	SP205	楕円	0.30	0.19	0.22 柱(57)			152	
	SP285	円	0.18	0.17	0.17 柱(57)			154	

第23表 手洗野赤浦遺跡 溝一覧

遺構	遺構性質	規模(m)		出土遺物	登記	伴 頃	参考版面
		幅	深				
SD4	溝	25.40	0.30	土器器、陶器(4-5)、中凹輪背輪(2-3)、凹形板(4)、漆器(2)、加工板(6-8)、鐵灰、燒石	<SP225	153-154	90
SD5	溝	9.50	0.76	土器器、中凹輪背輪(6)、陶器(7-8)、中凹輪背輪		155-156	
SD6	溝	17.5	0.18	1.陶器、小件土器器(3-4)、鉢(18-21)、越前吉備(16-17)、 側系、中國製白陶(14-15)、中國製青瓷(11-13)、 加工板(58-59-60)、魚骨(3)、鐵器(15)、漆器(5)、五輪器(1)、 鐵石(7)、鐵灰、燒石		155-157-158	90
SD33	溝	6.75	0.22		>SK47	161-162	98
SD36	溝	0.26	0.07			161-162	
SD64	溝	0.32	0.08			161-162	
SD69	溝	1.60	0.14			161-162	
SD80	塹	0.41	0.10			176	97
SD81	塹	0.38	0.08			176	97
SD82	塹	0.29	0.08			176	97
SD83	塹	0.26	0.07			176	97
SD84	塹	(0.25)	0.04			176	97
SD85	塹	0.31	0.04			176	97
SD86	塹	(0.24)	0.04			176	97
SD87	塹	(0.30)	0.05	瓦質土器(20)		176	97
SD88	塹	0.40	0.09	土器器		176	97
SD89	塹	0.33	0.04			176	97
SD90	塹	(0.45)	0.04			176	97
SD91	塹	0.30	0.04			176	97
SD92	塹	0.28	0.04			176	97
SD93	塹	0.33	0.04			176	97
SD94	塹	0.33	0.04			176	97
SD95	塹	0.27	0.04			176	97
SD96	塹	0.30	0.04			176	97
SD97	塹	0.29	0.04			176	97
SD109	溝	0.56	0.18	1.海苔、銀燈籠、加工材、加工板、板夷		153-154	
SD110	溝	5.00	0.30	根莖器(22)、中凹輪背輪(23)、漆器(24)、古瀬戸、漆器(25-26)、鐵灰	>SP137-SP281	153-154	90
SD138	溝	1.37	0.17	漆器		153	99
SD139	溝	0.46	0.07			163	87
SD140	溝	0.35	0.16			163	87
SD141	溝	0.50	0.10			163	87
SD142	溝	0.54	0.08			163	87
SD147	溝	0.50	0.10			155-157	
SD150	溝	0.67	0.10			163	87
SD151	溝	0.76	0.10			153-154	
SD153	溝	0.80	0.06			159	
SD154	溝	2.50	0.17			159	
SD156	溝	0.76	0.20	漆器、凹形板(16)		160	
SD168	溝	0.30	0.06			160	
SD169	溝	0.45	0.07			160	
SD170	溝	1.46	0.08	角型器、中凹輪背輪、漆器		155	
SD173	溝	1.30	0.10	漆器		161-162	87
SD174	溝	0.32	0.08			161-162	87
SD175	溝	0.73	0.09			161-162	87
SD181	溝	0.60	0.10			161-162	87
SD216	溝	2.05	0.16	珠器(25)、板(33)、漆器(38-39)		164	
SD236	溝	1.45	0.06			164	
SD237	溝	0.68	0.09			155-157	
SD245	溝	0.50	0.19			161-162	98
SD330	溝	0.46	0.08			161	87

第24表 手洗野赤浦遺跡 井戸一覧

遺構	平面形	復原(m)			出土遺物	特記	番号	写真図版
		長さ	幅	深さ				
SE28	格円	3.62	2.16	0.97	土器器、漆器(?)、骨物(?)、円形板(?)、瓦(?)、加工板		165	91-92
SE40	円	2.46	2.03	0.66	中堅七輪蓋瓦調(28~30)、古鏡(?)、漆器(?)、骨物、加工板(?)、 加工材柱(?)、H形板(?)		166	93
SE41	不整	2.06	1.90	0.75	陶器、石器(?)、鐵石(?)、燒石		167	93-94
SE158	不整	2.01	1.99	0.70	陶器(?)、朱錠(?)、漆器(?)、泥荷木脂(?)、燒石		168	96
SE183	方	0.68	0.56	0.67	角物(?)、折板(30~32×40)、加工板(?)、加工漆(?)、漆材(?)		169	93-95

第25表 手洗野赤浦遺跡 土坑一覧

遺構	平面形	復原(m)			出土遺物	特記	番号	写真図版
		長さ	幅	深さ				
SK2	横円	0.63	0.44	0.11			170	99
SK7	不整	1.14	0.85	0.31	珠調		170	
SK8	円	0.50	0.46	0.20			170	
SK9	横円	0.41	0.36	0.14			170	
SK10	不規	0.53	(0.05)	0.18	土師質土器		170	
SK11	横円	0.69	0.58	0.28	珠調		170	
SK12	不整	5.86	2.60	0.31	埴輪、土器、漆器、瓦調、古鏡(?)、骨(?)	<SP204-SI238-SP229>SK12>SK306	171	96
SK15	円	0.30	0.30	0.04			171	
SK26	梅円	1.50	0.97	0.56	土器、加工板		171	
SK27	不整	1.64	0.75	0.16	中堅土器(?)		171	
SK47	梅円	3.16	1.73	0.50	中堅土器(?)、中国製青磁(?)、漆器(?)、魚物	<SD33	172	95
SK50	梅円	1.57	1.08	0.10	土器		173	
SK67	円	0.63	0.54	0.18			173	
SK68	円	1.18	1.13	0.29			173	
SK72	隅丸方	2.85	2.21	0.28	越前		172	96
SK89	横円	(0.74)	0.32	0.19		<SP206	149	89
SK113	不整	2.49	2.21	0.22	珠調(?)		173	
SK118	円	0.30	0.29	0.16	土器、加工板、櫻實		173	
SK121	円	0.15	0.12	0.06		<SP129	151	
SK123	梅円	2.06	1.51	0.28	加工板		173	
SK127	横円	0.98	0.62	0.14			174	
SK128	円	0.02	(0.03)	0.16			174	
SK129	円	(0.37)	0.34	0.16			174	
SK130	横円	1.50	1.12	0.26			174	
SK133	隅丸方	2.42	2.18	0.12	土器、珠調		174	87
SK134	隅丸方	2.82	2.04	0.24	中堅土器(?)、珠調		174	87
SK156	円	0.51	(0.46)	0.25	曲物(?)		175	96
SK182	梅円	0.62	0.58	0.32			175	
SK183	円	0.13	0.38	0.28	加工板、櫻實		175	
SK193	梅円	1.19	0.88	0.08		>SK194	175	96
SK194	横円	0.68	0.53	0.12		<SK193	175	96
SK207	不整	0.42	0.35	0.24		>SP208	148	
SK229	梅円	0.46	0.33	0.16		>SK239	175	
SK230	横円	0.94	0.65	0.22		SK229>SK230>SK231	175	
SK231	梅円	1.40	1.10	0.29		<SK230-SK235	175	
SK235	梅円	0.36	0.35	0.40	筆(?)、竹(?)、加工板	>SK231	175	96
SK248	横円	1.28	0.90	0.16	珠調(?)、加工板		175	96
SK252	不整	1.45	1.20			>SD138	153-154	

### 3 遺物

#### (1) 土器・陶磁器

##### A 捜立柱建物

6号掘立柱建物 (S B 6, 第178図, 図版100)

1は中世土師器皿である。口径11.9cm, 器高2.6cm。非ロクロ成形で、丸みをもつ厚い底部に外反する口縁部が付く。外面は口縁部のヨコナデ部分と無調整の底部の境に尖った稜が明瞭に残ることが特徴である。底外面は型等に押し当てたものか、器面に細かいヒビ状の割れがそのまま残されている。口縁部は外面に縫が付着し、灯明皿として使用されたと考えられる。

##### B 溝

4号自然流路 (S D 4, 第178図, 図版108・110)

2・3は中国製青磁碗である。2は高台は断面四角で内部の切りが浅く、底部は肉厚となる。外面には不明瞭であるが鍋をもつとみられる蓮弁文、見込みには圓線を有し、渦巻き状の幾何学花文が印刻される。釉は高台外面にまでかかり、骨付と高台内は露胎である。高台内には焼台痕がある。太宰府分類の龍泉窯系碗II b類に相当し、13世紀前半のものである。3は高台は角ぼり底部は肉厚である。見込みに圓線を有し、草花文が印刻される。釉は透明度が高く、緑がかった灰黄色を呈する。全面に施釉した後、高台内の釉を輪状に剥ぎ取る。剥ぎ取った釉の周囲に砂が溶着しており焼台痕とみられる。龍泉窯系で上田分類のB II～IV類に相当し、14世紀～15世紀のものである。

4・5は珠洲擂鉢である。4は底部で底外面は静止糸切りである。卸目は1単位が1.1cm幅に6条の櫛歯原体を用いて、まばらに施入される。5は口縁部で、端部は外方に屈曲するように挽き出され、端面には櫛目波状文を有する。V～VI期に比定され、14世紀末～15世紀中頃のものである。

5号池 (S D 5, 第178図, 図版108)

6は中世土師器皿である。口径7.3cm, 器高2cmの小皿である。非ロクロ成形で、器面調整は口縁部に一段のヨコナデを施すとみられるが、摩滅のため不明瞭である。

7・8は珠洲である。7は壺である。口縁部はくの字状に外屈し、長頸の方頭を呈する。V期に比定され、14世紀末～15世紀前半のものである。8は擂鉢である。体部は直線的に開き、口縁部は端部に広く面を取る長二角形を呈し、端面は内傾する。卸目は1単位2.9cm幅に8条の櫛歯原体を用いて、口縁部より一段下がった一定の位置から施入される。V期に比定され、14世紀末～15世紀前半のものである。

6号溝 (S D 6, 第178図, 図版100・101・108・110・111)

9・10は中世土師器皿である。9は口径8.8cm, 器高2.3cmの小皿である。非ロクロ成形で、底部から口縁部にかけて、緩やかに立ち上がる器形である。口縁部はヨコナデ、底外面は無調整である。部分的に黒変している。10は口径8.8cm, 器高3.1cmの小皿である。やや深身の丸底を呈し、粗雑な作りで形は歪んでいる。口縁部はヨコナデを施すが、内面は雑な調整で、横方向のナデを何度も重ねておこなっている。底外面は無調整である。口縁部全体に灯芯油痕が厚いタール状に付着する。

11～13は中国製青磁碗である。外面にヘラ搔きによる蓮弁文を有するが、半渦した釉がかかっているため不明瞭である。11は龍泉窯系で上田B II類に相当し、14世紀後半～15世紀前半のものである。12は見込みに印刻の一部がみえるが、意匠は不明である。釉は墨付を超えて高台内側にもかかる。上田B II類またはB III類に相当し、14世紀後半～15世紀前半のものである。13は見込みに圓線を有し、

草花文の印刻があるが、半濁した釉のため不明瞭である。釉は脛付を超えて高台内側にまでかかるが、脛付と高台内の釉を割り取っている。高台内には輪状の焼台の一部が溶着している。太宰府分類の龍泉窯系碗IV類または上田分類B II類に相当し、14世紀初頭～15世紀前半に位置づけられるが、高台が四角く高いので古い時期の可能性が高い。

14・15は中国製白磁皿である。14は外面は口縁部下をロクロケズリする。釉は細かい貫入がみられる。断面に漆継ぎの痕跡がある。15は粗製の皿で、内外面ロクロ削りを行うが、見込み中央には凸状の削り残しがある。高台部は削り出されるが、抉り込みは浅く低い高台となっている。見込みの釉を円形に搔き取り、外面は体部に施釉するが底部と高台部分は露胎である。重ね焼きを行い、見込みに4箇所目痕が残る。14・15はともに森田D群に属し、14世紀後半～15世紀のものである。

16・17は古瀬戸である。16は天目茶碗である。口縁端部は緩く外反する。鉄釉がかかり、高台周辺は露胎である。古瀬戸後期様式II期に比定され、14世紀末～15世紀初頭のものである。17は腰折皿の底部で、底外面は削り出し高台である。内面に灰釉がかかり、外面は露胎である。周囲を円形に打ち欠いており、面子に転用された可能性がある。後期様式IV期新段階に比定され、15世紀後半のものである。

18・21は珠洲である。18・19は擂鉢である。18は体部は直線的に開き、口縁部は端面が拡張した水平口縁となる。端面には柳波波状文を有する。鉗目は1単位1.4cm幅に7条の構造原体を用いて、口縁部より一段下がった一定の高さから密に施入される。V期に比定され、14世紀末～15世紀前半のものである。19は底部で鉗目は摩滅している。20はSE158との接合資料で、甕の底部である。21は甕で、口径は約50cmに復元される。口縁部はくの字状に外屈し、端部はやや長めの方頭を呈する。V期に比定され、14世紀末～15世紀前半のものである。

#### 110号溝（S D110, 第179図）

22は須恵器杯Aである。底外面は回転ヘラ切り、内面はロクロナデである。

23は中世土器器皿である。非ロクロ成形で、口縁部にヨコナデを施すが、外面のヨコナデは口縁端部のみで、以下は軽く指頭で押さえて器面調整する。小片のため傾きは明確ではないが、外方へ開く形態である。

24は珠洲甕である。口縁部はくの字状に外屈し、端部は方頭を呈する。IV期に比定され、13世紀末～14世紀中頃のものである。

#### 216号溝（S D216, 第179図）

25は珠洲甕である。口縁部はくの字状に外屈し、端部は方頭を呈する。外面の叩打成形は口縁基部直下から行われる。IV期に比定され、13世紀末～14世紀中頃のものである。

#### C 井戸

##### 40号井戸（S E40, 第179図、図版108・111）

26は古瀬戸合子である。口縁端部から蓋受け部は幅広の凹面をなし、体部との境には稜をもつ。体部は扁平な球形を呈する。肩部から底部近くまで垂下する隆帯を貼り付け、間に剣先状と花文状のスタンプで施す。粘土紐は指先で引き伸ばしたもので、断面形、長さとも一定ではない。貫入のある灰オリーブ色の灰釉がかかる。古瀬戸中期様式I～II期に比定され、13世紀末～14世紀初頭のものである。27は古瀬戸縁釉小皿である。口縁端部にのみ灰釉がかかる。後期様式IV期古段階に比定され、15世紀中頃のものである。

28～30は珠洲擂鉢である。体部は直線的に開き、口縁部は端部が拡張して広く面を取り、断面は長

三角形を呈する。端面は内傾して柳目波状文が施される。V期に比定され、14世紀末～15世紀前半のものである。

158号井戸（S E158, 第178図）

S D 6との接合資料に珠洲壺（20）がある。

#### D 土坑

12号土坑（S K12, 第179図, 図版111）

S E40との接合資料に瀬戸合子（26）がある。

27号土坑（S K27, 第179図）

31は中世土師器皿である。非ロクロ成形とみられるが、摩滅のため調整は不明である。口縁端部に灯芯油痕が残る。

47号土坑（S K47, 第179図, 図版100・101・110）

32は中世土師器皿である。口径10.6cm, 器高4.0cmの小皿である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りである。内面は緩やかに内湾するが、外側は口縁部下に稜をもつ。口縁部はやや外反し、端部はわずかに肥厚し丸く取める。細く高い高台を貼付する。見込みに〔Q〕字状を呈するヘラ記号状のくぼみがみられるが、胎土に含まれた纖維が焼成により燃えて無くなったりとみられる。

33は中国製青磁碗である。見込みは広く、無文である。高台はやや高く、高台内は粗雑に深く抉られ、中央が凸状となる。胎土はやや暗い灰色を呈し、粗い。釉は渦ったオリーブ灰色を呈し、薄くかかる。施釉範囲は高台外側まで、蓋付と内側は露胎である。太字府分類の龍泉窯系統IVイ類～上田D類またはE II類に相当し、14世紀前半～15世紀前半のものである。

113号土坑（S K113, 第179図）

34は珠洲壺である。口縁部はぐの字状に屈折し、端部は方頭を呈する。外面叩打成形は頸部よりやや下がった位置から行われる。IV期に比定され、13世紀末～14世紀中頃のものである。

134号土坑（S K134, 第179図）

35は中世土師器皿である。非ロクロ成形で口縁部にヨコナデを施す。口径は約10cmに復原される。

248号土坑（S K248, 第179図）

36は珠洲壺である。内外面ロクロナデで、底外面は静止糸切りである。

#### E 土器集中地点（第180・181図, 図版100・102～107）

37～69は中世土師器皿である。法量は、口径9.0～11.2cm, 器高1.7～2.6cm, 底径4.8～6.8cmである。ロクロ成形で、底部は回転糸切りである。底外面の回転糸切りの直径が口径の1/2前後となるものが多いが、底部から体部へなだらかに湾曲して立ち上がるため、見込みが広い形態をなす。調整は、体部はロクロナデ、見込みは摩滅のためほとんどのものが不明であるが、一方向の撫でがみられるものの（37・66）もある。ロクロ回転を利用して、体部の中程で上方へ挽き上げる際に、傾斜の変換点に弱い稜をなすものもあるが、内面は滑らかで段はみられない。口縁部の作工は特に丁寧で、外側は強くなじで、口縁端部はわずかに肥厚して丸く仕上げる。47は口縁の一部に、上から押さえられ上面に面を取ったように見える箇所もある。57は見込みに一部黒変がみられるが、他はすべて均一に黄桃色を呈し、灯芯油痕はみられない。47と64の見込みには焼成前に胎土に混入した植物質が、燃えて消滅した痕跡らしい窪みがある。胎土は肉眼観察では海綿骨針と赤色粒を含み、すべて精緻である。37・43・49・58についても剥片観察法による成分分析を行い、その結果、他から出土したものに比べて鉱物片の種類が少なく、海生種の珪藻と海綿骨針を含む点が特徴であることがわかった。特にカリ長石

を含まない点では、庄川扇状地堆積物の影響が及ばない地域、西山丘陵周辺では丘陵地内に入り込んだ低地の堆積物を使用したと推測された<sup>44</sup>。以上のことから土器集中地点から出土した中世土師器皿は胎土、成形・調整技法に共通した特徴がみられ、かつ、他の遺構から出土したものとは異質のものといえる。年代については、S K47上面で出土した14世紀前半～15世紀前半の中国製青磁と同時期の可能性が高く、また法量的には14世紀中頃以降のものと考えられる。

#### F 煙

##### 烟 (S D87, 第181図)

70は瓦質土器蓋である。口径10.6cmである。外面はケズリ後、不定方向のナデを施し、器面には凹凸がある。内面の突起部の削り出しが粗雑で、縁辺には連続した工具痕が残る。外面から内面端部にかけては黒変し、胎土には白色粒、石英を多く含む。中世末～近世のものである。

#### G 谷状地 (S D18, 第182図、図版107・109)

##### 71は須恵器杯B蓋である。ボタン状の扁平なつまみが付く。

##### 72は土師器高杯である。脚に円孔透かしを有する。調整は摩滅のため不明である。

73～79は中世土師器皿である。73～78は非ロクロ成形である。73・74・77は底部から口縁部にかけて緩やかに丸みを帯びて立ち上がる。8cm前後に復原される小皿で、74は口径7.9cm、器高2.1cmである。調整は口縁部にヨコナデを施すとみられるが、摩滅のため詳細は不明である。77は口縁部に灯芯油痕が残る。75・76は見込み縁辺部を外方へ押し出すようにくぼませ、やや外反する口縁部がつく。口径7.5～8.0cm、器高1.9～2.2cmの小皿である。調整は口縁部をヨコナデし、粗い筋状のナデ痕が残る。外面は無調整である。75～77は口縁部に灯芯油痕が残る。78は口径約11.8cmに復原される。底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。口縁部にヨコナデを施し、底外面は無調整である。79はロクロ成形で、土器集中地点に多くみられる形態の皿である。

80～82は珠淵捕鉢である。体部は直線的に開き、口縁部は端面が拡張して内傾する。端面に波状文はみられない。82の御印は1単位3cm幅に11条の櫛歯原体を用いて施入される。V期に比定され、14世紀末～15世紀前半のものである。

83は青磁碗である。口縁端部は外反し、丸く收める。太宰府分類の龍泉窯系碗IV類～上田D II類に相当し、14世紀前半～15世紀前半のものである。

84は土錘である。樽形を呈し、欠損により長さと直径は不明、孔径は2.3cm、残存部重量は13.4gである。

#### H 包含層の土器・陶磁器

##### 須恵器 (第182図、85～87)

85～87は杯B身である。85の底外面は回転ヘラ切りである。8世紀のものである。87は低い高台が外方へ開き気味に付く。底部は回転糸切りである。10世紀のものである。86は杯B蓋である。頂部は平坦で、口縁端部は角ばる。調整は、頂部はやや粗雑であるが、全面ロクロナデを施す。8世紀のものである。

##### 土師器 (第182図、88・89)

##### 88・89は甕である。摩耗のため調整は不明である。胎土に粗い砂粒をやや多く含む。

##### 中世土師器 (第182図、90～101、図版107)

90～101は皿である。90はロクロ成形、91～101は非ロクロ成形である。90～97は口径7.0～8.7cm、器高1.7～2.2cmである。90は底部は回転糸切り、見込みを一方向ナデした後、体部にロクロナデを施

す。91は底部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。口縁部はヨコナデするが、他は摩滅のため不明である。口縁部には広い範囲にタール状の灯芯油痕が付着する。92は口径7.8cm、器高2.2cmで、小振りだがやや深身の皿である。端部は丸く收める。調整は摩滅のため不明。口縁部に灯芯油痕が残る。93は底部の器厚が不均等な平底で、外反する口縁部がつく。見込みを一方向ナデの後、口縁部に一段のヨコナデを施す。底外面は無調整である。94~97はやや丸みを帯びた厚い平底に、外反する短い口縁部がつく。調整は口縁部はヨコナデ、見込みは一方向ナデ、底部外面は無調整である。96は口縁部に灯芯油痕が残る。97は黒変している。98~100は浅く、外方へ開く形態である。口径は8.9~12.0cmである。98・100の口縁端部は、つまみ上げて丸く收める。内面はほぼ全体をヨコナデするが、外面は口縁部のみで、以下は軽く指で押さえて器面調整する。98は広範囲に煤が付着する。99は口縁部がやや肥厚し、外面に面をとるように上方に尖らせた形態をとる。口縁部はヨコナデを施し、タール状の灯芯油痕が付着する。100は内面の一部に布状の圧痕が残る。101は口径7.7cm、器高2.6cmで、口径は小振りだが、深身の形態で、器壁は厚い。調整は摩滅のため不明だが作りは粗雑で、丸底の特殊な器形である。

#### 珠洲（第183・184図、102~122、図版108・109）

102~108は擂鉢である。102~105は体部が直線的に開き、口縁部は端面が拡張して内傾する。V期に比定され、14世紀末~15世紀前半のものである。102は端面に櫛目波状文を有する。櫛目は、102・103は口縁部より一段下がった一定の位置から密に施入され、105はやや間隔を置いて施入される。櫛目原体は、103が<sup>a</sup>1.7cmに7条、105は4cm幅に14条が1単位である。106~108は底部で、底外面は静止糸切りである。櫛目の歯原体は、106は1単位が2cm幅に6条、107は3.2cm幅に12条の歯原体を用いて密に施される。108は板状压痕があり、ヘラで起こしたものと考えられる。

109~113は壺である。110・111は叩打成形の中壺で、外面に平行叩き、内面に円窓の當て具痕を有する。頭部は垂直に立ち上がり、口縁部は弧状に外反する。109の口縁部形態は外端部を挽き出し端面を拡張させる。110・111は口縁部先端を肥厚させ外方に突出させる。112・113は底部で静止糸切りである。

114~122は壺である。114~120は口頭部はくの字状に外屈し、口縁端部の形態は114が長めの円頭、115・117・118は長めの方頭、116・119は端部が平直な方頭、120は円頭を呈する。IV~V期に比定され、13世紀末~15世紀前半のものである。119は口縁部内面に別個体が溶着する。121・122は口縁部を長めに挽き出し、やや垂下させて端部は丸く仕上げる。III期に比定され、13世紀中頃のものである。

#### 越前（第184図、123、図版111）

123は壺である。口縁部は方頭を呈し、外面口縁部下に断面三角形の稜をもつ。鉄輪がかかる。16世紀前半のものである。

#### 信楽（第184図、124）

124は壺である。胎土に長石を多く含み、外面に灰赤色の自然釉がかかる。

#### 瓦質土器（第184図、図版111）

125は火鉢である。口縁部は内傾し、上面に広く面を取る。外面に隆帶を貼り付け、雷文を連続で印刻する。胎土は骨針を含み、淡赤橙色で堅く焼き締まっている。

#### 輸入陶磁器（第184図、126~135、図版110）

126~131は中国製青磁である。126~130は碗である。126は外面に鏹蓮弁文を有する。太宰府分類の龍泉系碗II b類に相当し、13世紀前半のものである。127はヘラ彫りの蓮弁文を有するが、細く、

種が半濁しているため不明瞭である。128は鍋のない幅広の片彫り蓮弁文を有する。口径が小振りなので14世紀中頃以降の可能性が高い。釉は透明感のある緑がかったオリーブ灰色を呈する。127・128は龍泉窯系で上田B II類に相当し、14世紀後半～15世紀前半のものである。129はヘラ彫り蓮弁文を有する。太宰府分類の龍泉窯系碗IV類～上田B II類に相当し、14世紀前半～15世紀前半のものである。130は腰が深く見込みは広い。花文の印刻があるが、浅く明瞭でない。高台はやや高く、高台内の抉りは雛で中央が凸状になる。釉は透明感のあるオリーブ灰色を呈し、腹付を超えて高台部の内側にまでかかる。高台内は露胎である。太宰府分類の龍泉窯系碗IV類を上限とし、14世紀前半～15世紀前半のものである。131は皿である。高台は低く、底部の器壁は薄い。釉は透明感のあるオリーブ灰色を呈し、全面に施釉後高台内を輪状に搔き取る。見込みに花文の印刻があるが浅く不明瞭である。丸い破片で周囲は擦れて角が無くなっていることから面子に転用されたものであろう。太宰府分類の龍泉窯系碗IV類を上限とし、明代に下る可能性もある。

132～134は中国製白磁である。132は杯である。体部は内溝して立ち上がり、口縁部は外反する。胎土は軟質粗製で、釉は細かい貫入がみられる。133は皿で、小さい角高台が付く。胎土は軟質粗製で黄灰色を呈する。釉は不透明で細かい貫入があり、高台の外側までかかるが腹付と高台内は露胎である。高台内に「+」の墨書きがある。134は杯である。高台に挿りがあり、4足に復原される。釉は透明感があり、やや青みがかった灰白色を呈し、貫入がみられる。全体に施釉された後、接地部の釉のみ削り取る。132～134は森田D群に属し、14世紀後半～15世紀のものである。

135は中国製染付である。波状口縁で、口縁端部に反って概念化された稜花が描かれるが、単位は不明である。景德鎮窯系の可能性があり、16世紀後半以降のものであろうか。

#### 瀬戸美濃（第185図、136・138、図版111）

136は天目茶碗である。口縁部は短く外反する。赤味がかった鉄釉がかかり、高台周辺は露胎である。大窯IV期前半に比定され、16世紀末のものである。138は皿である。貼り付け高台で、高台内側に輪ドチ痕があり、その周辺まで灰釉がかかる。大窯I～II期に比定され、15世紀末～16世紀前半のものである。

#### 古瀬戸（第185図、137、図版111）

137は絵釉小皿である。口縁部に鉄釉がかかる。後期様式IV期古段階で、15世紀中頃のものである。越中瀬戸（第185図、139～149、図版112）

139は碗である。体部上半は直立気味で、口縁部はわずかに外反する。内外面ロクロナデで、鉄釉がかかる。16世紀末～17世紀のものである。

140～146は皿である。140～144は丸皿で、体部が外方へ大きく開く形態である。16世紀末～17世紀のものである。内面と外面上半はロクロナデし、140・141・143・144は外面の体部下半から底部にかけてロクロケズリし、高台を基筒底状に削り出す。142は断面三角形の高台を貼り付け、高台周囲をロクロナデする。140・144は黒褐色の鉄釉、141～143は灰白色～浅黄色の灰釉が施される。施釉範囲は口縁部内外面で、体部下半は内外面とも露胎である。141・142は見込みに印花がある。145・146は向付で、体部が下半で屈曲し口縁部が直立する形態である。145は鉄釉、146は灰釉を施す。登窯期の製品で、17世紀のものである。146は見込みに重ね焼きの痕跡がある。

147は香炉である。口径は10.6cmである。体部は直立し、口縁部は内端を摘み出して、上方に面を取る。外面は残存部全体に、内面は口縁部のみに鉄釉が施される。16世紀末～17世紀のもの。

148は火入れである。口径は13cmに復原される。口縁部は体部よりやや窄まり、端部は肥厚して上

方に面を取る。残存部全体に鉄粧が施される。16世紀末～17世紀のもの。

149は鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部は丸く收める。口径は23.6cmに復原される。内外面口クロナデし、鉄軸を施す。16世紀末～17世紀のもの。

唐津（第185図、150～154、図版112）

151は椀である。削り出し高台で、高台周辺はロクロケズリである。内面に鉄軸がかかり、外面は露胎である。

150・152～154は皿である。150は内面に、鉄絵で草葉文が描かれる。内面全面と外面の高台部外縁まで灰釉を流しかける。高台は断面四角形でやや高く削り出す。胎土目が残る。16世紀末～17世紀初頭のものである。152～154は灰釉を内面全面と外面体部上半に流しかける。152・153は体部中位で屈曲して口縁部が外反する。152は見込みに胎土目積みの目痕があり、16世紀末～17世紀初頭のものである。154は砂目積み痕が底部内外面に残る。高台の削り出しが浅く、底部の器壁は厚くなる。17世紀前半のものである。

伊万里（第185図、155、図版112）

155は皿である。高台を三角形に削り出し、内面は染付がある。見込みは蛇の目釉羽ぎの中に重ね焼き痕が残る。外面は全面釉がかかる。波佐見窯系で、17世紀後半～18世紀前半のものである。

陶器（第185図、156）

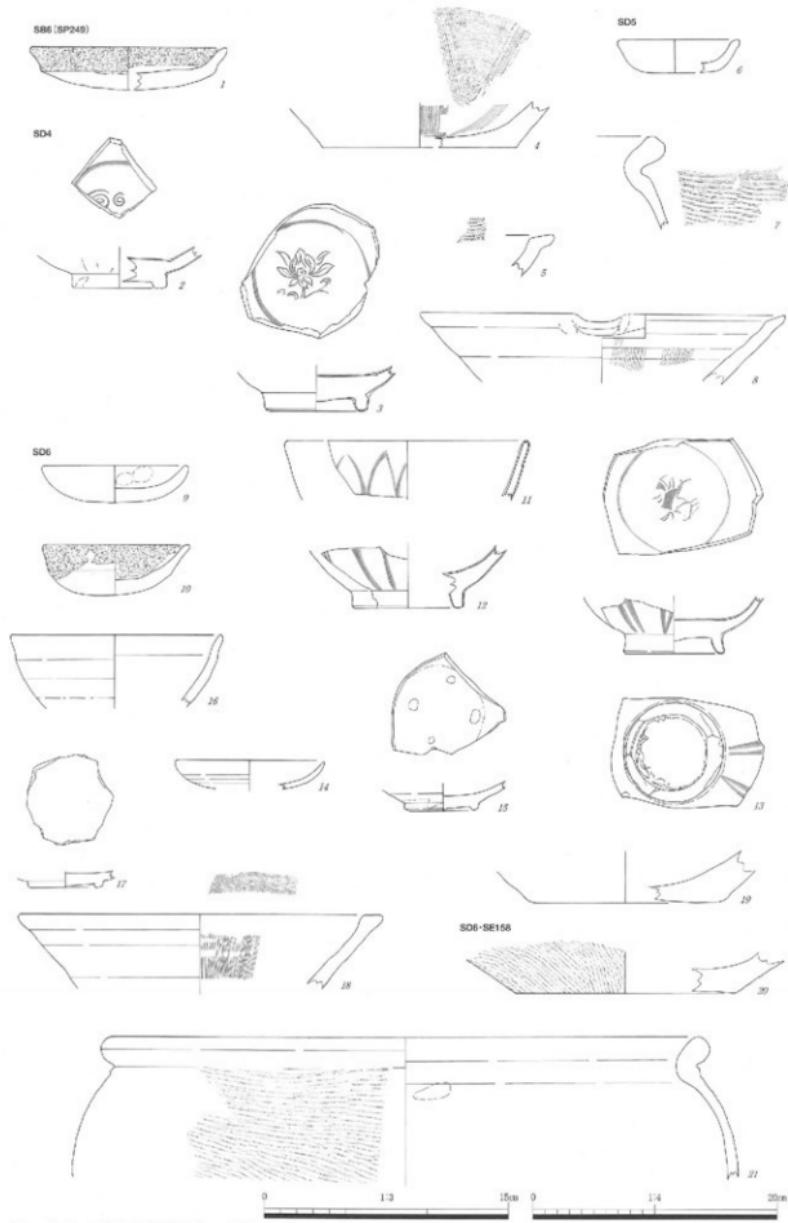
156は産地不明の皿である。口縁端部はわずかに外反し、体部中程で外面にはロクロ目の稜があるが内面には圓線状の凹線ができる。底外面は回転糸切りである。堅く焼き締まっている。

土錘（第185図、157～160、図版113）

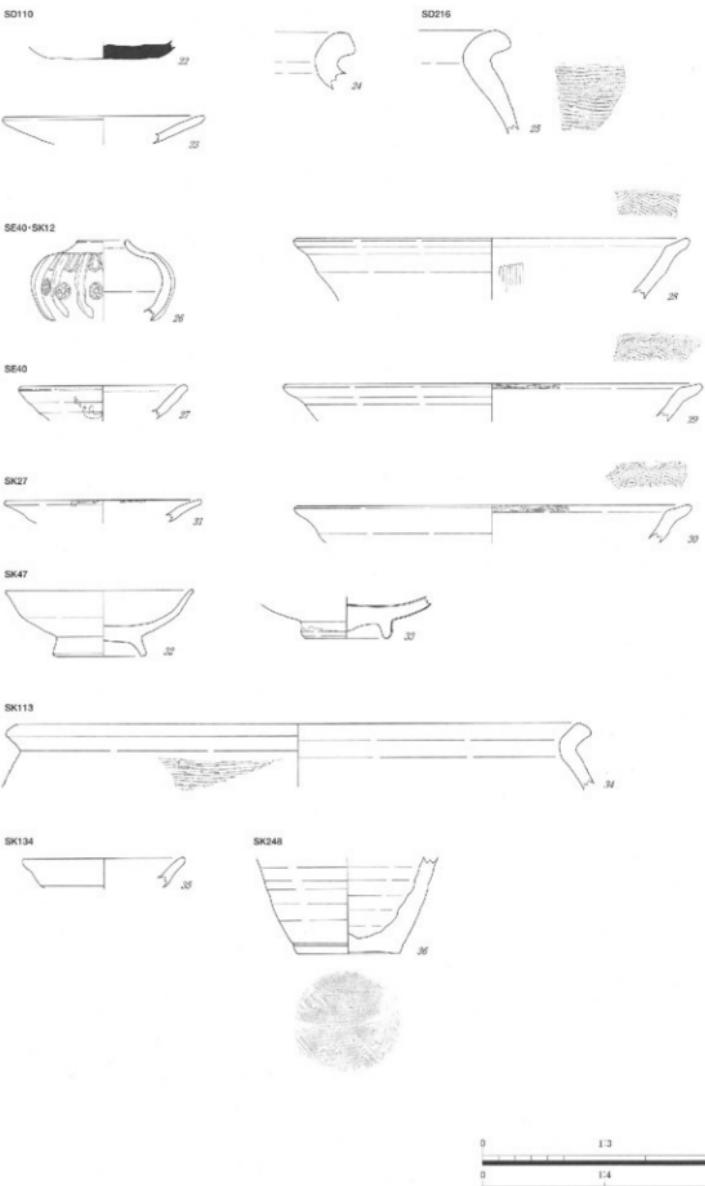
157～160は土錘である。球形を呈し、端部に面取りがみられるものもあるが、外面は摩滅している。157は長さ2.3cm、直径2.5cm、重量は10.4gで、小振りで軽い。158は端部欠損により長さ不明、直径5.3cm、孔径2.0cm、残存部重量は48.2gである。159は長さ5.0cm、直径5.4cm、孔径1.7cmであるが、欠損しており、残存部重量は76.5gである。160は長さ5.5cm、直径5.0cm、孔径1.5cmであるが、欠損しており、残存部重量は64.1gである。

根付（第185図、161、図版113）

161は磁器の根付である。大黒の面根付で、紐を通すための孔を有する棟が裏面にある。外面には灰黄色の釉がかかる。

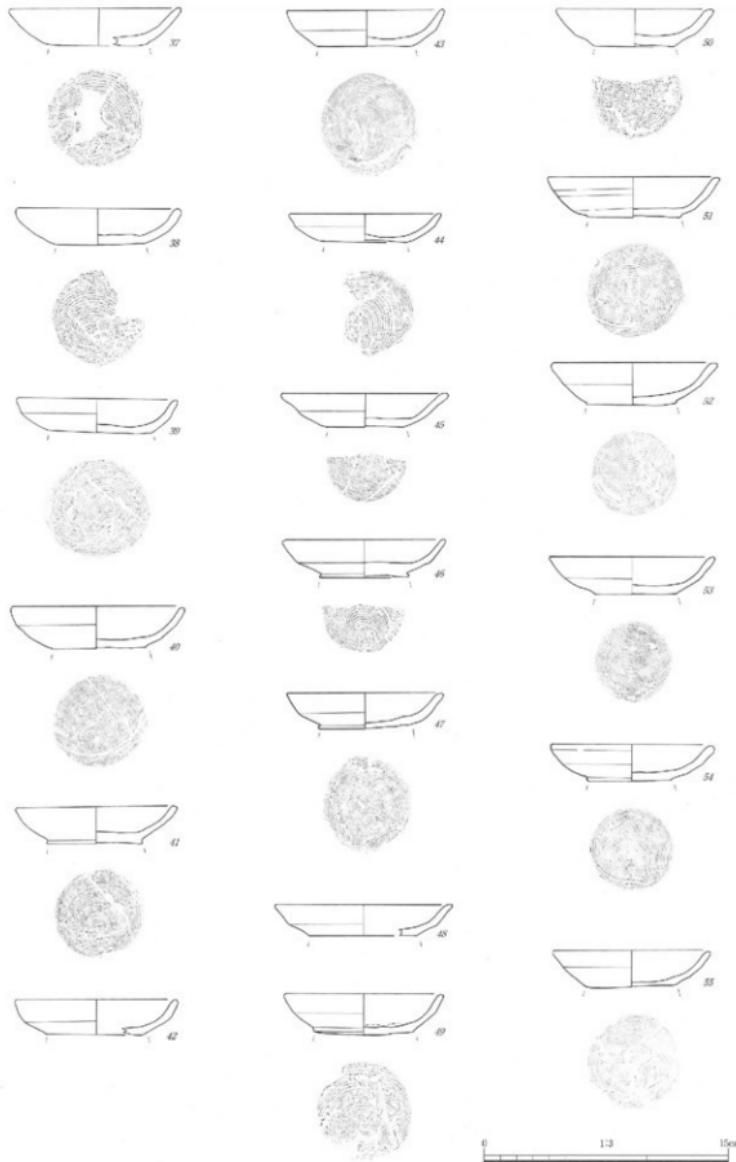


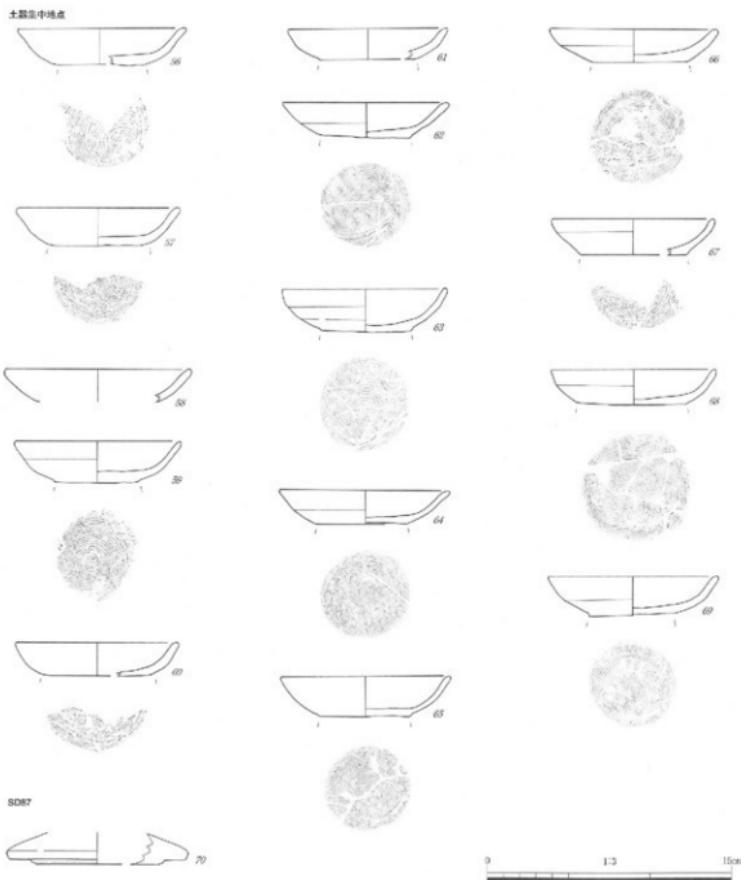
第178図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (1~3・6・9~17 1/3, 4・5・7・8・18~21 1/4)  
SB6 (1) SD4 (2~5) SD5 (6~8) SD6 (9~19・21) SD6・SE158 (20)



第179図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (22・23・25・27・31-33・35 1/3, 24・25・28-30・34・36 1/4)  
 SD110 (22-24) SD216 (25) SE40・SK12 (26) SE40 (27-30) SK27 (31)  
 SK47 (32・33) SK113 (34) SK134 (35) SK248 (36)

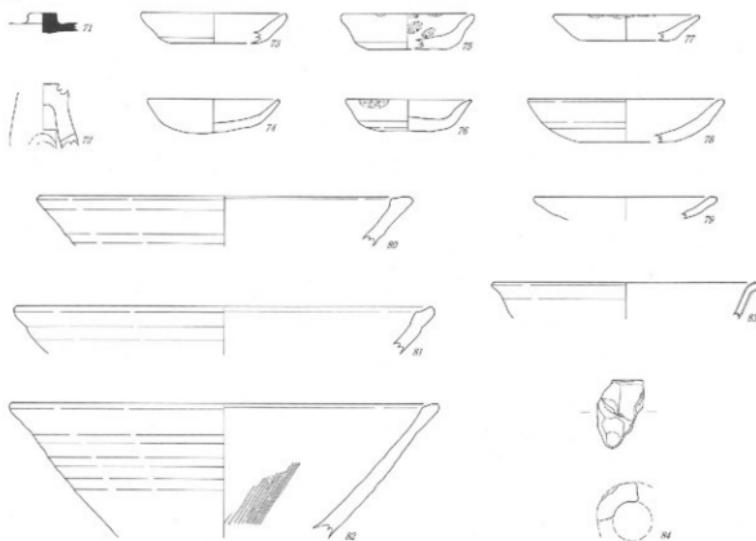
土器集中地点

第180図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (1/3)  
土器集中地点

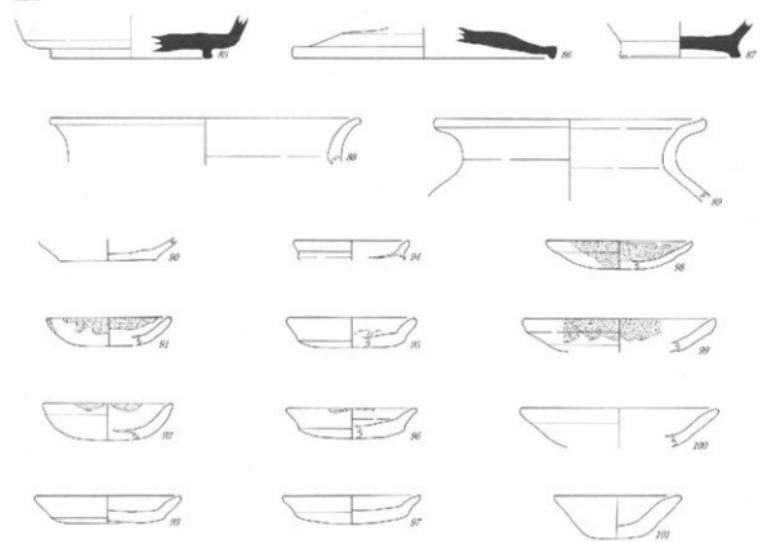


第181図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (1/3)  
土器集中地點 (56~69) SD87 (70)

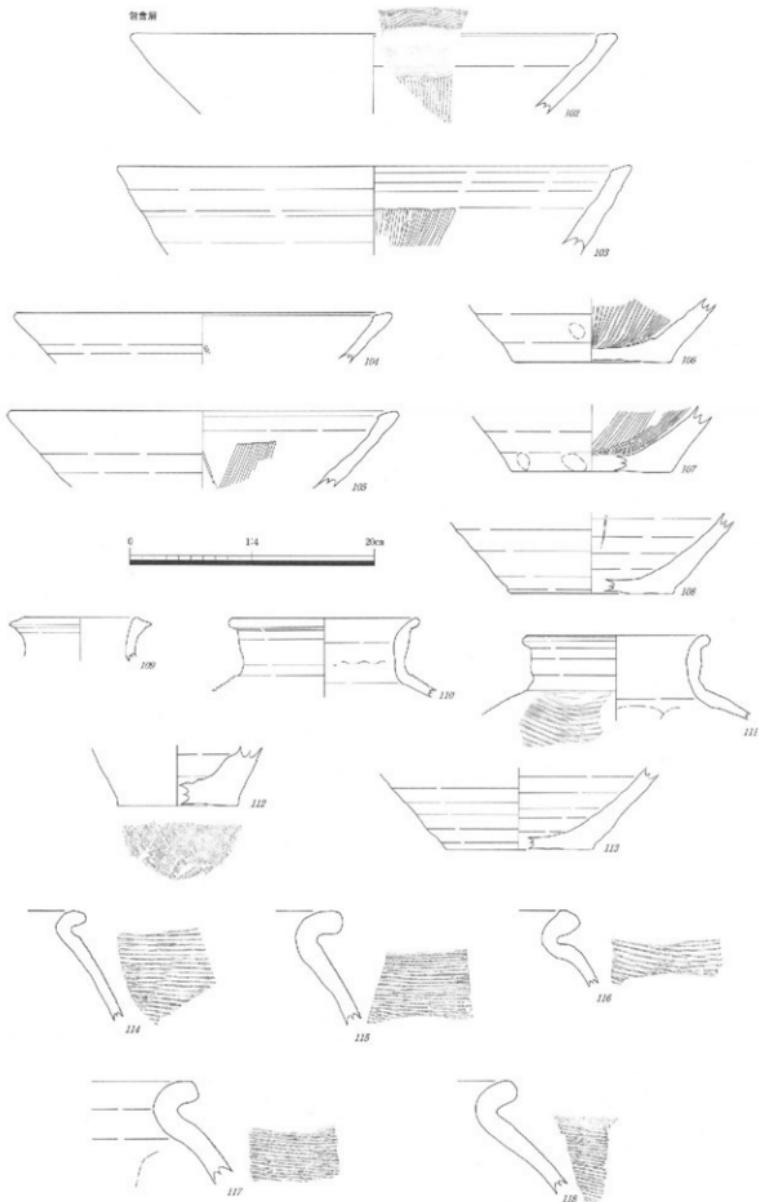
SD18



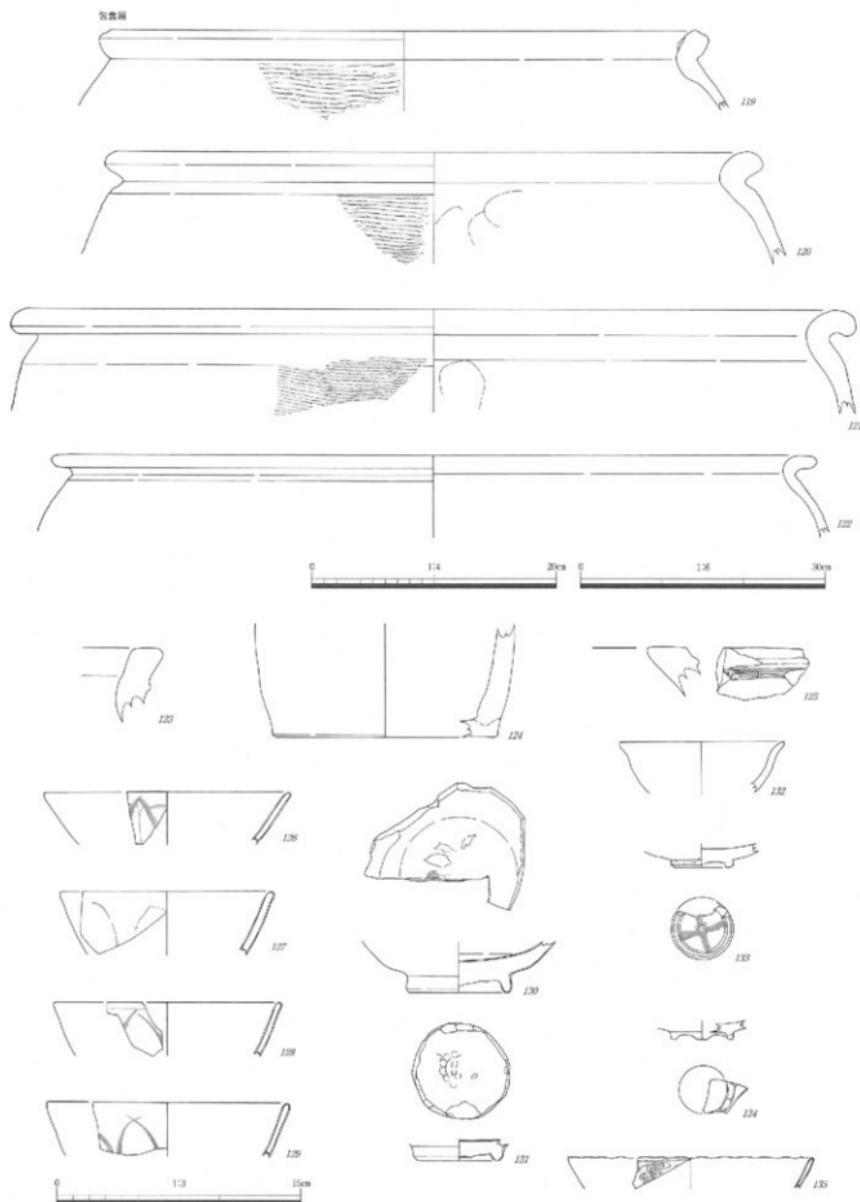
包含層



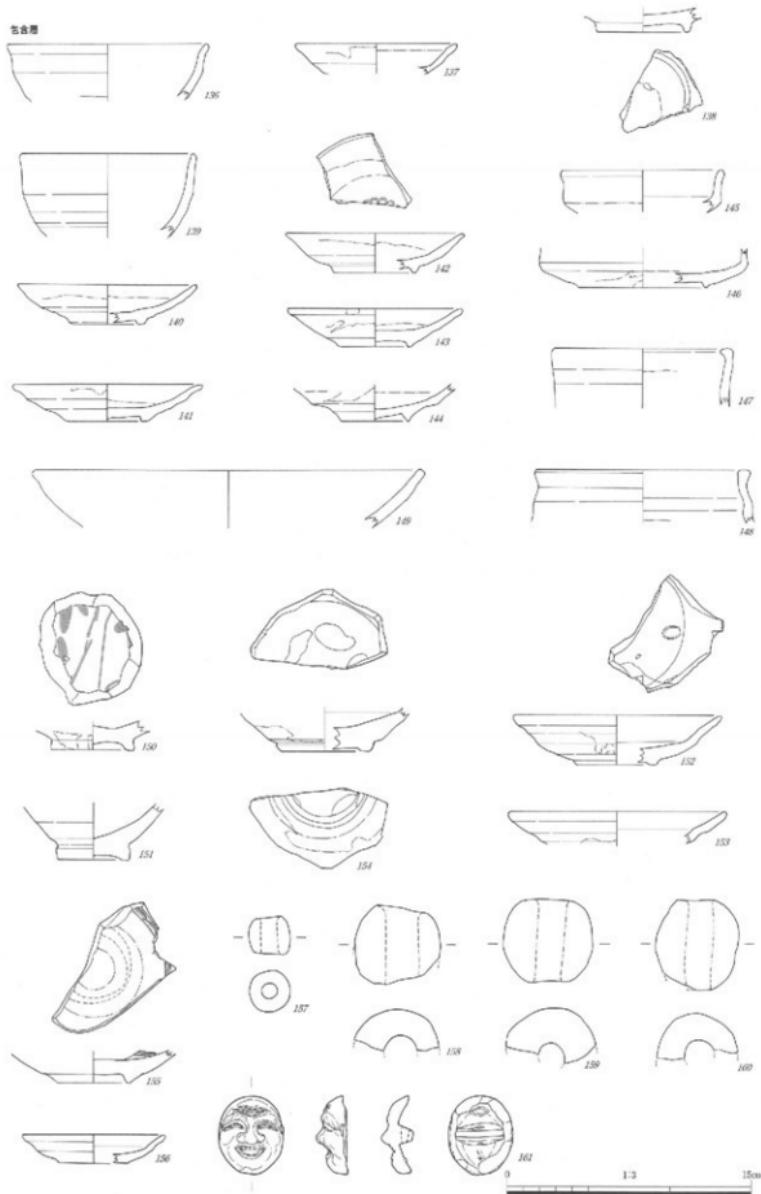
第182図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (71~79・83~101 1/3, 80~82 1/4)  
SD18 (71~84) 包含層 (85~101)



第183図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (1/4)  
包含層



第184図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (123~135 1/3, 119~121 1/4, 122 1/6)  
包含層



第185図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 土器・陶磁器 (1/3)  
包含層

## (2) 木製品

## 鉢 (第186図, 1, 図版114)

1は鉢身である。SK235から出土した。半梢円形を呈し、厚さは刃縁に向かって薄くなる。柄孔は台形で着柄角度は直角に近い。アカガシ亜属の材を使用している。

## 下駄 (第186図, 2, 図版114)

2は包含層から出土した。遺産下駄で隅九方形を呈する。長さ12.9cm, 幅8.6cm, 高さ3.7cmと小振りで、子供用とみられる。材はヒノキである。

## 曲物 (第186・187図, 3-13, 図版114-116)

曲物の材はヒノキが多く、9・12のみスギである。

3はSD6から出土した。直径16.6cmの小型品で、上端は焼け焦げている。側板は1枚板を2重に巻き付けて樺皮継じする。内面にケビキではなく、外面は綴じ部に沿って1本ケビキがある。打ち合わせは左前である。

4-8はSE41から出土した。4・6-8は上部を欠損している。4はSE41の最上部の井戸枠で、出土時は完形であったが、上部は焼けて炭化しており、保管中に上半分が腐朽してしまったものである。出土時は器高が約35cmで、帯は側板の高さを二分する幅のものを上下に巻き、上下とも打ち合わせは右前であった。側板と帯はそれぞれ一枚板を樺皮継じし、綴じ部は対称の位置にある。帯の綴じ部には曲線的に抉ったキメカキがある。内面ケビキは打ち合わせ部分のみで、外面ケビキは綴じ孔の列の端と中央に施される。側板は本綴じのみで、帯は小綴じも行われる。打ち合わせは側板、帯ともに右前である。底部には木釘が打たれている。5は側板の上に同様の幅の側板を巻いてそれぞれ樺皮継じし、上下の縁に帯を巻く。綴じ部分は3枚が交互に対称位置にくるよう巻かれているので、内側の側板と帯の綴じ部の位置が同じになっている。内側の側板の綴じ方は4段の本綴じのみで、外側の側板の方が段数が多く細かく綴じられている。側板には外面ケビキがあるが、帯はない。内面ケビキは側板にもない。キメカキはなく、打ち合わせは側板2枚と下帯が右前、上帯のみ左前である。底部には木釘がある。年輪年代の測定値は1296年以降とされている<sup>36</sup>。6・7は欠損のため詳細は不明であるが、内面ケビキは斜め方向で粗く、部分的である。6は、側板は欠損のため綴じ部の詳細は不明である。帯は斜めのキメカキがあり、綴じ方は上縁の内側に紐端を残して上へ向かって一段綴じ、下へ返して紐端の上を通って一列7段綴じする。8は側板の上に太い帯を巻き、さらにその上に細い帯を巻いてそれぞれ樺皮継じする。綴じ部は3枚が交互に対称位置にくるようになっている。外側の帯には斜めのキメカキがあるが、外面ケビキはない。側板の内面ケビキは斜め方向に雜に施され、間隔が広く部分的である。

9・10はSE158から出土した。9の側板は半周分の2枚の板を2箇所で右前に打ち合わせて一周とする。上辺は内面返し縫いをし、一列で綴じる。内面にはケビキがある。上下の帯は、曲線的なキメカキがあり、上帯の樺糸は一部しか残存していないが、上下帯とも2列日に折り返して留める「返し留め」を行っている。帯には外面ケビキがある。打ち合わせは右前である。10は側板に太めの帯を巻き付け、その上にさらに細い帯を巻く。側板は内面全面にケビキがあるが、内側の帯は綴じ部のみケビキがあり、外側の帯には全くない。側板の打ち合わせ部は、端が内・外側ともに削れて欠損しているため詳細は不明だが、残存部をみると、両方とも端は斜めに切られており、少し重なるだけで樺皮で綴じられてはいない。内側の帯の綴じ部は斜めのキメカキがあり、外面ケビキはない。綴じ方は2列綴じで、返し縫いの際に前列は外側で、後列は内側で2段外して巻き付けるようにする。外側の

注45 第二回 自然科學分析 先秦兩漢「3. 乎西野赤道遺跡・魯坪周出馬頭山出土木製品の年輪年代」

帶は桟皮綴じがあるが欠損のため詳細は不明である。

I1はS E 183から出土した。楕円形で、長径61.5cm、高さ23.6cmの大型品である。側板は1枚板を長径の中心部分で左前に打ち合わせる。内面ケビキは楕円の直線部分を除いて施され、一部には斜めのケビキを重ねている。側板の綴じ部は重なった内側の上縁に曲線的なキメカキがある。打ち合わせは約14cmの重なりがあるが、内側の端で一列に綴じ、外側の端の浮きは帯を上から巻くことによって押さえている。帯は内側の側板より約4cm低い。2枚の半周分の板を2箇所で左前に打ち合わせる。2箇所とも上下縁にキメカキがあるが、どちらも上縁のキメカキの方を丁寧な曲線に仕上げ、下縁は徐々に幅を減じる斜めのキメカキになっている。綴じ部は折り返して下半を2列綴じする。それぞれ約1cmの間隔を開けた2列の外面ケビキがある。底部には木釘が密に打ち込まれ、現状で35箇所確認できる。

I2はS E 28から出土した。側板は1枚板を1箇所で桟皮綴じする。内面全面にケビキがあり、一部は斜め方向のケビキを重ねる。綴じ孔に沿って、外側ケビキもある。帯は側板の高さを二分する幅のものを上下に2枚巻き、側板の綴じ部の反対側で桟皮綴じする。上下帯とも上縁・下縁に曲線的なキメカキがある。帯は打ち合わせ部にのみ、やや粗雑な内面ケビキがある。綴じ方は2列綴じで、下帯については、はじめは外に紐端を残して前列1段目から上へ向かい、キメカキの上から折り返して紐端の上を通り、数段分を外して下方を2段綴じた後、下から折り返して数段分はずし上2段を綴じる。上の帯は同様の綴じ方で、天地が逆になる。さらに、上方に3列目があるが折り返したものか不明である。底部には木釘が打たれている。

I3はS K 155から出土した。欠損のため詳細は不明だが、内面にはケビキがあり、一部は斜め方向のケビキも重ねられている。桟皮綴じの孔もあるが、綴じ方の詳細は不明。

#### 円形板（第188図、I4～I8、図版117）

I4はS D 4から出土した。画面に漆が塗られ、一方の面には線状痕が多く残る。I5はS D 6出土で、側面から目釘が打ち込まれておらず、曲物の底板と考えられる。両面が焼け焦げている。I6はS D 156、I7はS E 28、I8はS E 40出土である。直径はI5が約24cm、I6が約40cm、I8が約20cmに復原される。材はI4・I7がヒノキ、I5がヒノキ属、I6はスギ、I8はサワラである。I8は放射性炭素年代の測定値が12世紀末～13世紀中頃である<sup>119</sup>。

#### 漆器（第188・189図、I9～29、図版117～120）

漆器の材はほとんどがブナで、I2はモクレン属、I4はトチノキである。木取りはすべてヨコ木（樫目）取りである。漆の下地は、I9・20・22・23・24・25・27・28・29について塗膜分析及び赤外分光分析を行った結果、炭粉渋下地であった。また20・22～24・28・29の赤色漆絵について、蛍光X線による顔料分析を行った結果、朱（硫化水銀）と認められた<sup>120</sup>。

I9～26は椀である。I9はS E 158から出土した。口径に対して器高が低く、半球状に開く。総黒色系漆だが、内外面の剥離が著しい。外面には赤色漆（未同定）の一部がわずかに残っている。I20はS D 6から出土した。体部は斜め上方に緩やかに開く形態で、高台はやや厚手のものとみられるが、高台裏は剥離している。内面に朱漆で濃淡をつけた花弁状の絵付けがある。外面にも赤色漆絵があるが意匠は不明。I21はS E 28から出土した。内外面黒色漆（未同定）で、内面に赤色漆（未同定）の絵付けがあるが意匠は不明。I22はS D 110から出土した。体部は斜め上方に開き、低い高台が付く。総黒色系漆で、内面には濃淡をつけた朱漆で、矢羽根状の文様が墨割で描かれる。高台裏の線刻はロクロの爪痕か。I23はS D 4から出土した。体部は斜め上方に大きく開き、高台はやや高く裏は角底である。

<sup>119</sup> 第二企画「自然科學分析 桐生文化財保護研究会」、放射性炭素年代測定 I、手洗野赤浦遺跡、世界遺産登録候補出土物の放射性炭素年代測定

<sup>120</sup> 第二企画「自然科學分析 桐生文化財保護研究会」、手洗野赤浦遺跡、世界遺産登録候補出土物の科学分析

総黒色系漆で、内面の朱漆による絵付けは22に似る。22・23は14世紀末～15世紀前半のものである。24はS K47から出土した。口径に対して器高が低く、半球状に開く。高台断面は逆三角形を呈する。全体に器壁は厚い。総黒色系漆で、内面には朱漆で松葉意匠の輪線と鶴らしき鳥が2羽描かれる。外面にも4箇所に漆絵の痕跡がある。高台裏の線刻はロクロの爪痕か。14世紀のもの。25はS E40から出土した。体部はやや斜めに開き気味に球状に立ち上がり、やや厚手の高台が付く。総黒色系漆だが外面の塗膜は剥離しており、内面には扇文等が描かれる。16世紀のものか。26はS D110から出土した。内外面黒色漆（未定）で、内面に赤色漆（未定）の絵付けがあるが意匠は不明。

27・28は皿である。27はS E40から出土した。やや高めの高台から、体部は斜め上方に立ち上がる。総黒色系漆で、内面には松葉繁ぎ文が描かれる。15世紀のものである。28はS D216から出土した。28は口縁は直立気味に立ち上がり、低い高台が付く。総黒色系漆で、内面には朱漆で輪線と4つの円形輪彫文が描かれる。16世紀のものである。

29は有段皿で、文献上では様子とよばれる器形である。S D216から出土した。体部は内湾気味に斜め上方に開き、内面の見込み縁辺に段をもつ。高台断面は角ばる。内面赤色外面黒色系漆である。済下地ではあるが、内面には朱漆を塗り、高台裏の塗膜もしっかりとしており、外見上は上質のものである。14世紀末～15世紀前半のものである。

#### 折敷（第189図、30～32、図版121）

30～32は折敷の底板である。すべてS E183から出土しているが、別個体である。方形であるが辺はやや丸みをもち、4隅を切り落として丸く仕上げる。一边は27～29cm、厚さは0.4～0.6cmである。両面に線状痕が多くみられ、まな板に転用された可能性がある。30は三方に側板の圧痕があり、4箇所に側板と結合するための樺皮が残る。年輪年代の測定結果は1306年以降伐採である<sup>351</sup>。31は樺皮縫の孔が一边に2箇所みられ、割れ口に残る孔も同様の孔とみられる。32も樺皮縫の孔が一边に2箇所みられ、点状の焼け焦げが表面に1箇所、裏面に3箇所ある。年輪年代の測定は辺材部がないため測定不能であった。31・32はヒノキ材を使用している。

#### 匙（第189図、33、図版120）

33はS E28から出土した。柄部を欠損しているが、イヌエンジュ、サイカチ等のマメ科の材を削り抜いて一本から作られたものである。梢円形を呈し、断面が弧状になるよう中央を浅く抉り、縁辺は削ってやや薄くしている。

#### 柱（第190～194図、34～52・54～56、図版122～126）

柱の材は34はサイカチ、35・39～43・45・47・49・52・54～56はクリ、36はウメかモモ、37はオニグルミ、38はカバノキ属、44はイタヤカエデ、46はハンノキ、48はヌルデ、50はリョウブで、10m以上になる落葉高木が大半を占める。

34・35はS B 5の柱である。断面形は、34は長径17.4cmの梢円形、35は直径16.9cmの不整円形を呈し、太い。34は一部に表皮が残る。下端を側面から中央に向かって削り尖らせている。36・37はS B 6になる可能性のある柱穴の柱だが、S B 6の柱の並びからややずれるので検討を要する。断面形は円形で、直径は36が8.2cm、37が9.8cmとやや細い。36は一部に表皮が残る。36・37とも下端を側面から削り尖らせるが、36は斜めに削り先端は鋸くなっている。放射性炭素年代は36が15世紀、37が15世紀中頃～17世紀前半と測定されている<sup>352</sup>。38・39はS B 8の柱である。断面形は、38は直径12.8cmの不整形、39は直径15.7cmの円形を呈する。下端を水平に削っており、39は芯が欠損して中空になっている。39は下端が焼けて焦げており、腐食を防いだものと考えられる。放射性炭素年代は38が13世紀

351 第二分冊 自然科學分析 天然物記録整理・岩井田出典遺物等七本査定の年輪年代

352 第二分冊 自然科學分析 木式合伝記録物研究会「瓦、放射性炭素年代測定」、天井野赤道遺跡・吉井岡山遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定

末～15世紀初頭、39が15世紀前半と測定されている。40～42はS B 11の柱である。材はすべてクリである。40・41は下端の加工面は斜めになっている。42は中空になっており、下端は焦げている。断面形は円形で、40は直径10.6cm、41は10.9cm、42は8.6cmと、太さはほぼ揃っている。43はS P 23の柱である。断面は円形で直径は17.1cmとやや太い。44はS B 12の柱である。下端は側面から中央へ向かって削り尖らせる。断面は円形で直径は17.4cmと太く、残存長は当遺跡の柱根で最も長く、95.0cmを測る。45～47はS B 10の柱である。45・46はともにS P 258から出土したが、立った状態で出土したのは45である。45は下方に方形の孔をもつ。孔を穿った面は、片方は面全体を平坦に、もう一方は孔附近をやや斜めに削っている。材を組み合わせるために孔と考えられるが、具体的な使用形態は不明である。下端は削って尖らせている。径は22.6cmと太く、残存長は66.0cmである。46は断面は円形、下端はほぼ水平に削る。直径は7.7cmである。47は断面は円形、下端は削って尖らせる。直径は12.2cmである。48はS A 1の柱で、断面は不定形、下端はやや斜めに削る。径は25cmと太い。49～52・54～56は建物・構と認められる柱穴以外から出土したものである。材はクリが多い。49・50は断面は格円形、下端は斜めに鋭く削る。49は一部が炭化している。51は断面は方形に近いがやや不整形、下端はやや斜めに削る。52は断面は円形、下端は細かく削り丸く仕上げる。54はS E 40出土で、断面は円形、下端を丸く削る。55は断面やや不整な円形で、径は22.0cmと太い。56は両端に加工がある。片方は斜めに削って尖らせ、もう一方は丸く削る。

#### 杭 (第194図、53、図版126)

53はS D 216出土で、下端は鋭く削られている。材はアカマツである。

#### 呪符木簡 (第195図、57、図版127)

57は呪符木簡である。S E 158の掘形から出土した。上端は欠損しており、残存長は16.3cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmである。下端は尖らせており、突き刺して使用したものであろうか。片面に墨書きがみられ、上部は欠損のため不明であるが、判読不能の梵字の下に左側に「眞」、右側に「眞カ」を配し、梵字3文字で「鬼」をとり囲み押さえる意図が見受けられる。以下は「門」、十文字、「急々如律令」で、十文字内の四方に配された文字は「日」とみられる<sup>553</sup>。ウルシ科の材を加工している。

#### 用途不明品 (第195図、58～67、図版127・128)

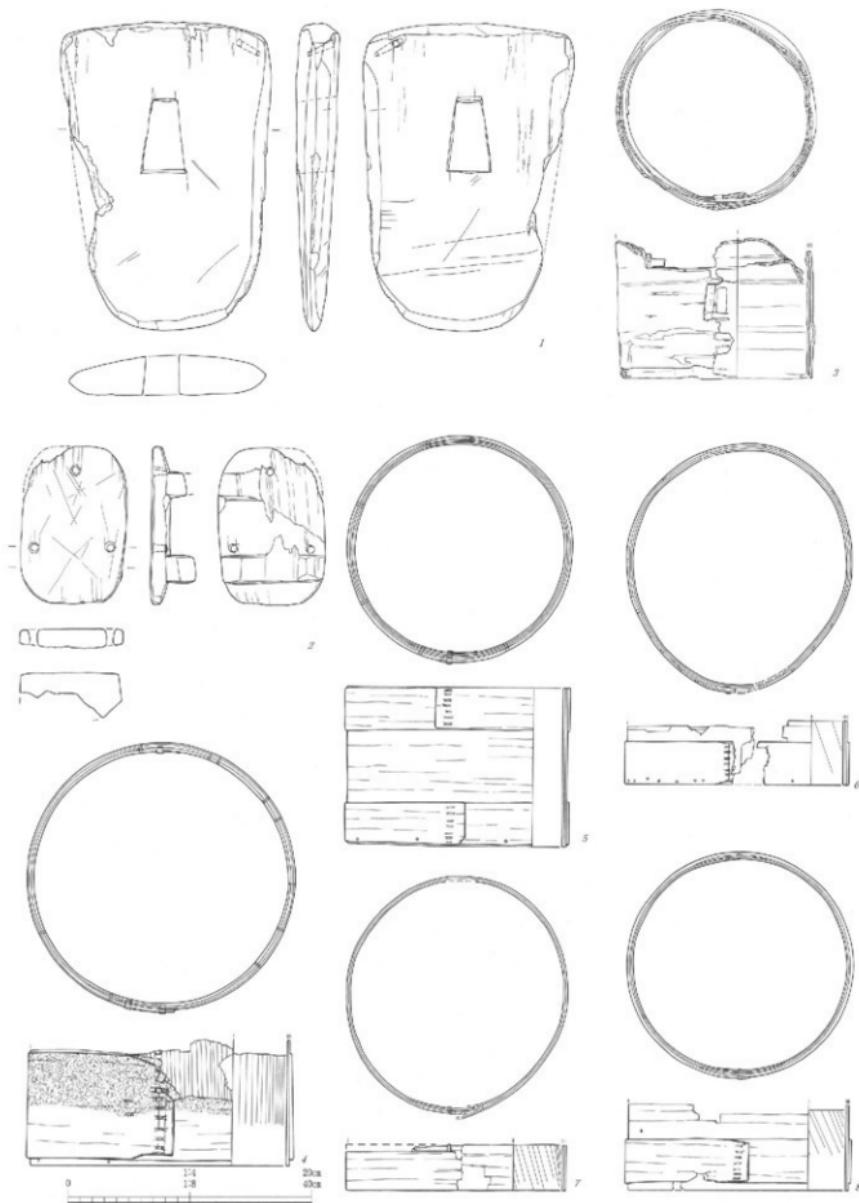
58～64は板状の加工木で、用途は不明である。58・59・61はS D 6から出土した。58は台形に切り抜いた板の底辺側を弧状に抉り、さらに中央に切り込みを入れたものである。切り込みに沿って圧痕があり、何か別の部材と組み合わせて使用したものとみられる。材はヒノキである。59は円形版を転用したもので、一方は円形版の縁を残し、左右に羽子板状の抉りを入れて切り抜いている。材はヒノキである。60・61は直方体の一部を削り取ったもので、何かの部材であろうか。60・62はS D 4から出土した。60はヒノキ属である。62は2箇所に孔があり、一方の面は炭化しており線状痕が多くみられる。材はヒノキである。63はS E 40から出土した。円形を呈し、孔が2箇所穿たれる。部分的に焼け焦げがある。材はサワラである。64はS E 183から出土した板で、井戸枠の一部に使用されていたものであろうか。材はスギである。65は断面が0.6cm×0.4cmの長方形を呈する細い棒状の加工木で、2箇所に孔がみられる。材はスギである。66は1対の孔があり、折敷の一部とも考えられる。材はヒノキである。

67はS E 183から出土した。樹皮を残した棒状の加工木で、一方にはぞ状の突起部を削り出している。部材として使用されたものであろうか。材はサクラ属である。放射性炭素年代は14世紀末～15世紀前半の確率が高くなっている<sup>554</sup>。

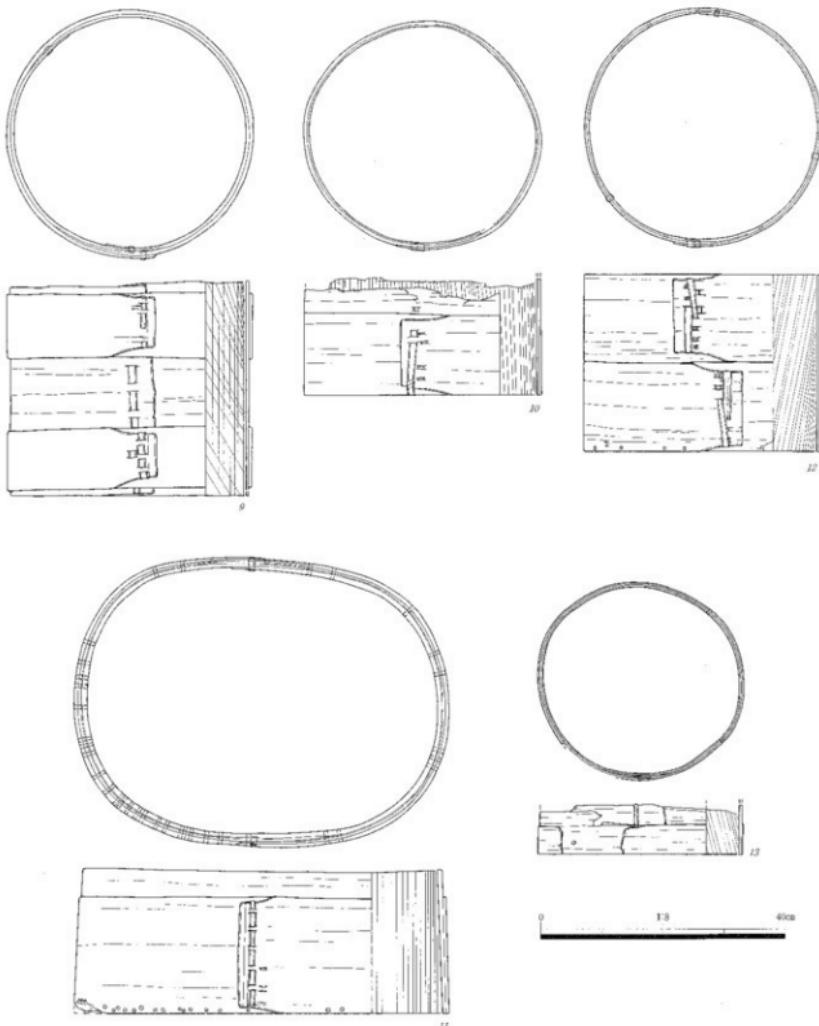
(越前慎子)

<sup>553</sup> 歴史は木簡研究にご参考お願い。

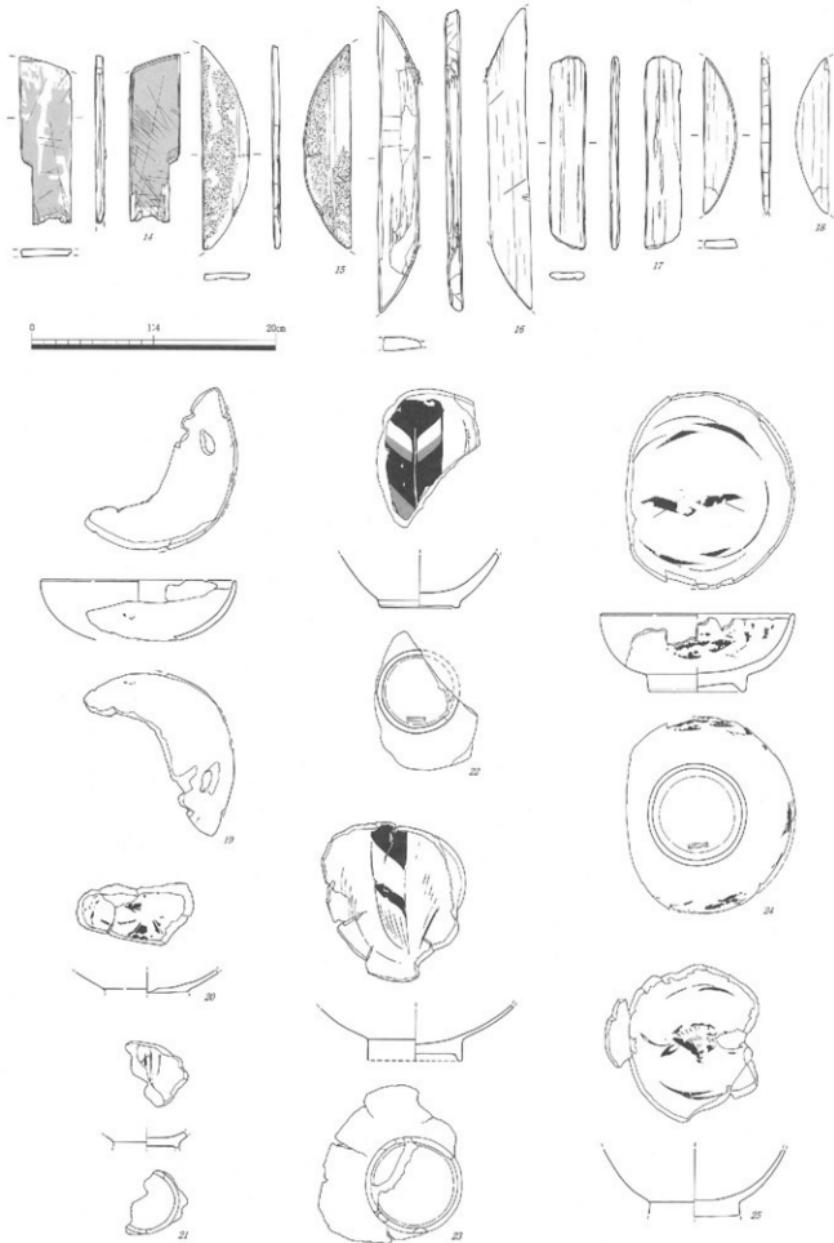
<sup>554</sup> 第二回目 自然科学分析 施設会社放射性分析研究室 Ⅳ. 放射性炭素年代测定 1. 手洗野赤浦遺跡・呪符木簡等の遺物の放射性炭素年代测定



第186図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1~3 1/4, 4~8 1/8)  
SD6 (3) SE41 (4~8) SK235 (1) 包含層 (2)

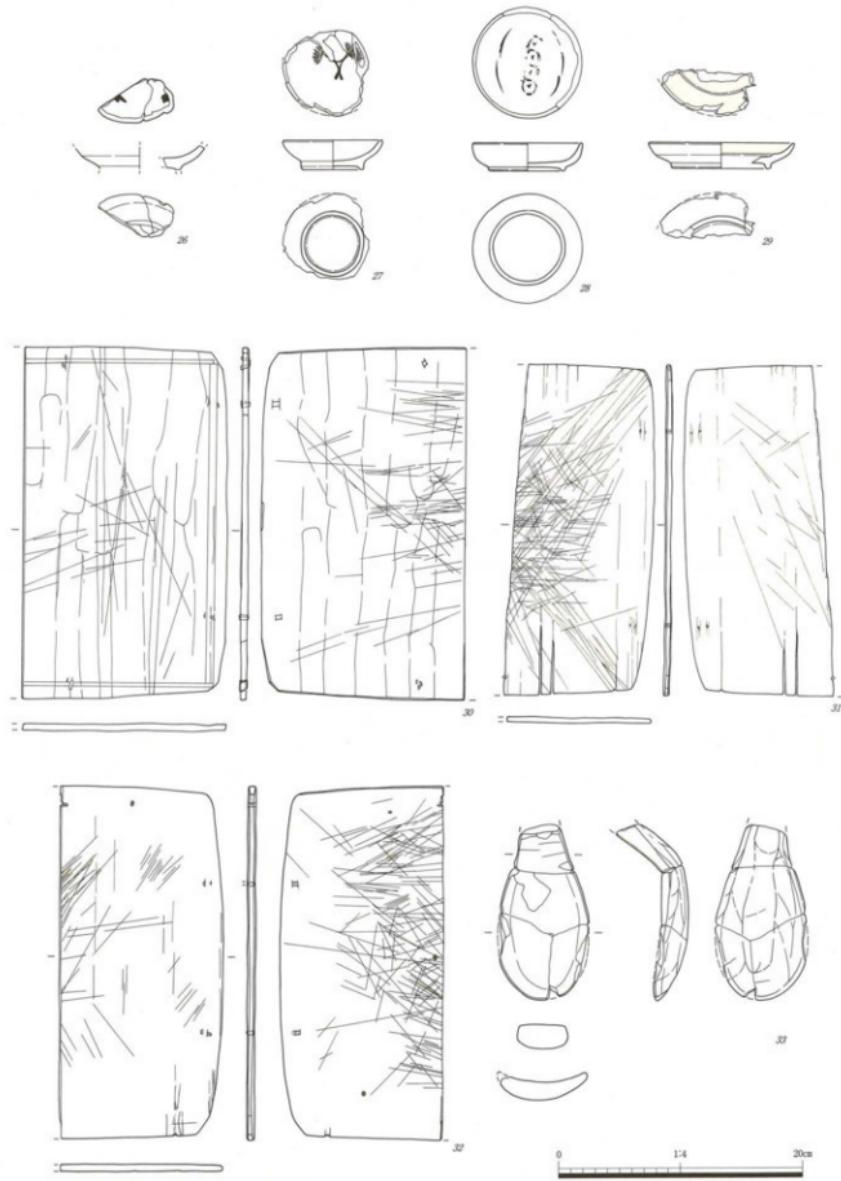


第187図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1/8)  
SE28 (12) SE158 (9・10) SE183 (11) SK155 (13)

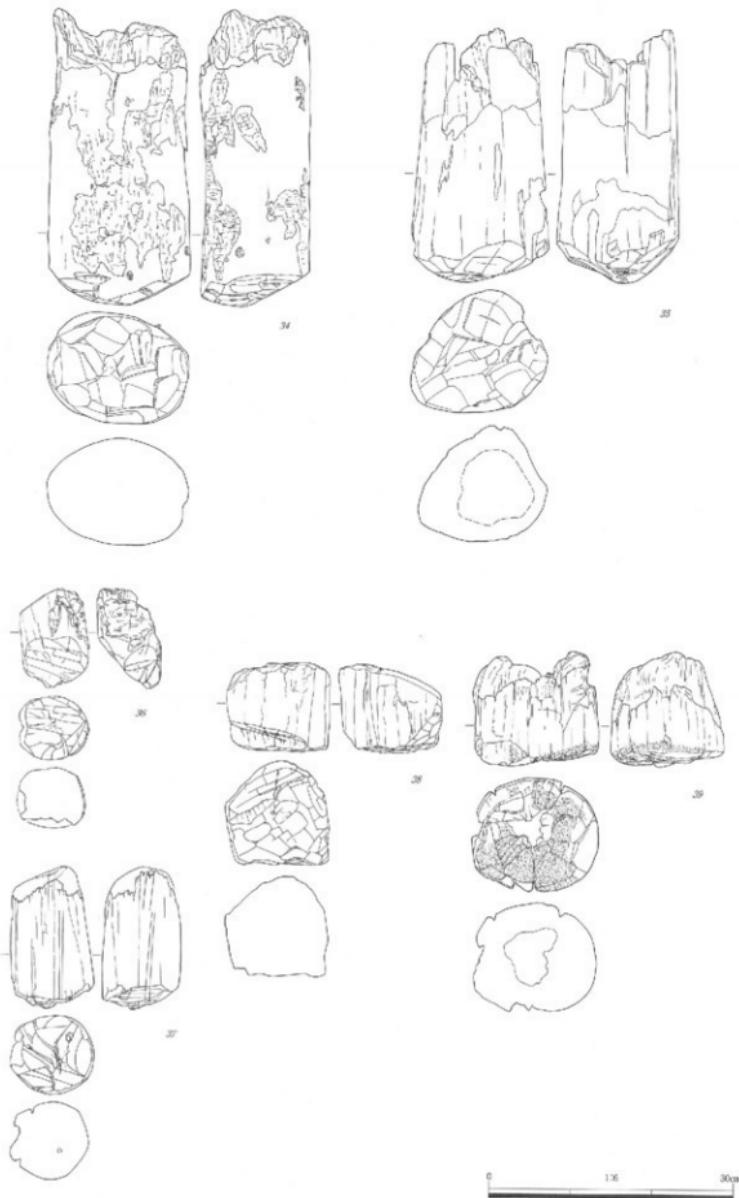


第188図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1/4)

SD4 (14・23) SD6 (15・20) SD110 (22) SD156 (16) SE28 (17・21)  
SE40 (18・25) SE158 (19) SK47 (24)



第189図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1/4)  
SD110 (26) SD216 (28・29) SE28 (33) SE40 (27) SE183 (30~32)



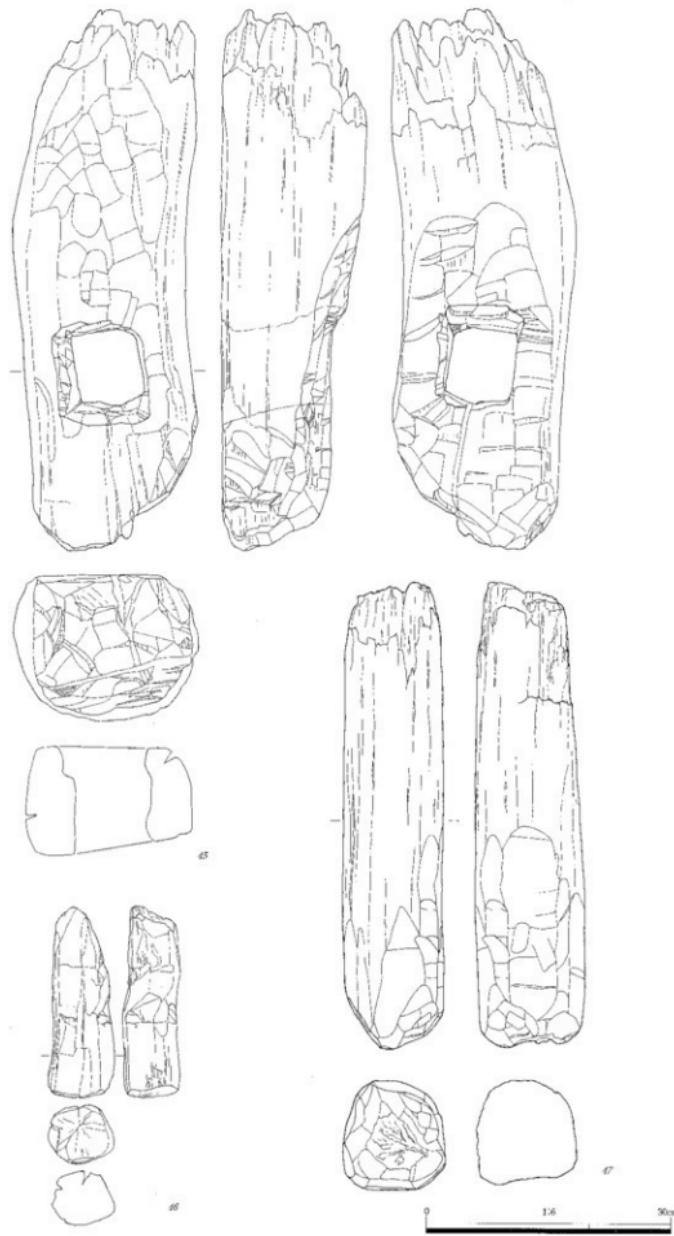
第190図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1/6)

SB5 SP280 (34) SP281 (35) SB6 SP225 (37) SP253 (36) SB8 SP238 (39)  
SP257 (38)



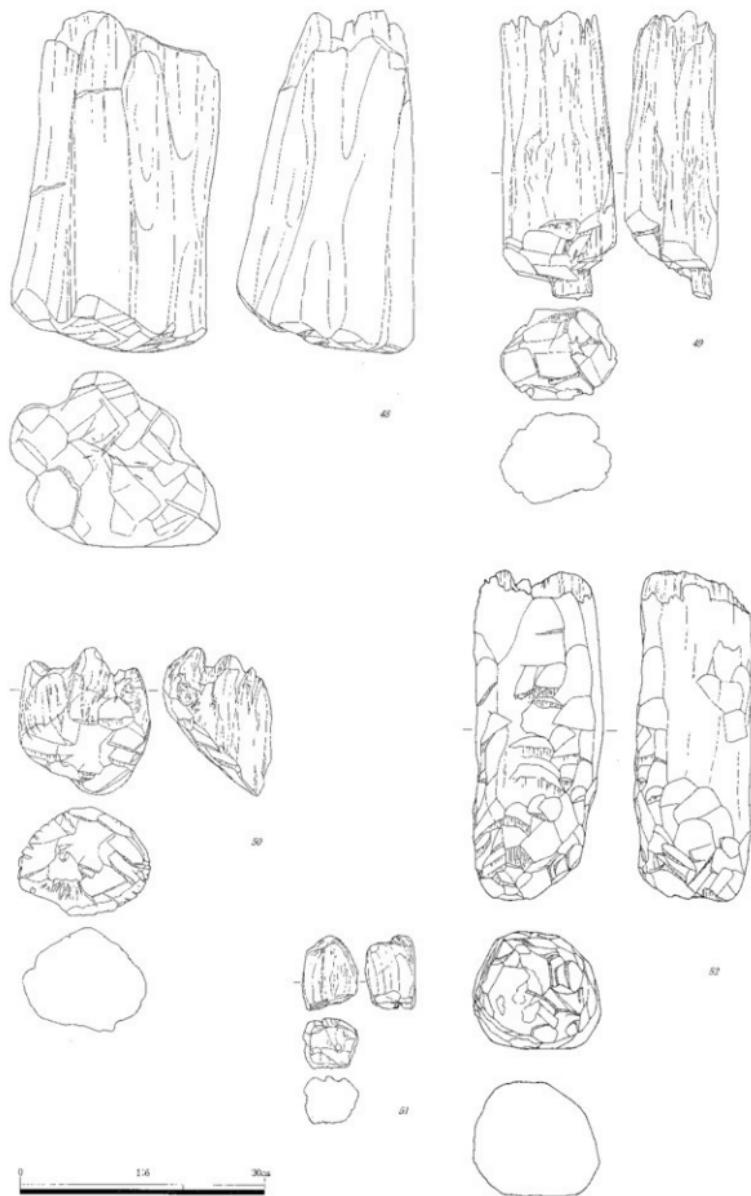
第191図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1/6)

SB11 SP21 (40) SP29 (42) SP105 (41) SB12 SP20 (44) SP23 (43)



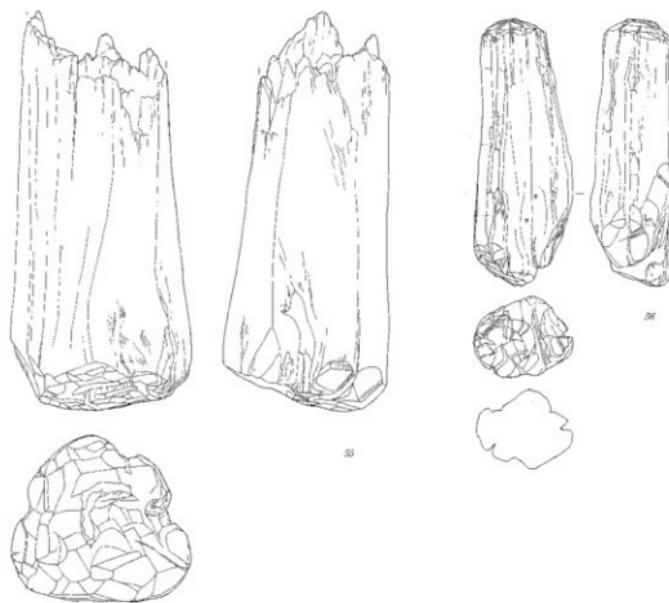
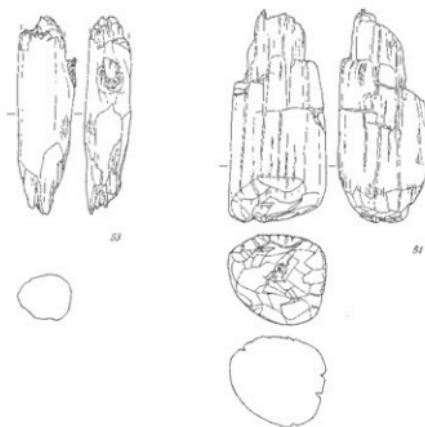
第192図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1/6)

SB10 SP239 (47) SP258 (45・46)



第193図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1/6)

SA1 SP132 (48) SP51 (49) SP65 (50) SP205 (51) SP285 (52)



0 1.6 30mm

第194図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (1/6)  
SD216 (53) SE40 (54) SK135 (55) SK235 (56)



第195図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 木製品 (57 1/2, 58~67 1/4)  
SD4 (60・62) SD6 (58・59・61) SE40 (63) SE158 (57) SE183 (64~67)

## (3) 石製品

## 五輪塔 (第197図, 1, 図版129)

1は火輪である。S D 6から出土した。凝灰岩で、台座部分の窪みにはノミの加工痕が残る。下面は13.7cm×13.7cm, 高さは8.5cmである。

## 石鉢 (第197図, 2, 図版129)

2は底部片である。包含層から出土した。砂岩製で、成形加工の際の削り痕が残る。

## 砥石 (第197図, 3~7, 図版129)

3~5はS D 18から出土した。3は凝灰岩製で、中砥に使用されたものである。砥面が平滑で置き砥の断片と考えられる。4は鳴滝産の頁岩製で、両側辺に生産地での鋸引きによる加工痕がある。仕上げ砥に使用されたもので、完形である。5は凝灰岩製で、手持ち砥石に転用されている。完形で、仕上げ砥として使用されたものか。6はS E 41から出土した。砂岩製で、手持ち砥石に転用されている。中砥用として使用されたもので、完形である。7はS D 6から出土した。砂岩製で、荒砥に使用されたものか。下端部の小口面に加工痕があるが、生産地のものか消費地のものか不明である。表裏に砥面があるが、砥面は波打っている。

## (4) 金属製品

## 銭貨 (第198図, 1~8, 図版130)

S D 18から出土した6以外は、包含層から出土した。1は景德元寶である。北宋銭で、初鑄は1004年(景德元)である。2は祥符元寶である。北宋銭で、初鑄は1009年であるが、本邦でも中世に模録される。3は天禧通寶である。北宋銭で、初鑄は1017年(天禧元)である。4は天聖元寶である。北宋銭で、初鑄は1023年(天聖元)である。字体は真書である。5・6は熙寧元寶である。北宋銭で、初鑄は1068年(熙寧元)である。字体は5は篆書、6は真書である。7は下の錢文が欠けているが、政和通寶と考えられる。北宋銭で、初鑄は1111年(政和元)であり、本邦でも中世に模録される。7は円孔であるため模録と考えられる。字体は篆書である。8は皇宋通寶である。北宋銭で、初鑄は1038年(寶元元)であるが、本邦でも1340年頃模録される。字体は篆書である。

## 煙管 (第198図, 9, 図版130)

9は吸口である。表土から出土した。長さ8.6cm, 直径0.9cmである。羅字部の竹が残存している。

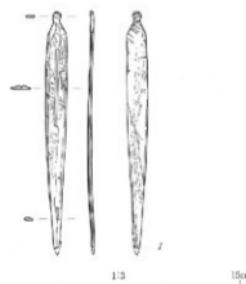
## 棒状製品 (第198図, 10, 図版130)

10は棒状の鉄製品で用途は不明。包含層から出土した。S字状に屈曲し、断面は長方形を呈する。

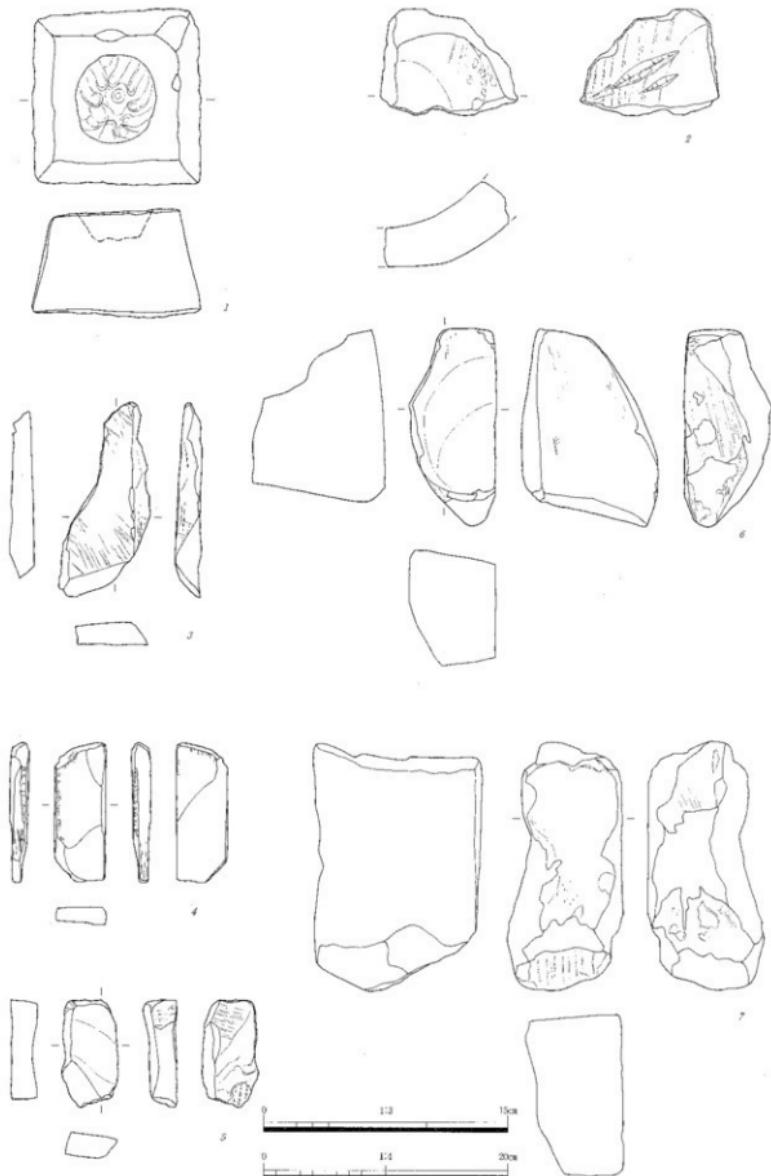
## (5) 骨角製品 (第196図, 1, 図版130)

1は骨角製の笄である。SK 12から出土した。先端を欠損しているが、残存長は14.5cm, 幅1.3cm, 厚さ0.2cmである。薄板状にした鹿骨を削り出し、全面を研磨している。片面に溝状の窪みをもち、端部を削り出して耳搔を作り出している。

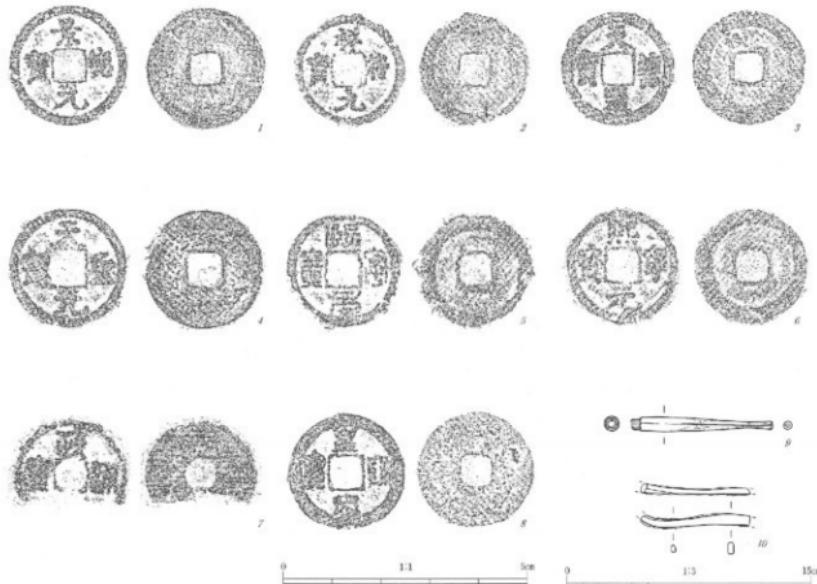
(越前横子)



第196図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 (1/3) 骨角製品  
SK12 (1)



第197図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 石製品 (2~7 1/3, 1 1/4)  
SD6 (1・7) SD18 (3~5) SE41 (6) 包含層 (2)



第198図 手洗野赤浦遺跡 遺物実測図 金属製品 (1~8 1/1, 9~10 1/3)  
SD18 (6) 包含層 (1~5, 7~10)

第26表 手洗野赤浦遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(1)

編目	遺物 写真 名承	蓋様	底土地	粗細	骨様	底面(cm)		持 種	持土色調	歯土の特徴	輪色調	形態	備考
						口径	基高						
18	I 109 SD29 S260	中等土輪器	Ⅲ	11.9	2.6			25V6/2	灰褐色				丸穴付二部成分分析
J 110 SD4	X3AY140	中國古鏡	鏡		5.5	13厚化半平	SD7/0	灰白色	黑色點	73V5/2	灰オーラー色	青磁胎	複数底孔上凹印1→折縫 純白
J 110 SD4	X3GY26	中國古鏡	鏡		6.2	14-15世紀	SD8/0	灰白色		25G75/2	灰白色	青磁胎	複数底孔上凹印1→折縫 純白
J 110 SD4	X4YY6	鏡底	鏡底		16.0			36V9/2	灰色				同上1cm余
J 110 SD4	X3YT28	鏡底	鏡底			V-柱脚		35V9/0	灰色				
6	S25	X4BY28	中等土輪器	Ⅲ	7.3	2.6		18V95/2	灰黃色	赤色點-白色點-青白-青白			
J 108 SD5	X4BY26	鏡底	鏡			V型		35V9/0	灰色				
J 108 SD5	X4GY26	鏡底	鏡底	3.0		V型		35V9/0	灰色	白色點-青白-青白-青白			同上1cm余
J 109 SD6	X4GY26	鏡底	鏡底	6.8	2.3			18V97/2	灰褐色	青白			
J 110 SD6	X3GY26	中等土輪器	Ⅲ	8.8	3.1			18V97/2	灰褐色	多色斑			灰黑色斑-青白成分分析
J 110 SD6	X3GY26	中等土輪器	Ⅲ	14.8		15厚化半-15厚化半	18V97/1	灰白色		25G77/1	青オーラー色	青磁胎	複数底孔上凹印1→折縫 純白
J 110 SD6	X3GY26	中等土輪器	Ⅲ		2.8	14厚化半-15厚化半	35V9/0	灰白色		25G77/1	青オーラー色	青磁胎	複数底孔上凹印1→折縫 純白
J 110 SD6	X4BY23	中等土輪器	鏡		5.2	15厚化半-15厚化半	35V9/0	灰白色		SG77/1	青オーラー色	青磁胎	複数底孔上凹印1→折縫 純白
J 110 SD6	X4GY26	中等土輪器	鏡	9.0		14厚化半-15厚化半	25G78/1	灰白色		25T78/1	灰白色	白磁胎	複数底孔上凹印1→折縫 純白
J 110 SD6	X4GY26	中等土輪器	鏡	4.4	14厚化半-15厚化半	25V78/1	灰白色		10V78/2	灰白色	白磁胎	複数底孔上凹印1→折縫 純白	

第26表 手洗野赤浦遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(2)

第26表 手洗野赤浦遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(3)

件番	器物 分類	遺物 名	出土地点	種別	容積 (cm)	性質 口開 底扁 直底	時期	出土色調	胎土の性質	釉色調	施釉	備考	
681	67	106	上野中	中手土器類	王	10.2	2.5	8.5	JST87.6	灰青系	赤色粒		
685	68	106	上野中	中手土器類	王	10.9	2.0	5.8	JST87.6	青色	赤色粒・青粒		
687	69	106	上野中	玉手Y25	中手土器類	王	9.6	2.2	6.4	JST87.6	青黄褐色	赤色粒・青粒	
689	70	107	玉手中	中手土器類	王	10.0	2.2	6.1	JST87.6	褐色	赤色粒・青粒		
690	70	107	玉手中	中手土器類	王	10.4	2.4	5.2	JST87.6	褐色	赤色粒・青粒		
709	70	SD108	玉手下	蓋	10.6	6.0	中首尾一反毛	SD108.2	灰黑色	黑色			
682	71	SD108	X25Y24 佐原	豆皿				A-9復元		灰白色			
722	72	SD108	X40Y27 佐原	土器	底(内)					褐色化	赤色粒		
723	73	SD108	X25Y27 佐原	中手土器類	王	8.8	1.8		JST7.7	淡黄色	赤色粒・青粒		
74	74	SD108	X30Y27 佐原	中手土器類	王	7.9	2.1		JST8.7	淡黄色	赤色粒	手造或分段制作	
75	75	SD108	X32Y27 佐原	中手土器類	王	8.0	2.2		JST7.7	灰白色	赤色粒		
76	76	SD108	X24Y17 佐原	中手土器類	王	7.5	1.9		JST8.7	灰白色	赤色粒	打芯油灰	
77	77	SD108	X30Y25 佐原	中手土器類	王	4.8	1.6		JST10.7	灰白色	赤色粒	打芯油灰	
78	78	SD108	X30Y28 佐原	中手土器類	王	11.8	2.6		JST9.5	浅青褐色	赤色粒		
79	79	SD108	X30Y25 佐原	中手土器類	王	10.8			JST87.6	青褐色	赤色粒・青粒		
80	80	SD108	X30Y25 佐原	未定	盖体	30.9		V面	JST8.7	灰白色	青粒		
81	81	SD108	X30Y26 佐原	未定	盖体	34.0		V面	JST87.4	灰白色	赤色粒・青粒		
82	82	SD108	X20Y20 佐原	未定	盖体	33.3		V面	JST8.9	灰白色	青粒	約250㎤m <sup>2</sup> 高	
83	83	SD108	X22Y25 佐原	中手土器類	王	16.4		上部端縫-上側縫合	JST7.7	灰白色		JST87.6-1 オリーブ灰色 青褐色 青釉系人字彫り上切口下斜	
84	84	SD108	X30Y17 佐原	土器類	土器	42.7	2.0		JST87.6	灰白色	赤色粒	素面11kg	
85	85	X30Y15 Ⅱ層	灰土器	灰土器		9.8	0.8		JST7.9	灰白色	白色粒・青粒		
86	86	X30Y20 Ⅰ層	灰土器	灰土器		16.1	0.8		JST10.5	灰白色			
87	87	X30Y20 Ⅰ層	灰土器	灰土器		7.4	0.8		JST8.0	灰白色			
88	88	X30Y20 Ⅲ層	土器	土器		20.0			JST87.6	褐色	赤色粒・青粒		
89	89	X27Y14 Ⅲ層	土器	土器		16.6			JST87.6	褐色	赤色粒・青粒		
90	90	A30Y20 1層	中手土器類	土器		5.8			JST87.6	褐色			
91	91	A30Y19 1層	中手土器類	土器		7.5	1.7		JST87.6	灰白色		打芯油灰	
92	92	X20Y30 Ⅱ層	中手土器類	土器		7.8	2.2		JST7.7	灰白色		打芯油灰	
93	93	X40Y41 Ⅱ層	中手土器類	土器		8.7	1.7		JST87.7	灰白色	白色粒・青粒		
94	94	X30Y43 Ⅱ層	中手土器類	土器		7.0			JST87.7	灰白色	白色粒・青粒		
95	95	X40Y27 Ⅱ層	中手土器類	土器		7.8	1.8		JST87.6	淡青褐色	赤色粒		
96	96	X40Y31 Ⅱ層	中手土器類	土器		7.8	1.8		JST87.6	淡青褐色	赤色粒		
97	97	X20Y32 Ⅱ層	中手土器類	土器		8.3	1.7		JST7.7	灰白色	青粒	内側10cm	
98	98	X20Y17 1層	中手土器類	土器		8.9	1.7		JST7.7	灰白色	青粒	大穴付裏	
99	99	X30Y26 1層	中手土器類	土器		11.6			JST87.6	二重-褐色		打芯油灰	
100	100	X30Y39 1層	中手土器類	土器		12.0			JST87.6	深褐色	赤色粒・青粒		
101	101	X30Y18 1層	中手土器類	土器		7.7	2.6		JST87.6	深褐色	白色粒		
102	102	X30Y43 Ⅱ層	灰土	罐体	40.0		V面	JST8.0	深褐色	赤色粒・青粒		青釉系灰土	
103	103	X20Y23 1層	罐体	罐体	40.3		V面	JST9.1	深褐色	青粒		斜口15cm	
104	104	X40Y24 1層	罐体	罐体	31.0		V面	JST7.9	深褐色	青粒		罐底15cm	
105	105	X30Y12 Ⅱ層	灰土	罐体	32.0		V面	JST8.0	深褐色	白色粒・青粒		斜口10cm	
106	106	X30Y25 Ⅱ層	灰土	罐体	33.0			JST8.1	灰白色			斜口10cm各設置	
107	107	X30Y25 Ⅱ層	灰土	罐体	33.0			JST8.1	青灰色			斜口10cm各設置	
108	108	X30Y25 Ⅱ層	灰土	罐体	33.4			JST8.1	青灰色			斜口10cm	
109	109	X30Y13 1層	灰土	罐体	11.6			JST8.0	灰白色				
110	110	X30Y11 1層	灰土	罐体	15.4			K30.9	灰白色				
111	111	X30Y33 1層	灰土	罐体	15.5			K30.9	灰白色	白色粒・青粒			
112	112	X30Y45 1層	灰土	罐体	9.9			K30.9	灰白色				
113	113	X30Y36 1層	灰土	罐体	12.0			JST87.6	青灰白色	青粒		罐底5cm	

第26表 手洗野赤浦遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(4)

第27表 手洗野赤浦遺跡 木製品一覧(1)

件名	遺物	写真図版	遺構	出土点	種類	法量(cm)			材質	考
						長 S	幅	厚 S		
186	J	114	SK 235		無	25.2	17.2	3.3	アカガシ重属	
	Z	114		X42Y43 II層	下歯	12.9	8.6	3.7	ヒノキ	
	J	114	SD 6		曲物	16.6	12.5	0.3		
	4	114	SE 41		曲物	44.0	(20.6)	0.7	ヒノキ	
	5	115	ST 41		曲物	37.0	26.0	0.4	ヒノキ	有輪年代 No3
	6	115	SE 41		曲物	(41.0)	(10.3)	0.3	ヒノキ	
	7	115	SE 41		曲物	(39.0)	7.4	0.2	ヒノキ	
	8	115	SE 41		曲物	37.0	(14.0)	0.4	ヒノキ	
187	9	116	SE 158		曲物	40.5	35.0	0.7	スギ	
	10	115	ST 158		曲物	39.0	(19.0)	0.5	ヒノキ	
	11	116	SE 183		曲物	61.5	23.6	0.8	スギ	
	12	116	SE 28	上層	角物	39.0	29.0	0.4	ヒノキ	
	13	116	SK 155		曲物	33.6	(8.0)	0.3	ヒノキ	
188	14	117	SD 4	X42Y47	円形板	(13.8)	(4.1)	0.6	ヒノキ	
	15	117	SD 6		成枚	16.7	3.8	0.5	ヒノキ属	
	16	117	SD 156		円形板	24.7	(2.3)	1.1	スギ	
	17	117	SE 28	上層	円形板	15.8	(2.9)	0.6	ヒノキ	
	18	117	SE 40		円形板	12.8	2.7	0.7	サワラ	放射性炭素年代 No1
	19	117	SE 158		漆器碗	16.0	(2.4)	ブナ	内外面黒色, 内面赤色紋・漆器分析 No7	
	20	118	SD 6		漆器碗	(1.7)	(5.6)	ブナ	内外面黒色, 内面赤色紋・漆器分析 No2	
	21	118	SE 28	上層	漆器碗	(1.3)	(5.4)	モクレン属	内外面黒色, 内面赤色紋	
	22	118	SD 110	X34Y34	漆器碗	(4.4)	6.7	ブナ	内外面黒色, 内面赤色紋・漆器分析 No6	
	23	118	SD 4	X41Y46	漆器碗	(4.2)	(7.8)	ブナ	内外面黒色, 内面赤色紋・漆器分析 No1	
	24	119	SK 47		漆器碗	16.0	6.4	8.0	トチノキ	内外面黒色, 内面赤色紋・漆器分析 No5
	25	119	SE 40		漆器碗	(5.6)	(7.5)	ブナ	内外面黒色, 内面赤色紋・漆器分析 No3	
189	26		SD 110	X29Y33	漆器碗	(1.8)	(6.6)	ブナ属	内外面黒色, 内面赤色紋	
	27	120	SE 40		漆器皿	7.8	2.4	5.2	ブナ	内外面黒色, 内面赤色紋・漆器分析 No4
	28	120	SD 216		漆器皿	9.0	2.3	6.2	ブナ	内外面黒色, 内面赤色紋・漆器分析 No8
	29	120	SD 216		漆器有段皿	12.0	2.1	8.0	ブナ	外黒色, 内面赤色・漆器分析 No9
	30	121	SE 183		折載	28.8	16.6	0.6	ヒノキ	有輪年代 No1
	31	121	SE 183	②層	折載	27.0	(11.5)	0.4	ヒノキ	
	32	121	SE 183		折載	29.0	13.3	0.6	ヒノキ	有輪年代 No2
	33	120	SI 28	上層	丸	(14.4)	7.3	1.5	マメ科(エンドウ, ササゲ等)	
190	34	122	SP 280		柱	36.6	17.4	13.1	サイイチ	
	35	122	SP 281		柱	31.4	16.9	15.1	クリ	
	36	122	SI*253		柱	12.3	8.1	7.1	ウバモモ	放射性炭素年代 No5
	37	122	SP*225		柱	17.6	9.8	9.6	オニグルミ	放射性炭素年代 No3
	38	122	SP 237		柱	11.1	12.8	12.8	カバノキ属	放射性炭素年代 No6
	39	122	SP 238		柱	14.2	15.7	14.0	クリ	放射性炭素年代 No4
191	40	123	SP 21	上層	柱	38.2	10.6	10.6	クリ	
	41	123	SP 105	上層	柱	32.1	10.9	9.5	クリ	
	42	123	SP 29	上層	柱	31.1	8.6	7.5	クリ	
	43	123	SP 23	上層	柱	22.1	17.1	13.6	クリ	
	44	123	SP 20	上層	柱	95.0	17.4	17.4	イタヤカエデ	
192	45	124	SP 258		柱	66.0	22.6	17.6	クリ	
	46	124	SP 258		柱	23.7	7.7	6.7	ハンノキ	
	47	124	SP 239		柱	57.2	12.2	12.2	クリ	
193	48	125	SP 132		柱	41.6	25.0	20.0	ヌルダ	
	49	125	SP 51		柱	35.7	14.0	11.3	クリ	

第27表 手洗野赤浦遺跡 木製品一覧(2)

編図	遺物	写真図版	遺 情	出土地点	種類	法量(cm)			材質	備考
						長さ	幅	厚さ		
193	50	125	SP 65		柱	18.2	16.3	13.4	リョウブ	
	51	126	SP 205		柱	9.2	6.8	6.1		
	52	126	SP 285		柱	40.1	15.5	14.5	クリ	
194	53	126	SD 216		枕	24.3	7.1	3.5	アカマツ	
	54	126	SE 40		柱	26.3	12.1	11.2	クリ	
	55	126	SP 135		柱	48.8	22.0	20.2	クリ	
	56	126	SK 233		柱	33.0	12.0	9.7	クリ	
195	57	127	SE 158		既成木製	(16.3)	2.8	0.6	ウルコ背(ヨリチヤマクシ等) 国書	
	58	127	SD 6	X47Y34	加工板	(10.8)	8.0	0.7	ヒノキ	
	59	127	SD 6		加工板	19.0	6.7	0.8	ヒノキ	
	60	127	SD 4	X41Y48	加工板	6.9	(5.4)	2.5	ヒノキ質	
	61	127	SD 6		加工板	7.6	6.5	3.9		
	62	128	SD 4		加工板	22.6	(2.9)	0.8	ヒノキ	表面炭化
	63	128	SE 40		加工板	23.4	12.2	2.3	サワラ	
	64	128	SE 183		加工板	27.0	4.2	1.3	スキ	
	65	128	SE 183	底層	加工板	23.5	6.6	0.4	ヒノキ	
	66	128	SE 183		荷物?	(15.9)	3.4	0.5	ヒノキ	
	67	128	SE 183		詰材?	22.7	3.7	3.5	サクラ質	放射性炭素年代 No.2

第28表 手洗野赤浦遺跡 石製品一覧

編図	遺物	写真図版	遺 情	出土地点	種類	法量(cm·g)			材質	備考
						長さ	幅	厚さ		
197	1	129	SD 6		五輪塔	12.7	13.7	8.5	2320	凝灰岩
2	129		X43Y31 I層		石鉢片	7.0	9.0	3.0	202.5	砂岩
3	129	SD 18	X46Y29 II層		砥石	10.0	4.3	1.6	92.1	凝灰岩
4	129	SD 18	X48Y29		砥石	8.5	3.2	1.0	41.4	頁岩
5	129	SD 18	X48Y29 III層		砥石	6.6	3.0	2.1	55.2	凝灰岩
6	129	SB 41			砥石	10.3	8.7	5.1	682	砂岩
7	129	SD 6			砥石	13.5	9.3	6.0	1260	砂岩

第29表 手洗野赤浦遺跡 金属製品一覧

編図	遺物	写真図版	遺 情	出土地点	種類	法量(cm·g)			材質	備考		
						長さ	幅	厚さ				
198	1	130		X35Y30	鉄(無機元質)				24.8	2.5	1.07	250
	2	130		X37Y14	鉄(錫有元質)				2.31	2.2	1.30	208
3	130		X49Y20		鉄(大根通質)				2.38	2.4	1.05	258
4	130		X25Y30		鉄(天糸元質)				2.46	2.4	1.16	279
5	130		X28Y30		鉄(無機元質)				2.37	2.3	1.32	266
6	130	SD 18	X46Y27		鉄(無機元質)				2.32	2.3	1.42	217
7	130		X38Y16		鉄(政和通質?)				2.33	1.4	0.79	107
8	130		X25Y30		鉄(各末通質)				2.42	2.4	0.17	322
9	130		X47Y38 I層		鉄質吸盤				8.6	0.9	0.1	8.6
10	130		X26Y29 II層		錫鉄錠製品				6.7	0.6	0.3	6.4

第30表 手洗野赤浦遺跡 骨角製品一覧

編図	遺物	写真図版	遺 情	出土地点	種類	法量(cm)			材質	備考
						長さ	幅	厚さ		
196	1	130	SK 12			14.5	1.3	0.2	43	無骨

#### 4 地震痕跡（第199・200図、図版98・99）

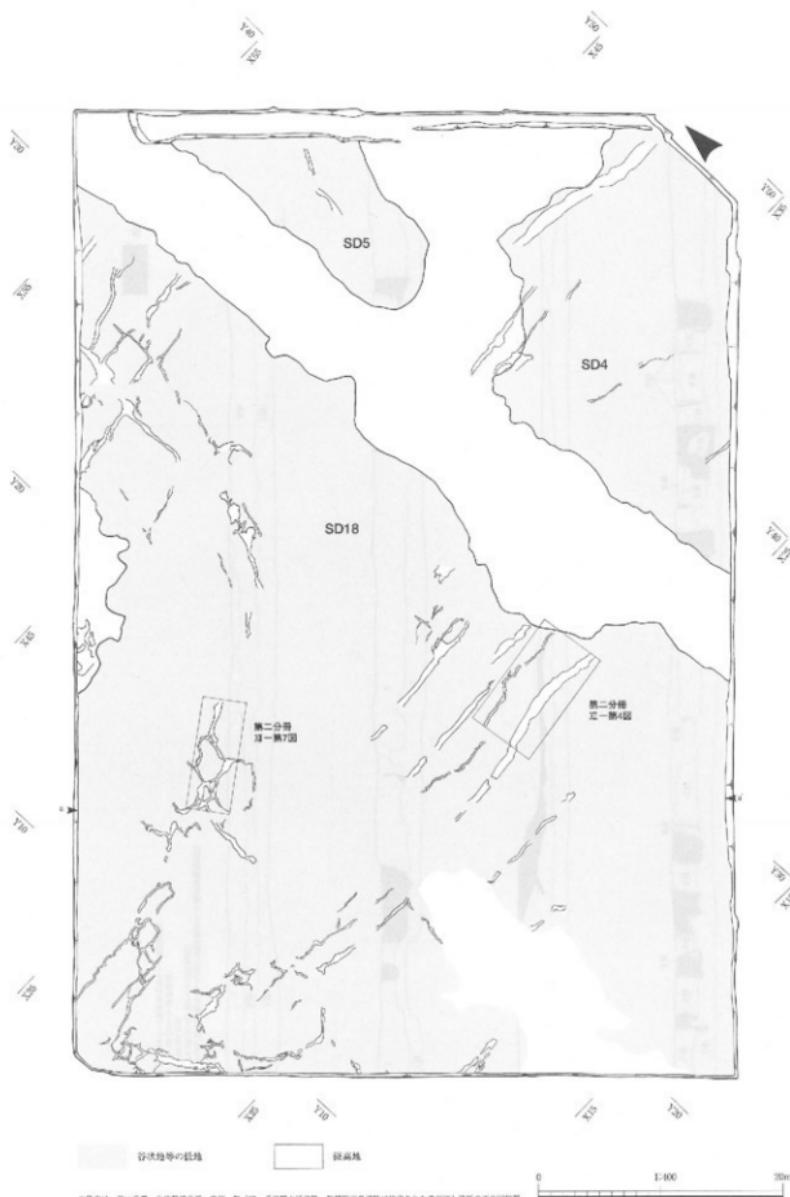
手洗野赤浦遺跡では、重機による表土掘削後直ぐに大きな砂脈を数条確認し、調査当初はあまりに大きな砂脈のためそれを噴砂と認識できなかったが、断面観察や寒川氏による視察によりそれを確認するに至った<sup>10</sup>。調査を進めると噴砂は、ほとんどの遺構を切り変形させ、遺物（中世土師器皿）までも割っていて、しかもこの噴砂によって地下水を吸い上げ遺構の検出や崩壊に悩まされた。調査時でこのような状態であったから、実際に地震の起った時期は甚大な被害であったのであろう。なお、手洗野赤浦遺跡で検出した地震痕跡は、噴砂のみである。

##### （1）噴砂

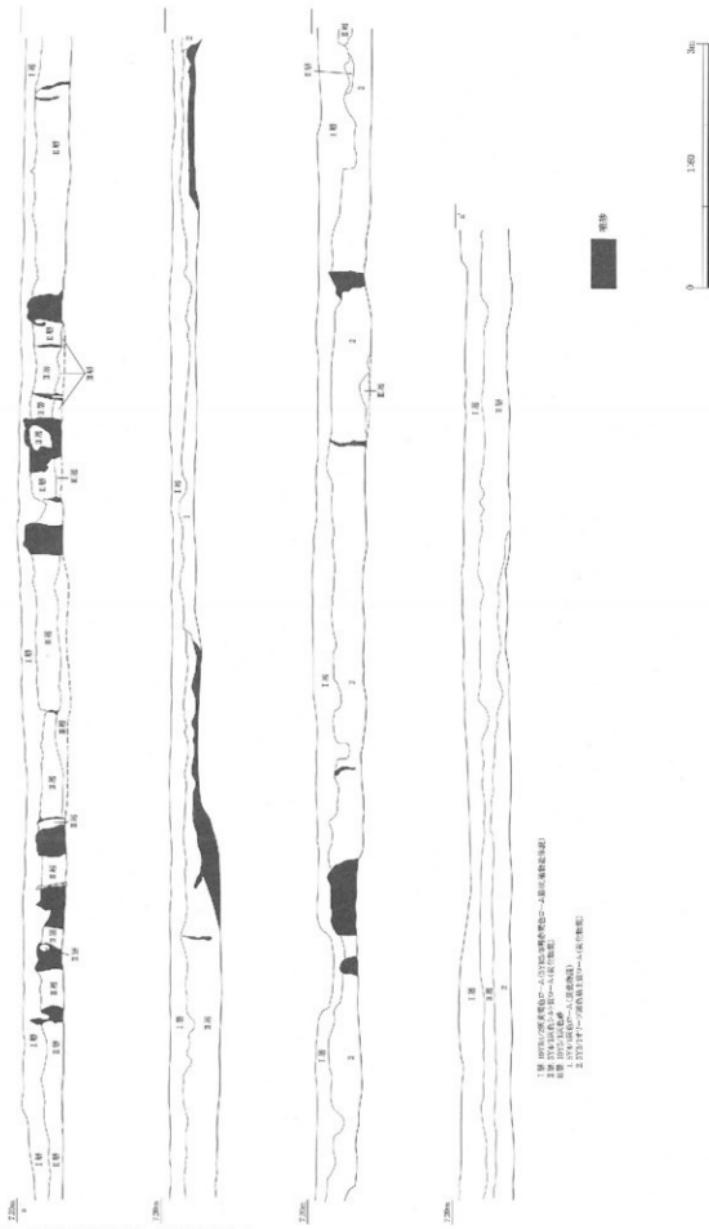
噴砂は、下層中世遺構確認面であるⅢ層の下にあるⅣ層（砂層）から吹き出し、上層の中世～近世遺物包含層にあたるⅡ層の上面で吹き上がる。噴砂の時期は、近世以降で旧表土より下という土層を引き裂いていることから飛越地震（1858年）と比定される。砂脈の幅は約20cm～1mで、砂脈の長さは長いもので14m以上ある。砂脈の走る向きは、概ね東西方向と南北方向の2方向に限定され、特に東西方向に走るもののが多い。これらの様相は、土層の堆積と地山の凹凸に対応しているようである。それは、SD 5の部分では南北方向、SD 4の部分では東西方向と遺構の状況を反映してその向きを変えている。また、西側の大部分を占める一段下がった部分（SD 18）では東西と南北方向の2方向のものがあるが、これはまず震源地の跡津川断層がある東方からの揺れによって南北方向に噴砂が形成され、つづいて西方にある西山丘陵によるなぎさ現象で東西方向に噴砂が形成されたものと見られる。つまり、噴砂の吹き上がりは中世～近世の包含層直上に見られるものの、この形状はその下に作られた遺構や地形を大きく反映したものなのである。

飛越地震は、富山県と岐阜県の境にある跡津川断層で発生した大地震で、マグニチュードは7.0～7.1と推定されている。この地震は、富山平野を中心に加賀・飛騨・越前に甚大な被害をもたらした。特に県東部では、立山カルデラが崩壊（大鳶崩れ）し、土石流となって平野部に押し寄せ、民家や山畑に被害をもたらせ、現在でもその爪痕は残っており、富山の地震と言えばこの飛越地震のことを指すようなものである。手洗野赤浦遺跡のある県西部の高岡市では、『瑞龍寺文書』などに地向が削れて水や砂が吹き出したと記されており、文書に記されていた様子が今回の調査で明らかになったと言えよう。

（町田賢一）



第199図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 噴砂



第200図 手洗野赤浦遺跡 遺構実測図  
地震痕跡 噴砂

# 第V章 近世北陸道遺跡

## 1 遺跡の概要

### (1) 概 要

今回調査した近世北陸道遺跡は、国道8号線と市道立野笛川2号線の交差点東側に位置しており、この市道を挟んで南北に調査区を設定した。

近世の北陸道は、幕藩体制と参勤交代制の確立によって近世初期に整備されているが、越中国内においてはその後も改変が行われた。当時の北陸道は俱利伽羅峰を越えて、砺波平野北部を東西につききるルートであったが、慶長14（1609）年に前田利長が高岡に居城するにあたり、城下の繁栄のため、高岡を通る迂回路「高岡廻り街道」の整備を開始した。整備には時間を要し、正保4（1647）年の『越中道記』には「大道」ではなく、「脇道」として記述されているが、文政13（1830）年の『加能越三州地理志稿』には「官道」と記述されており、本街道の扱いがなされている。この街道に前出の市道が比定されているため、近世北陸道遺跡として調査を行ったものである。

調査では溝5条・不明遺構1基を検出した。溝は北調査区に2条、南調査区に3条で、市道にはほぼ沿う形で伸びている。なかでもSD1とSD2は両調査区の東端から西端まで平行して伸びており、道路の側溝として機能していたと考えられる。この両溝を両側溝と考えられるかどうかだが、SD1とSD2の心々距離は約10mもある。寛永17（1640）年の富山藩分封を契機に、高岡廻り街道も含む「下街道」の整備が開始されたが、この下街道を調査した大島町水上・本開発遺跡の例（道路使用部分：約2.7m・新側溝の心々距離：約5～5.5m）と比べると、あまりにも規模が大きすぎる。また、『越中道記』では当該区間の「道幅武間」（約3.8m）と記述しているが、この「道幅」を道路使用部分と捉えても、両側溝の心々距離が10mになることはまずない。どちらの溝も遺物は少量ながら、時期差はほとんどないように考えられるのだが、市道部分は調査できなかったこともあり、それぞれを道路の側溝と考えることはできるが、両溝をもって、対となる側溝と考えることは難しい。

道路面は市道の下にあると考えられるが、調査は行っていない。市道側の調査区端と検出した溝との間の狭い空間ではあったが、路面の手がかりを得ようと精査を行った。溝から市道に向かってやや傾斜が上がっていくこと、市道に近い部分に小炒利が多く散らばっていること、土の締まり具合が溝の外側に比べて内側のほうが締まっている感があることがわかった。特に十の締まり具合は、南調査区の東側において顕著であった。

今回の調査では、道路の構造は市道部分が調査できなかったために詳細不明であり、側溝と考えられる溝を検出したのみである。現在の道路は近世北陸道をほぼ踏襲しているため、近世北陸道自体の調査例が少ない。今後の資料の増加に期待したい。

### (2) 土 層

現況は南北調査区のいずれにおいても東側は水田、西側は工場跡地となっており、西側は砂および砂礫が約60cm盛土されていた。盛土の下はⅠ層（耕作土）で暗オリーブ褐色シルトが約20cm堆積し、Ⅱ層は灰オリーブ色砂質ロームで、遺構検出面である。耕作土直下が遺構検出面となり、耕作土が浅いことから、遺構検出面が削平されている可能性がある。遺構検出面の標高は11.6～11.8mである。

## 2 遺構と遺物

### (1) 溝

#### 1号溝（SD 1, 第202・203図, 図版132～134）

北調査区を東西に伸びる溝。南側にあるSD 3との切り合いは、ややSD 1が切っていると考えられる。幅は62cmで、溝の内部は規則性なく連続する土坑状を呈し、深さは浅い部分で10cm、土坑状の深い部分で36cmを測る。埋土は深い部分で2層に分かれ、浅い部分は単層である。

遺物は產地不明陶器擂鉢（1）、伊万里の青磁火入れ（2）、金属製の火箸（15）が出土している。1は内外面に鉄軸、体部外面はロクロナデを施す。鉗口は1単位14条以上を数える。19世紀頃のもの。

#### 2号溝（SD 2, 第202・203図, 図版132～134）

南調査区を東西に伸びる溝。東側にあるSD 6を切る。幅は0.7～1.4mと均一ではなく、SD 1と同様に、溝の内部は規則性なく連続する土坑状を呈し、深さは浅い部分で12cm、土坑状の深い部分で30cmを測る。この深い部分は大まかに上下2層に分かれ、浅い部分は単層となる。土層断面から、先に土坑状の深い部分が掘られ、埋没した段階で浅い部分が掘り直されたものと考えられる。

遺物は越中瀬戸（3～5）、伊万里（6）、瀬戸磁器（7）、曲物底板（14）が出土している。

3・4は越中瀬戸の皿。3は体部内外面に鉄軸を施す内禿皿。4は体部外面と内面見込みまで鉄軸を施す。底部は糸切り痕を残す。いずれも18世紀のもの。5は火入れか。内外面に鉄軸を施す。6は伊万里の鉢。蛇の目高台で、見込みに山水文、体部外側には源氏香文を描く。18世紀以降のもの。7は溝の浅い部分から完形で出土した瀬戸磁器の小碗で、端反り形、見込みに「米」文、体部外側に桜花形のスタンプを押し、その上に呉須をかける。明治初期以降のもの。14は曲物底板で、直径8cm、厚さ0.6cmのスギ材である。表面の緑と裏面に漆を塗布し、側面にはみられない。漆は底板をはめ込んだ後、底板と側板の接着のため表面（内底面）の縁に塗ったものと考えられるが、幅が0.5～1.5cmと均一ではなく、粗い仕上がりである<sup>註6</sup>。

#### 3号溝（SD 3, 第202図）

北調査区の東側で東西に伸びる溝。SD 1よりも市道側を平行して伸び、西端で切られている。幅は40cm、深さは5cm程度と浅い。埋土は単層である。遺物は出土しなかった。

#### 5号溝（SD 5, 第202図, 図版132）

南調査区の東側で東西に伸びる短い溝。SD 2・6よりも市道側を平行して伸び、西端でSD 6と切り合うが不明である。幅は36cm、深さは14cmで、埋土は単層である。遺物は出土しなかった。

#### 6号溝（SD 6, 第202図）

南調査区の東側で東西に伸びる溝。SD 2よりも市道側を平行して伸び、SD 2に切られている。幅は0.4～0.8m、深さは6cmと浅く、埋土は単層である。遺物は出土しなかった。

#### 4号不明遺構（SX 4, 第202・203図, 図版132～134）

北調査区の西端にある。他の遺構とは異なり、南北に伸びているように見えるが、調査区外に広がっているため、土坑か溝かも不明で、搅乱の可能性もある。長さは2.5m、深さ10cmで、埋土は単層である。遺物は出土しなかった。

### (2) 遺構外出土遺物（第203図, 図版133・134）

今回の調査では耕作土直下が遺構検出面であったため、遺物包含層は存在しなかった。ただ、遺構内出土遺物がごく少量であったため、ここではI層とした耕作土および遺構検出面直上で採集した遺

物を取り扱うことにする。

8は越中瀬戸の皿で、体部内外面に鉄軸を施し、底部は割りだし高台となる。9は唐津で京焼風の碗。10~13は伊万里で10~12は碗。いずれも18世紀のもの。13は磁器小杯で、体部外面に文字が書かれる。16はキセルの吸口。このほか、越中瀬戸匣鉢、刷毛目唐津、明治以降の磁器招絵皿などが出土した。

(新宅 茂)

第31表 近世北陸道遺跡 溝一覧

遺構	遺構種類	規模(m)		出土遺物	時期	伴 国	写真図版	特記
		幅	深さ					
SD1	溝	0.62	0.96	陶器(1)・伊万里(2)・火薬(3)	近世・近代	201-202	131-132	>SD3
SD2	溝	1.40	0.90	鐵(4)・轟(5)・火薬(6)・伊万里(7)・備物底板(8)	近世・近代	201-202	131-132	>SD6
SD3	溝	0.40	0.05	なし	近世・近代	201-202	131-132	<SD1
SD5	溝	0.36	0.14	なし	近世・近代	201-202	131-132	
SD6	溝	0.80	0.06	なし	近世・近代	201-202	131-132	<SD2
SK4	不明	2.50	0.10	なし		201-202	131-132	

第32表 近世北陸道遺跡 土器・陶磁器一覧

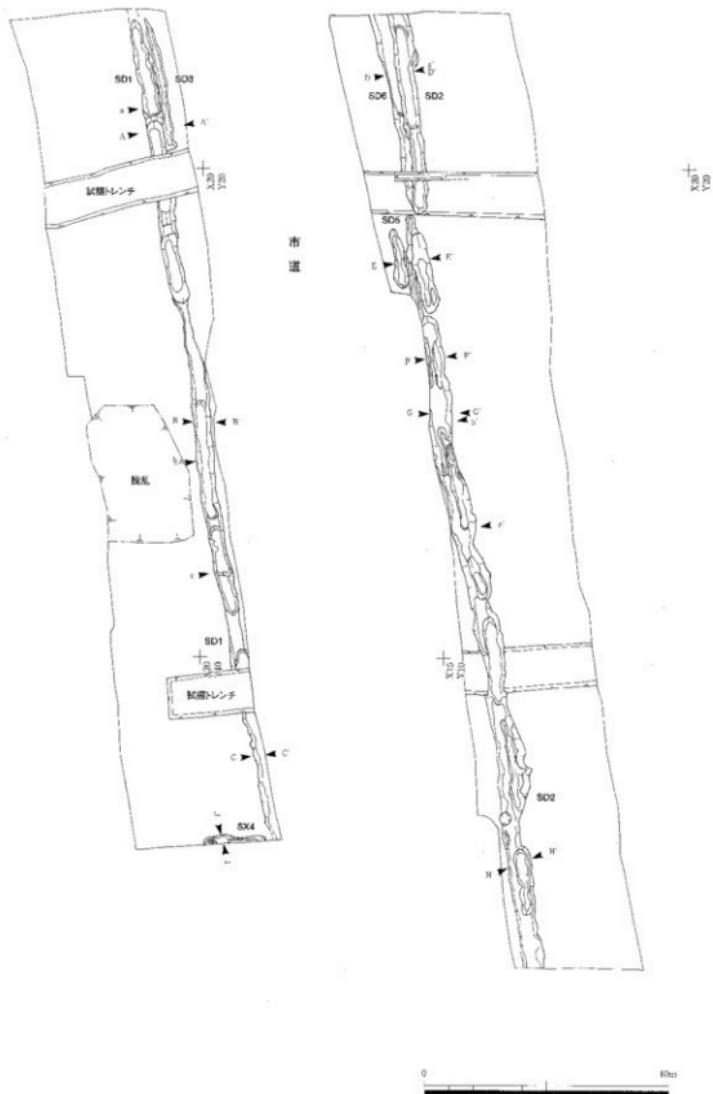
博 国	遺物番号	写真図版	遺構	出土地点	種類	器種	法量(cm)			胎土色調	胎土の特徴	釉色調	釉裏	備考	
							長	幅	厚						
303	1	133	SD1 X21Y22	陶器	箱鉢			19	19	19	25YR2/4C(赤褐色)	10YR2/2 黒褐色	黒褐色		
	2	133	SD1 X21Y22	伊万里(青磁)	火入れ			19	19	19	10YR1/4A(灰白色)	10Y7/1 灰白色	青磁		
	3	133	SD2 X17Y23	施上窯(4)	皿			18	18	18	10YR5/2 灰白色	砂粒	75YK3/2 黑無色	施上(4)	
	4	133	SD2 壁下溝	越中瀬戸	皿			4.0	18	18	75YR2/3(4)に赤褐色	75YR4/3 赤色	跳ね		
	5	133	SD2 X14Y5	施上窯(7)	火入れ	14.0			10	10	10	10YR7/2(5)に赤褐色	砂粒	75YR2/7 灰褐色	跳ね
	6	133	SD2 X15Y11	伊万里	鉢	18.8	5.6	10.8	18	18	10BGT/1(羽目青色)	25PDS/4(くすんだ青色)	透明釉 染付		
	7	133	SD2 X15Y11	窓戸	小判型(5)	8.6	4.5	3.3	明治初期	10YR8/1 灰白色	SPD3/2(くすんだ青色)	透明釉 染付			
	8	133	X19Y6 Ⅱ層	施中窯(7)	皿			5.4	18	18	10YR7/1(くすんだ青色)	10YR3/1 黑褐色	跳ね		
	9	133	E層	京焼風津	鉢			5.0	18	18	25YR8/2(灰白色)		透明釉		
	10	133	X18Y9 Ⅱ層	伊万里	鉢	11.8			18	18	10YR8/1 灰白色	10NG3/2(薄い青色)	透明釉 染付		
	11	133	X19Y8 Ⅱ層	伊万里	瓶	14.0			18	18	NR/D(灰白色)	25PDS/4(くすんだ青色)	透明釉 染付		
	12	133	X21Y13 Ⅰ層	伊万里	鉢				18	18	10YR8/1 灰白色	SPB4/6(くすんだ青色)	透明釉 染付		
	13	133	X19Y14 Ⅰ層	伊万里	小杯	6.0					NB/D(灰白色)	SPD3/6(くすんだ青色)	透明釉 染付		

第33表 近世北陸道遺跡 木製品一覧

博 国	遺物番号	写真図版	遺構	出土地点	種類	法量(cm)			材質	備考
						長	幅	厚		
203	16	134	SD2	X15Y12	曲物底板	8.0	8.0	0.6	スギ	漆器分析No.15

第34表 近世北陸道遺跡 金属製品一覧

博 国	遺物番号	写真図版	遺構	出土地点	種類	法量(cm/g)			材質	備考	
						長	幅	厚			
303	15	134	SD1	X16Y23	火薬				25.30	0.60	0.55
303	16	134		X20Y8 Ⅱ層	薬管(吸い口)				3.50	0.90	0.10



第201図 近世北陸道遺跡 遺構全体図 (1:200)